
ふたいろの幕がおりるまで～青潟大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりの幕があるまで～青潟大学附属シリーズ中学編

【Zコード】

Z6787E

【作者名】

舞夜じょんぬ

【あらすじ】

中学一年・秋。立村上総、羽飛貴史、清坂美里の間に流れた宿泊研修三日目その後遺症。上総はふたりを傷つけたことに苦しみ、貴史は上総の裏切りだとしか思えず、美里は繊細な上総の感情を受け止められない。疎遠になつた小学時代の友だち藤野詩子から招待された日舞おさらい会をきっかけに、三人の想いは想像しなかつた感情をあふれさせていく……青潟大学附属シリーズ第九作

1 立村上総のまだ伝えてない言葉

どこかで見たことがある。いやといつほど会ったことがある。近づかなくても一発でわかる顔している。あそこにいるのは、あの人だ。

上総は廊下奥で数回頭を下げつつ、声高にしゃべっている女性の姿を認める。窓際に移動し立ち止まつた。応接室とよばれる部屋が一階には用意されていて、学校を訪れるお客様の多くはそこに招き入れられる。たまに掃除当番で入ることもあるけれども、ちゃんとお茶やらソファーやら、何から何まで用意された豪華な部屋だつた。もっとも人がめつたに来ないので、掃除することもないくらいだが。

何しに来てるんだよ、あの人。

舌打ちしつつ、様子をうかがう。

髪は軽く束ねている。焦げ茶のブレザーとズボンで身をまとめている。たぶん口紅だけは真っ赤だろう。見た目二十代後半くらい。好みにもよるがきれいと思う人は思うだろう。

実際三十四だつて分かつてるからな。俺の方も。

たぶん言わなければわからないだろう。彼女に、今年十四才のひとり息子がいることなんて。しかもその息子が。

「それでは、また機会がございましたらよろしくお願ひします」

深く一礼した後、その人は大股に歩き始めた。向かう方向は来客用玄関。これまたこぎれいにされていて、ふかふかのスリッパが用意されていいるというところだ。生徒が遅刻した時にもここを使用す

る。違反カードと一緒に入ることを許される、生徒にとっては覚悟の場所である。

「歩近づく」と感じる強烈な威圧感。

ようによつてこんなとこで。

上総は観念して、窓辺にもたれかかった。九月の半ばともなるとブレザーを羽織ってもへんに思われなかつた。すでに夏服から冬服への切り替えも行われてゐる。つつむいて、できれば気づかぬまま通り過ぎてくれればいい、そう思つた。

甘い。速度を落とさずにその人は廊下を斜めにつつきつて田の前に立つた。

「上総、あんたなんでこんなとこにいるの」

「母さんこそ何の用だよ」

廊下には誰もいなかつた。それが幸いなり。上総は母がやつぱり、服に合わない派手な口紅をつけてきているのを見て取つた。

「先生に呼び出されたわけではないんだる」

「仕事中にあんたの成績が悪いこと知らされたつて、別に私には関係ないわよ。そんなに甘やかしてもらえてるなんて思つんじゃないわよ」

相変わらずだ。この人は。

廊下の天井を見上げ、冷たく答えることにした。左側を指した。

「ほら、客用玄関はあつちだから」

「ははん、上総、あんたここで相当悪いことしてるんでしょ?」

「なんでそういうことになるんだよ」

「早く私を追い出しだがつてるんだから」

「用事があつて通つているだけだる。なんでそつつかつてぐるんだよ」

母の口調からすると、応接間での出来事はいまひとつ氣に入らない形に終わつたらしい。これが自宅だったら非常に怖いことだけれども、幸い学校は公共の場所だ。手は飛んでこないだろ?。

「上総、あんた中学に入つてからすつかり親に対する態度、なめく

さつてるわね。いつ言う時、小学校の頃のあんただつたらもつと慰めとかなんとか言ってくれたもんじゃないの？ 全く、この学校の先生ときたら

「そうとう母は『機嫌斜めらし』。

「わかつたよ。何あつたんだよ」

仕方ない。玄関まで来客をお送りするといつ顔をして、上総は歩き出した。肩を並べて五メートル先の来客用玄関までお送りすることにした。

背がまだ、母に追いついていないのが情けなかつた。廊下に伸びた影がやはり、一回り小さかつた。

「全く頭くるつたらないわよ。遠い存在の日本伝統芸能をもつと身近に感じられるように、和楽器と洋楽のコラボレーションを中心としたイベントを行います。ぜひ御校の生徒さんたちにも勧めていただけませんか、つてチケットを持ってきただけよ。学生さんたちだから高いチケットじゃないわよ。招待券でいいつかつてことで用意したわよ。あんたもいることだし」

「あんたつて人を呼びつけにするなよ」

ようやく理由が判明した。九月にそういうのがあるとは上総も知つていた。招待状の宛名も書かされたし、当口は手伝わされた。今回もそうだろう。一学期の段階で「もつと友だちにも宣伝してちょうだい」と命令され、何人かには話していた。

「でも、どうしてだめだったの」

「ライブの場所がね、お酒を出すところだから未成年の学生さんはだめだつて。ばかよね。頼まなかつたら出さなければいいんだから。そんなこともわからないのかなあ。馬鹿みたいよ。本当にあなたの学校の人たちは」

「そういうところに入れたのはそつちだらつ。鬼のよつて勉強させて」

「ええ、そうよ。あんた何があるとこつも泣きじやくつてたくせに

ね」

事実だつたから何も言えない。すのこの上に立つたまま、母がパンプスに履きかえるのを見ていた。スリッパを渡された。早くしまえ、つてことだ。

「それとね、上総。十月五日のことだけ、人数に数えさせてもらつていいでしよう? 当然よね。あとで家に電話かけるわ」さつと手を挙げて母は、来客用玄関を出て行つた。

玄関のたたきにうす橙の光が広がるのを上総は黙つて眺めていた。秋のかすれたほこりっぽい匂い。咽が痛くなりそうだつた。

一度教室に戻つてから図書室に寄るつもりだつた。今日は委員会もないし、取り立てて用事もない。放課後の時は貴重だ。日が暮れる前に大急ぎで帰ろうと決めた。

「立村、おい」

振り返ると、羽飛貴史がワイシャツ姿のままで待つていた。

「ああ、羽飛か、どこ行つてた?」

「美術室に呼び出されたんだ。それよかお前さつきさあ、すつげえ美人と歩いてただろ」

にやにやしながら貴史は上総の肩に手をやつた。

「見たぞ、ほら応接室から出て来た人とさあ。お前、知り合い?」軽い口調だつた。

よりに寄つて、羽飛に見られてるのかよ。
しくじつたな。

どこまで見られているのかわからない。話まで聞かれていたら一発でばれるだろ? 自分のことを「上総」と呼び捨てにするのは親しかいない。とにかくみつともない。

「まさか、そんなんじゃないよ。知らない人」さらつと答えた。

肩から貴史の手が離れた。一緒に日が落ちるように笑みが消えて

いつた。

「いつこいつ」と、上総は敏感すぎるほど敏感だ。

「あ、つそ」

口先で吹くように言葉を返した後、貴史は黙つて廊下を突つ切つていつた。並ぶと貴史の方が影長かつた。

別に隠したわけじゃないけどさ。

なあに言つてるんだよって言われたら、「「あん、うちの親だつて」って答えたつてよかつたのに。

いつもの羽飛じやないな。

いや、九月に入つてからはいつもかな。

原因是自分にあるとよく自覚している。外の街路樹も、学校内の樹木も、まだとりわけ色を変えているわけではない。銀杏が黄色く色づくのも、紅葉がうつとおしいほど熱く燃え滾るのも、まだまだ先の青鴻の気候だ。なんとなくなかなかまどの実が青から黄色にふくればじめている程度だ。こんな景色で「もつ秋ですね」なんて言う奴がいたら、よっぽど植物に詳しいか自分と同じく夏が苦手で気温の下がる季節を求めている奴かのどちらかだう。どうすればいいんだろう。

図書室に向かい歩き出し、途中先生とすれ違つては一礼した。誰も上総に向かつて何かを言うわけではない。誰も怒つていない、誰も気づいていない。それでも上総にはわかっていた。

絶対に、傷つけてるんだ。

でなかつたら、もつと違つた答えが貴史から返つてくるはずだった。

あいつだつたら絶対、「なあーに」、冗談言つてるんだよ。あれ、お前の姉さん？ 腹違のなんとかつてよくあるだろ？ だつてそつくりだつたもんなあ。それともなにか？ 美里に内緒の年上

の彼女？ ちくらねばならねえぞそれだと…」 とか言つて、茶化してくれたはずなんだ。

図書室で借りた本を二冊取り出し、カウンターに渡した。本棚に目を走らせるのも、借りたい本を選び出すのも面倒くさかった。数人残っていた友達に一声かけた後、上総は図書室を出た。

どうすれば、つぐなえるんだろう。

どうすれば。」

それには、嘘ついてしまったんだろう。

入学式の日、初めて声をかけてくれた同級生、それが羽飛貴史だった。

廊下に整列させられてたまたま貴史の前に並んだのがきっかけだった。
「立村って、言つたよな。俺は羽飛。よく覚えておいてくれよな」
ぽんと肩に手を置かれて笑顔で話し掛けられたことを覚えている。
ろくに言葉も出なくて、ひたすら教室では学校パンフレットをにらみつけ、何とかぼろが出ないようにしようと、椅子に浅く腰掛けていた日のことを覚えている。

羽飛とは、嫌われないようになつたみたいだ。

毎日気を張つて学校に通つていた一年、いろいろあつたけれども男子連中とはうまくやり、女子も清坂美里という、もつたいないくらいの彼女ができた。信じられない。自分に似つかわしくないことがかりだった。どうしても受け入れられない部分があるのはしかたないけれど、友だちとしてはみな最高の奴だ。だから、絶対に裏切らないようにしよう。そう決めていたはずなのだ。

あつさり友情放棄している奴が、俺だもんな。まつたく。

八月末の、あの事件を思い出すと自転車をこぐ足がとろくなりそ

うだ。

手すりをすばり降りたい気分で上総は玄関へ急いだ。踊り場の窓からは知っている奴が見えなかつた。たぶん、貴史も美里も、先に帰つたのだろう。

2 羽飛貴史のかたづいてない問題

あの顔見たら、ばればれだろ。つたぐ、あいつ馬鹿じやねえの。

美術室を出た時にすっかり舞い上がつていたのに、凧を電線にひっかけてしまつた氣分に陥つた。貴史は廊下の曲がり角を振り向かず歩いていた。いつもだつたら立村を待つていてやるんだが。「おい、なにとろとろしてるんだよ。早く来いよ」つて声をかけるんだが。なんとなく、そんな流暢なことをしたくなかった。

原因是自分でもよくわからない。いつも教室で花札やつている時とか、与太ネタでからかつている時とかだつたらもつと、落ち着いて返事ができただろう。ここ数日、完全に自分が反抗期に突入してしまつた氣がする。限定、立村上総に対してのみ、だが。

そりやあ、年増のべっぴんさんと歩いていたら何かあるのではとも思つるのは当たり前だらう。しかも、立村の顔つきが愛想笑いなしで文句をかましている様子を見たら、そりやあ答えは一つしかないだろう。

あれだけ目が似てるんだぜ。俺じゃなくたつて一発解答だぜ。

貴史の母よりもはるかに若い人だとは聞いていた。二十歳の時に上総を産んで、三十一歳の時に離婚、家を出て行つたといつ。話だけ聞けば不幸な家庭なかもしれないが、語る上総の口調は明るかつた。

「それでも毎月、家の状態が荒れ果ててないか試験しにくるんだよあの人は。ちゃんと季節ごとの飾り付けとか、掃除洗濯がきちんとされているか、まともな食生活を送つてているのか、コンビニ弁当

なんて食べてないかとか」

上総がなぜ、男子にも関わらず「家事一般および季節の行事に詳しいのか、謎はあつさり解けた。おつかない母さんに仕込まれているだけのことだ。日本伝統文化一般のコーディネーターか製作か、よくわからんがマネージャーみたいなことをしているとも聞いた。

俺が気付かねえとも思ったのか。あほんだら。

ポケットに手をつっこむ。こういう時ほんものの不良だつたら、煙草を取り出してすぱっとやるんだろうが、身体によくないことはやめたい。かつこつけるんならガムがいいんだろうが腹がすいたので、こつそり朝買ってきたチョコレートを取り出した。体温でかなり形が崩れていたが食えればよい。銀紙を引き剥がして口にほおりこんだ。たぶん、ばれたら呼び出した。

「貴史、あんたなに口の周りにべつたりチョコレートくつつけるのよ。泥棒さんのひげみたいじゃない。まったく。早く拭きな。自分のハンカチで」

待ち合わせの場所は大学の生協カフェテリアだった。たまに腹がすいた時、よくもぐりこんで「五十円の揚げたてコロッケ」「三十円の山盛りご飯」をトレイに載せ腹に焼きこんだものだった。すでに美里は、四人掛けの真四角テーブルに座つて珈琲ゼリーをすくっていた。

「鏡、見せたげようか」

「あれま。ほんとだ」

ほつぺたまでチョコレートの跡が、猫ひげのように伸びていた。びんぼうたらしつく、銀紙までなめたのがまづかったのだろう。手の甲でこすつてみたが、取れない。美里が大げさにため息をついて、ポケットティッシュをひとパック、提供してくれた。

「いいよ。どうせ学校じゃないんだから。それよかさあ、貴史」

さすがに夕方五時前に、定食を食うのは、食事をこしらえてくれる母に失礼だと思う。貴史も大学いもを八十円分だけ盛つてもらつ

た。

「美里、お前も食つだら」

「やあだ。夜の『ご飯食べられなくなつちゃう』

「太るのがやなんだろ。『じうせ』

「『心配ありがと』」

体重のことをからかうといつもなら怒るのだが、今日はおとなしい。

美里が言い返さないのは、何か真面目に話がある時だ。

今朝、学校に行く途中で、「ちょっと放課後、小学校時代のネタで相談があるんだけどさ、大学のカフェテリアでどう?」と持ちかけられた。別に一緒に帰つたつておなじじやねえかと思つもの、食い物があるのは大きい。美里も同じだらう、といつことで落ち合つたわけだつた。

物心ついた時からの幼なじみであり、男女合わせた中で屈指の親友。

しかもこいつの彼氏が貴史の親友ときた。

これ以上、望むところのない関係だ。

「食いながらでいいだろ。で、なんだ。話つて」

「ほら、詩子ちゃんのことなんだけどさ」

スプーンを加えてすつと引き抜き、美里は貴史の顔を見つめた。

相手が立村だつたらさぞや、ぶつつこして食べてるんだらう

なあ。

想像するのもなにか面倒だ。貴史は大学いもをほおばりうなづいた。

「藤野のことかよ」

「昨日ね、うちの母さんといひひし、詩子ちゃんから手紙が来たのよ
あまり美里は藤野詩子と付き合ひがないはずだが。『じうしたんだ
るひ』。

同じ小学校の同級生だ。気にならないことはない。

髪の長い、美里と対を張るくらいの気の強い女だつた。

一部に熱狂的なファンがいて、一年くらい追いかけてきたものの転校というありがちな終り方だったという、哀れな奴を貴史は知つてゐる。

「お前のところじゃねくて、おばさんところに来たのか?」

「そう。詩子ちゃんの名前になつていてたけど、たぶんお母さんが書いたんじゃないかなって思つたよ。でね、中に一枚入つてたの」

「一枚つてなんだよ。話飛ぶなあ」

「『志遠流日本舞踊おさらい会』とか書いててね、ちゃんと黒くチケット代のところが塗りつぶされてる。手紙は入つてなくて、でも私宛じゃないからうちのお母さんが電話でお礼言つてたよ」

「確かに木村がずっと藤野のこと追い掛け回していて、結局日本舞に藤野を取られたつて泣いてたぜ」

「聞いた聞いた、宿泊研修の時に聞いたよ」

宿泊研修。

思わず、黙りこくつた。

押し入れに押し込んでいたふとんが、一、一の二、で溢れてきたようだつた。

「そういうこともあつたよなあ。それでだ、藤野が日本舞踊やつてるのは聞いたがそれとなにが関係あるんだ?」

「つまりねえ」

美里はしばらく人差し指と親指を擦り合わせていた。いきなり大芋に手を伸ばすと、あつといつ間に口の中へおりこんだ。

「ああつ、俺の貴重な食料を!」

「だつておなかすいちゃつたんだもん。でね」

話を逸らして自分の罪をなしにしようとする美里。こういう奴だ。

「詩子ちゃん初めて大きい舞台に立つんだつて。すつこいきれいな着物着て、衣装つけて、踊るらしいんだ。だからぜひ来てくださいつて詩子ちゃんのお母さんが私に送つてくれたんだと思うんだ。お母さんは私と詩子ちゃんが仲良しだつたと思つていてるから絶対、ね

美里の言いたいことはわからなくもなかつた。

確かに美里は小学校時代、藤野と仲がよかつた。ちょっととしたことで美里がクラスの女子一部から白い目でみられるとき、マシンガンのようにまくし立てて相手を黙らせてしまう。また美里のことを親友だと思い込み、何を考えたのか貴史にまでやきもちを妬く始末だつた。一度「美里をひとりじめするのは、おねがいだからやめて」という手紙を受け取つたことがある。正直、何勘違いしてるんだこいつ、と思うものの、貴史にとつて美里が当時、一番話せる相手だつたことを考へるとしかたないかとも思った。

あえて言おう。六年後半までは確かに美里と藤野詩子の仲は円満だつた。

美里と貴史が同じ青大附中を受験することになるまでは。

最初から美里の家では、内申書がぼろぼろだつたにも関わらず成績が群を抜いていたということで、青大附属中学進学を検討しているらしい。また、貴史の両親も「たぶん美里ちゃんが行くなら貴史も行きたがるに決まつてる。本気でやればあの子も意外と」という計算が働いていたらしい。あつたりひつかかつて受験し、結局貴史と美里だけ合格してしまつた。不合格だつた女子のひとりに藤野詩子がいた。成績からしてもまず、無理だらうとは言われていたけれども、「美里が受けたから私も」と言い張つたとか。

美里ももてる女だと思う一方、つれない奴だとも感じた。

冷たくつぶやいた言葉を貴史は耳にしている。

なんで詩子ちゃん、そんな私にくつづきたがるんだろ？

このあたりから天秤のバランスが崩れていたのだろう。

美里が合格発表の日に、貴史に抱きついて涙ぐんだ時。

「あんたと離れたら、私、誰にも本当のことがいえない」つぶやいた言葉が耳に残つてゐる。

あの時、藤野詩子の名前が並んでいなかつたことを全く気づかなかつた美里は、どんな顔して接したのだろう。貴史にはわからなかつた。ただ、卒業式まで一切、藤野が美里に口を利かなかつたこと。

美里も男子たちと必要以上にわいわいしゃべっていたこと。女子たちとの仲が不本意なまま終わってしまったらしいということ。貴史の把握していることはそのくらいだった。

なぜいまさら美里のところ、「田舞のおさらー会」チケットが届くのだろう。もちろん来てほしいからだろうし、読み方によつては藤野が美里と仲直りしたいと考えている、とも受け取れる。だったら万万才だ。美里だって嫌いな女子ではないのだから、友情復活は待つてましたってことだらう。

「じゃあ、行けばいいだろ。お前。おばさんと一緒に」

「それがまあ、母さんいうのよ。日本舞踊の発表会つて、なんかお金を持つていくのが常識だから、いやだつて。やだねえ、大人つて、心がすさんでるよね。だから、貴史かこずえか誰かと行けばつていのよ。それだつたら同じ小学校の付き合いだし貴史がいいかなつて思ったのよ」

「俺たちだつたら金持つてかないでいいのかよ」

「子どもだから花束だけでいいって」

日本舞踊なんて貴史は全くといつて良いほど観たことがない。たぶん盆踊りの延長みたいなものだらう。もしくは赤と白のふさふさ鬘をつけて頭振り回すあやしこことをするらしい。未知の世界なのは美里も同じだらう。

「詳しいことなら、お前の近くにいるだらう、日本伝統文化のプロフェッショナルが

「ああ、昼行灯の君ね」

「お前、あれでも一応彼氏だろ」

「どうだか。向こつは違うと思つてるかもよ。わからんないけど」

なげやりに答える美里をちやかす氣にもなれず、貴史は最後の一切れを飲み込んだ。ちょいとしか食べていないのに、やたら腹持ちがいい。

「昼行灯の君が出たところで、つなげていい？」

「敬意払つて立村つて呼べよ」

「だつてなんか、知つている人に聞かれたらやだよ。私の直感なんだけど、立村くんもしかして、詩子ちゃんのこと知つているのかもしれないって」

「こいつ、どこまでやきもち妬けば気が済むんだ。

貴史としては一言、告げるに限る。

「会つたこともなきそな奴にまでやきもちやうてどうあるんだ、ばあか」

「違つよ。ほら覚えてる？一学期の社会の授業中には、うちにあるチラシを持つて行つて、その内容について研究するとかいうことやつたでしょ」

「ああ、あつたあつた。そんで？」

「それでこじゅえがさ、夕刊に入つていた日本舞踊教室のチラシ持つてきたでしょ。それを立村くんに見せて、根掘り葉掘り日本舞踊の話でつつこんでたでしょ」

「ああ、下ネタでな。こつもの夫婦漫才じゅねえか」

美里の現在親友に位置しているのが、古川こじゅえだ。さばさばしていて結構いい奴なんだが、どうも貴史に熱を上げているらしくあって避けざるをえない存在でもある。貴史の愛は、アイドル鈴蘭優に捧げられている。いきなり立村くんに向かつて「あんた童貞？」とかますような相手はお呼びでない。

「そのチラシに、先生と一緒にポーズ取らされている女の子がいて、あがが詩子ちゃんだったのよ。背が高くてさ、ポニー・テールにしてて、すつしょく真面目な顔で。そしたら立村くんがかなり慌ててたのよ」

「またすけべネタがまされたからパ一ツク起こしてただけだろ。美里、お前も少し手ほどきしてやれよ」

「手ほどきするのは男の役目でしょ。そういうのをあの昼行灯に求めてどうするのよ。それよりも立村くんがね」

結局最後は「立村くん」に戻している。やっぱり彼氏だ。

「お母さんが日本舞踊とかお茶とかお花とか、そういうものの仕事してるんでしょ。それで知っているんだとは思つたんだけどね。でもこいつものことだけ、あの人しゃべらないでしょ。何にも」

美里の口調はいつものことながら語尾が曖昧だった。

立村のことを話す時は、わたあめをほおばつたような言い方をする。

甘いんだけど、口にまとわりつくというか。

「あのなあ、美里。お前ら一応付き合つてるんだろ。奴に聞かねえのかよ」

「貴史こそ立村くんと親友なんでしょう。男同士でそういうことオーブンにしないの？」

痛いところを突かれたよな。

じつと見つめあう。恋人同士のまなざしじゃない。一緒にいた時間が長いからわかる気合だ。

「女子と違うんだって言つてるだろ、そんなべつたべたしたような付き合いしねえんだよ。野郎同士は」

「私もそういう方が好きだけどね。別に立村くんが詩子ちゃん知つてもおかしくないとは思うけど、隠すことはないでしょ。隠すことは。いつもそりだよ立村くんつて。宿泊研修の時だつて「禁句」一度目。

「そのことは言わないつて、決めただろ。俺も美里も」

「わかってるけどさ、あんたどだつたらかまわないじゃない。そりや、私だつて無神経なとこあつたかもしれないよ。頭に来てたかもしないし、ぐあい悪かったならしかたないかもしれないよ。でもね、貴史、私だつてできるだけのことをしてるんだよ。わかつたげようとしてるじゃない」

何も俺の前でそんなこと言つことねえじゃねえか。奴に言えよ奴に。

貴史は黙つたまま聞いていた。水を飲んでいた。

「隠し事ばかりしてるんじゃないよって怒鳴りたくな」「なあい？」

地雷を踏まれた。

3 清坂美里のいいたいことすべて

すでに三人の間で、「宿泊研修」という言葉は禁句になっていた。貴史が、美里と約束したことだった。

「あれつきりにしろよ。美里。立村と続けるんだつたらな」「うん、わかったよ」

絶対に、あの日のことを口に出さないって決めたんだ。わかってるけど、でも。ひ、やっぱり。

まだ部屋には姉、妹ともに戻ってきていなかつた。姉が夜遊びに徹しているのは周知の事実だし、妹も今こころは塾だろ。美里と同じ青大附属に進学したいからだそうだ。六年後半は山場なのだそしが、たぶんそういうもんなんだろ。美里のようにあつさりと、「もうここで勉強するより家でやつたほういいもん」と切ることもしないようだ。

まあね、受かっちゃつたらあとは天国だもんね。

一学期の段階でコピーしてもらつた立村くんの英語リーダー訳本、通称アンチョコを丸写しして、明日の予習はおしまいだつた。まず間違いはない。ファッション雑誌をぱらつとめくつてみたり、化粧品の宣伝を見ては小遣い額を確認したり、つめみがきで磨いたり、自分なりの「美」を磨くレッスンを続けていた。

十月五日かあ。

ギンガムチェックの真つ赤なワンピースを来た女の子が卓上カレンダーの中で微笑んでいる。人気ファッションモデルの子だ。貴史の好きな鈴蘭優よりもずっとかっこいいし、美少女だと思う。赤丸をつけた。

チケットを取り出し、見直す。木の皮をはがした時に見える白い肌の色だった。和紙で「志遠流日本舞踊おさらい会」と綴られる。場所は青潟市民会館大ホールだそうだ。広いだろう。おーいと声をかけて届くかどうかってところだろう。

日本舞踊かあ。すつごくきれいなんだろうなあ。

美里も日本舞踊というのがどういうものなのか全く見当がつかない。立村くんのお母さんが日本伝統芸能のマネージャーらしきことをしていることくらいは聞いているけれども、本人があまり話したくなさそうだったので聞かなかつた。

隠し事の多い彼氏を持つと、いろいろ大変だ。

本当だつたら、母が心配していいた通り「ねえ日本舞踊の会に招待されちゃつて、貴史と行くことになつたんだけどね、どういうもの持つていけばいいのかなあ？やつぱり花束？」とか聞けばすむのだ。ついでに「そういうばこの前、立村くん、志遠流とかいう日本舞踊のチラシ観てたでしょ。あの写真の子なんだけど、もしかして知ってる？もし知つてたら聞いてみてよ。清坂美里のこと覚えてるつて」と、気軽に言つてしまえば楽なのだ。詳しい人に教えてもらつ方が一番いい。ましてや、大の仲良し、のはずなのだから。それができればね、いいんだけどね。

結局相談相手は貴史になるつてところが、問題なのよ。

六月に美里の方から付き合いをかけ、それから三ヶ月近く経つ。付き合いの場合、一週間で終わる子もいれば、小学校時代の恋人がまだ続いている子もいる。いちがいにどのくらいが平均期間とは言いがたい。ただ、こずえに言わせれば、

「長いよ。良く続いてるよねえ。美里もがまんしてるんでしょ」とのことだが、どっちががまんしているのかはわからない。

学校を休んだら気になつて電話したくなる。

体育の百メートル走やつている時は、やつぱり順位が気になる。

他の女子、特に一年の女子たちと話しているのを見ると、つい仲

間に混ぜてもらいたくなる。

帰りはやつぱり、一緒に帰りたくなる。

今までは偶然を装つてすることが多かつたけれども、六月を境に回りからは公認の証をいただいた。立村くんの方からなりゆきで、俺と清坂氏は付き合つていてるから」と言つたのもかなり影響しているのだろう。

からかわれることもなく、自然に付き合つていてる。

夢見た通りのお付き合い。もちろん立村くんの神経質過ぎるところとか、人の顔色ばかり見すぎて足をひっぱる所とか、不満がないとは言えない。もつとずぶとくなればいいのに。自信持てばいいのに。貴史みたいに、と思わないとは絶対に言えない。でも、付き合う前、付き合つた後も全く態度変わることなく美里を気遣つてくれる。こんな相手、なかなかないと他の女子も言つ。男子は一度付き合つてしまつとがりつぱちになつてしまい、態度がでかくなるといつ。一切、なかつた。

完璧だと思つていたのに、どうしてだろうか。

あの、宿泊研修からおかしくなつちゃつたんだ。あつと。

立村くん、どうして。

むあつと湧き出す雲みたいな気持ちが押さえられない。工作で使つた画用紙の裏を机に広げ、机からクレパスを取り出した。十一色。小学時代の使い残しだ。橙色の一一番長いクレパスを取り出して、美里は一気に書きなぐつた。百点満点の花丸をびつしり埋め尽くしたような文字が、躍つた。

なんでなにもいわないのよ。なんで自分一人で決めつけてしまうのよ。なんで私のことを信じようとしてないのよ。なんでしてほしいことなんにも言ってくれないのよ。私が信用できないの。私のことが嫌いなの。私と付き合つのがほんとはいやなの。どうしてあの時、私に相談してくれなかつたの。私だって手伝うことができたのに。あなたひとりだけ先生に怒られるようなことさせなかつたのに。ど

うして私が心配してゐる氣づかないのよ。毎あんどのくせに、数学なんて何にもできないくせに、暗い文学少年してゐるくせに。胸大きい子好きなくせに。いじめられてたこと私知ってるんだから。みんな、私知ってるんだから。みんな隠さないでよ。嘘言わないでよ。そんなあんただつていいつて、みんな言つてゐるじやない。あんたなんか。

もし立村くんが幽体離脱して美里の部屋に現われたら、きっと読むなり卒倒するだろう。見ればいいんだ。読めばいいんだ。そのまんま押し付けてやりたい。あの、線の細い表情がどうゆがむのかとつぶりと拝ませていただきたいものだ。

あんたなんか大つきらい！

文字が読み取られないよう、最後に大きく真上から書きなぐつた。まだ小学校に通つていない子どもたちの、らぐがきにしか見えないだろう。

言葉をそのまんま、立村くんにぶつけたらどう答えるだろう。縦に引き裂き、重ねて四枚、さらに重ねて破り続けた。最後は重たい紙ふぶき。じみ箱へ、両手ですくつて捨てた。

じついつ気持ちを、五年の頃だつたら詩子ちゃんにぶつけていただろう。

あの当時は確かに詩子ちゃんが親友だと思つてゐた。美里が五年の時窮地に経たされ、追い詰められた時も必死にかばつてくれたことを忘れない。誰よりも大切な親友だと思つてくれたこと、貴史にすらやきもちを妬いてくれるくらい美里のことを好きだと思つてくれた。

いい友だちだつた。なのに詩子ちゃんが美里と一緒に中学に行きたいと言つて青大附属を受験すると聞いた時、どうして自分は「ふ

うん」としか思えなかつたのだろう。六年の頃、どうして、詩子ちゃんと一緒にいるのがうざつたくなつて離れたりしたのだろう。塾や児童館に逃げたりしたのだろう。

だって、男子たちと遊んだりしてる方が楽しかつたんだもの。児童館のこともいろいろあつたけど、けい。

チケットの文字が美里をにらみつける。じちらも眞合でにらみ返した。

ほんとに、ふつうの友だちだつたら詩子ちゃんとも、付合つていけたのに。どうして、私にばかりあんなべたべたくついてきたんだろう。だから、私、いやだつたんだ。

自分の中の、冷たい視線がうごめき出した。

だから、合格発表の時、貴史と私だけが受かつてたのが嬉しかつたんだ。

ふたりだけの合格。詩子ちゃんが落ちたことが全く悲しくなかつた。

卒業式まで一切詩子ちゃんは口を利いてくれなかつたけれども、それはそれで仕方ない。そのくらい割り切つていた自分が残酷だと、今でも思つ。今は後悔しているし、機会があれば仲直りしたいと虫のいいことを考へてゐるけれども、これつきりならそれでもいい。詩子ちゃんが田舞おさらい会のチケットを送つてきたといふことは、また美里に会いたい、仲直りしたいといつメッセージなのだろうか。

美里は右手をチケットの上に重ねた。キューピットをまをする時と同じように、目を閉じた。

けど、詩子ちゃんのお母さんが送りつけてきたんだよね。詩子ちゃんは私を呼びたくないと思つていていたのかもしれないのよね。それに。

キューピット様のお告げが、ぴかつと頭に光つた。

立村くん、やっぱり詩子ちゃんの行つてゐる田舞教室のこと、

知ってるのかな。

別に隠すことなんてないだろ「に、と思つ。たまたま「ねえの持つてきいていた日本舞踊教室のチラシ」に、詩子ちゃんらしい人が映つていて、

「ねえねえ、貴史、これって詩子ちゃんじゃない？」

「ほんとだ。藤野だぜ、全然変わってねえの」

と盛り上がつた時、立村くんは必死にそっぽを向いていた。こづえがいつものよう、「に、

「ねえねえ、日本舞踊の曲つてさ、清元とか長嶺とかあるんでしょう。文字で読むとさ、すつ「じくやらし」と書いてるつてほんと? 「松の根上がりの」つてとこ、男のあががたつてるどんなんだつて? あんた、お母さんじうじうの詳しいんでしょ。ねえもつと教えてよ」

と突つ込んでいたのに、うんざりした顔で、

「そんなの知らないよ。知らないってさ」

嘘みえみえの言葉を返していた。そのくせちらちらとチラシを手にとつて、じつと見据えていたくせにだ。貴史も、こづえも、そして美里も、みなわかつていたはずだ。立村くんはポーカーフェイスを使つているくせして嘘がばればれの性格だつてことを。素直に言つちゃえばいいのだ。お母さんの関係で日本舞踊関係の話詳しいんだつてこと。男子だとそういうなよなよしたこと知つているのが恥ずかしいって気持ち、あるんだろうか。

隠し事するのは美里にとつても性に合わない。貴史とペアで出かけることだつて、誤解する人にとっては浮氣だと思われてしまつ。冗談じやない。素直に、言いたいことを言つちゃえばいいのだ。美里も、貴史も、そして立村くんも。一番すつきりするのはそこなんだから。

でも立村くんのことだ。簡単に白状はしないだろ「。

直感に響いたものにはすぐに従うのが清坂美里流だった。

立村くんが逃げられないよつこ、元ひづこと相談して一芝居打つてやるひづ。

今までずっと隠してきたことを、白状せひづこおつ。

宿泊研修のことと、日本舞のことと、みんな。全部。

立村くんの前で「ねえねえ、今度日本舞踊のおせらご会に貴史と行くんだけど、知ってる? こうこうとこ」と話を持ちかけてみよう。ついでに、詩子ちゃんのこととか、プログラムとかをちらつかせて、立村くんが良心の呵責に苦しむところを見てやるひづ。最後に、これらきれなくなつた立村くんが、

「じめん、俺が悪かつた。実は全部知つてるんだ。あのせ、日本舞踊の世界つて実は……」

と白状させてやるひづ。美里も貴史と一緒に、詩子ちゃんへの土産を用意することができるし、立村くんもこれ以上隠し事しないでしむし、詩子ちゃんももしかしたら喜んでくれるかもしないし。いじことずくめ。ちゃんちゃんつてわけだ。おなかの中が膨れ上がり大変だらうに。美里は一応立村くんの彼女だ。彼氏が苦しんでいふところを助けてやりたいと思うし、友だちとしても当然のことだわづ。たぶん、きっかけがなかつたのだ。きっと。立村くんはきっと言い出そうとして言いそびれているだけなのだ、たぶん。

立村くん、一芝居打つて大騒ぎ起しきされた相手の立場、少しは理解してよ。私だつて、一年の評議委員会演劇ビデオでは、「忠臣蔵」のお軽やらされたんだからね! 演技力、あんた以上なんだからね! ちゃんと白状しなさいよ。誰があんたのことを嫌いになつてこいつのよ! ね、貴史!

第一章

1 立村上総は直感で判断する

夜、母から再確認の電話が入った。十月五日、志遠流のおさらい会にて肉体労働がほとんどの手伝いをさせられることに関して、「絶対にいやだなんて言わせない」と気迫のこもった口のあきかただつた。

次の日から中間試験だつてのに。

父がまだ帰つていなかつたこともあり、通話時間は一分くらいだつた。一人暮らしだと電話代もばかにならないからだとか。コレクトコールでかけてこなかつただけでもまだよしとしよう。

「わかった? それじゃあ、近くなつたらもう一度電話するわ。忘れてたわ、上総、四日の土曜日にリハーサル、あと九月の最後の日曜に衣装あわせとつぼ合わせがあるのよ。そのあたりも明けておいてよ。一応あんたも舞台がどんなものか見ておかないとわけわからぬいでしょ?」

「当日だけつて約束だろ!」

「舞台は裏方さんががんばつてくれてはじめて成り立つものなのよ。あんたも子どもじゃないんだからその辺、学習しなさい」

一方的に切れた。日本伝統芸能というのは「礼」を大切にすると習つた。母の電話の切り方は、どう考えたつて礼儀に叶つているとは思えない。鼓膜破けそうだつた。

居間にかかつてゐるカレンダーに、ちゃんと赤マジックでしるしをつけた後、上総は自分の部屋に戻つた。風呂から上がり髪は生乾き状態。夜は秋一杯の匂いに満たされ、鈴虫の声が聞こえる。そのままベットに転がり込んだ。

明日、羽飛しやべってくれるかな。

後味悪かった。帰り道、後悔したけれどもどうしようもなかつた。素直に電話を入れて、「さつきはごめん、あれうちの母さんなんだ」と言えば済むんだろう。でも

「たかがそんくらいのことでなんでかけてくるんだよ」と返されたためらつた。

「お前の母さんって、すっげえ怖いよなあ。お前のこと名前で呼び捨てにしてたつけさ」

そのくらいのことは言われそうだ。決して悪意を持つているわけではないけれど、でも上総は聞きたくない言葉ばかりだつた。

やっぱり、明日謝ったほうがいいよな。

青大附中に入学してから一年半、どうやってD組でうまく学校生活を過ごしていくか、どうやってむかつく先生たちをやり過ごしていくか、どうやって冷たい視線の女子たちから逃れるか、そればかり考えてきた。貴史や美里のように、人気者であつたからといって流してくれるいい友だちもいる。たくさんいる。

でも、いつどうなるか、わからない。

男子で鏡をちょこちょこ見るのはナルシストの証。学校ではめつたにしない。人前で自分の顔をまじまじと見つめるのは、せいぜい顔を洗う時くらいだ。

不安で息苦しくなつた夜なんかは、顔の凹凸にどのくらい黒い影が漂つているかを探した。涙の洪水状態で目がはれぼつたくなつていなか、口がぽつかり開いてないか、唇を無意識のうちに尖らせていなか。

全部確認して、自分の理想とする顔に整え、やつと背を向ける。

いつもの儀式を上総は寝る前にしていた。枕もとの鏡を胸の上で広げ、じっくり身だしなみを確かめた。見慣れた落ち着かない瞳や細い唇が映つっていた。色がなまっちょろくて、周りからは、

「そうか、やっぱり立村は本条先輩とホモの関係か。でお前が女役

？」

と頭痛いことをささやかれたりする。父に似て瘦せ型などになると、母と同じ人を吸い込むような瞳が備わっているのは、まあそんなもんかとも思つ。

だが、ひとつだけ物足りないものがあるとすれば。

どんどん追い抜かれてるよな。

つま先で布団を軽く蹴り上げてみた。入学式の時は羽飛貴史よりもたつぱがあつたから後ろに並んでいたのにだ。一年に上がつてから、屈辱にも二人間を置いて前に並ぶ羽目におちいつている。クラスの男子十五人中九番目の中丈と「うのは、中くら」なんだろうが、それでも低い。

何もかも、みんな抜かれてるよな。

上総はしばらく鏡を眺めた後、伏せて枕もとに置いた。

とにかく、明日、羽飛に謝つてしまえばいいんだ。昨日は悪かつたつて言えればそれですむ。

あいつは、俺があれだけひどいことをしたにも関わらず、いまだにふつうの友だちでいてくれてるんだから。

「一週間前、クラスの宿泊研修」泊三日、黄葉山に泊りに出かけた時のことだった。

もともと上総は担任の菱本先生と相性が合わず、長時間のバス移動で体調も崩していたりして、かなりみつともない姿をさらけ出していた。真夜中に廊下をふらふらして担任にとつつかまり、その後高熱だしてぶつ倒れ一日目はホテルで寝込んでしまつた。美里とも言葉の行き違いで大喧嘩してしまつわ、羽飛にもあきれはてられるわ、さんざんだった。

このくらいのことなら、まだ一学期に入つてから「ごめん、あの時は」と頭を搔くだけですみそなことだらう。美里にもすぐあやまつたし、貴史も土産をもつてきてくれたりした。上総の方が自分を改めればすべて片付くことだらけだった。

三日目のことは、いくら仮の羽飛でも許せないだろうな。上総ひとりで策を練り実行した、宿泊研修三日目、「明星美術館に向かうバスからの逃亡劇」。

計画遂行には全く悔いなどない。。

ことが終り菱本先生に美術館内で殴られた時も、次の日学校で説教された時も、上総は全く何も感じなかつた。わかつてくれない相手には自分なりの冴えたやり方で勝負するだけだ。あの日以来上総は、菱本先生に對してフィルターをかけて接することに決めていた。どうしようもない相手には、自分の方で合わせていつて求めるものを奪い取るそれしかないと感じたからだつた。反抗する気もない。

「菱本先生はこういう人なのだ」と割り切つて、受け流そうと決めていた。

シャツターを下ろして付き合つと決めてしまえば楽なのだ。

羽飛にも、そうできれば楽なんだけどな。

でも貴史、美里にはそれができなかつた。

もちろん自分でそうしたいと思えばそうできただろう。あの日に狩野先生が教えてくれた、

「君はこれから、鋭すぎる自分の感覚を、飼いならすすべを覚えていけばいいんです」

何度も繰り返しつぶやいた言葉だつた。なんとか自分の大切な友だちふたりが訴えてくるものを、さらつと受け止めて、「そういう奴なんだ」と割り切つて、必死にそうしてきた。上総にとつてふたりは、青大附属で初めて出会い、ずっと一年半友だちでいてくれた相手だ。いやな気持ちにさせないで、ずっといい友だちでいられるように、自分をえていきたかつた。

でも、うまくいかなかつた。菱本先生を始めとする、ずかずか心に入り込んでくる大人にはいくらでも冷たく見返すことができるのに、あのふたりにだけは無理だつた。

貴史が上総に對して冷たい態度を取つたのも、もしかしたら思い

過ごしなのかもしれない。

美里がやはり、腫れ物に触るよう宿泊研修の話をしないのもそこにあるのかもしれない。

ふたりにはいやつてほど感謝しているはずなのに、どうしても最後のハードルが越えられない。

いい奴なんだ。なのに、どうしても、「そういう奴なんだ」つて割り切れない。

こんな奴のどこがよくて清坂氏は俺なんかと付き合いたって思つたんだろ？

言葉の裏に見え隠れする、

「なんでそこで受け入れようとしてないんだよ、お前」と責める響きが耳鳴りのようにものをいつ。

フィルターで、そんなのを気にしないように過して、ふたりともいい奴なんだつて思えれば。

ふたりが思いつきり傷ついていることを、上総は感じている。事情が事情とはいえ大嘘ついて脱出してしまったことがどれだけ許しがたいことか、重々承知だ。だからなんとか、伝わってくる感情に、頭を下げたかつた。なんとか、なんとかしなければ。

夜が明けた。朝五時半。いつものように間違いのない格好に着替えた。上総の言う「間違いのない」とは、決して校則違反か否かということではない。あぶらっぽい顔してないか、ふけが肩に落ちてないか、ボタンが取れていないか。などなど。服の乱れは心の乱れではない、不潔感により自分の居場所がなくなる危険信号の点滅だ。いつどうなるかわからない、そういう場所が学校なのだから。

危機感はいつも、持つてないとまずいよな。

父は深夜に戻つてきたらしく、全く起きる気配なしだった。もうテーブルの上にパンやオレンジジュースを置いたままにしていても腐らない季節だった。自分の分だけさつさとこしらえて平らげた。もちろん、料理した後、スクランブルエッグの匂いが服に移つてい

ないかを確認するのも忘れなかつた。

外の天気を台所の窓からうかがうと、だいぶ木の葉が赤茶けてきているのが見て取れた。やはり僻地の我が家なのだろう。天気が違う、気候も温度も全く異なつていた。うちだけは、秋だつた。

自転車で四十分弱。遠回りして通う分早く家を発てばよい。必死にペダルをこぐ必要もなく、とろとろと進んだ。自分の住んでいる町から離れるとだんだん、知り合いの連中とすれ違う率が高くなる。同じ遠距離自転車通学をしている奴とか、汽車を使用して通つている奴とか、実家に用があつて帰つた下宿生とか。

「はよつ！」

「おおつす」

「おつときー」

みんないろいろな挨拶言葉を発して去つていいく。笑みと顎きで上総は返した。商店街もまだ静まつていて中、すいすいと進んだ。学校に到着した。すでに自転車置き場には、羽飛の、サドルのやたら高い自転車がつけられていた。白い塗料でサインまでしてあるところが奴らしかつた。

羽飛がいるつてことは、清坂氏もいるのかな。

うちが近いからあまり早くくるなんてことないんだけどな。

謝るんだつたら、お互に早いうちにけりをつけたほうがいい。誰もいないうちに。本当は重たい足取りを、無理して軽くするために上総は走つた。街路樹の、手のひらほどある葉が青いままで、道端に数枚、落ちていた。

一年D組に向かう階段の途中、降りてくる南雲秋世、奈良岡彰子とすれ違つた。この一人もずいぶん早いものだつた。いろいろあつたとはいへ一年D組の公認カツブルになつてしまつていて。見た目からすると南雲の方が「いわゆるアイドル系の顔立ち」ゆえに、「肝つ玉母さん」的明るさの奈良岡さんは不釣合に見えた。しか

も惚れぬいているのは南雲であり、今では毎日家に迎えに行くという騎士ぶりを發揮している。

「立村くん、早いね」

「それよつうちにクラス、もう誰か来てたか」
南雲に尋ねた。奈良岡さんが笑顔で答えた。南雲は一瞬だけつまらなさそうな顔をしたが、すぐに何も考へてない風に戻つた。

「羽飛くんと美里ちゃんがね、なんか話で盛り上がってたよ」「なーんかさ、こづらかつたんで、俺たちは鐘鳴るまで、中庭にいようかなあつてさ」

「ははあ、早朝の語り合いか」

茶化しても南雲は怒らなかつた。当然、とばかりに大きく頷いた。
否定するのは奈良岡さんだつた。

「つうん、私は保健室に寄つてくるの。立村くん、秋になつてだいぶ、倒れなくなつたでしょ。今の時期結構、季節の変わり目で風邪ひく人多いんだつて。立村くんも体弱いんだから、気をつけなくちゃだめだよ」

「どうもありがと。ほんつと、俺もそつ懇つ

じゃあ、と片手を挙げて教室に向かつた。まだ朝の八時になるかならないかだつた。踊り場の外を覗くと、運動部の朝連のために走り回つている連中がうろついていた。通学ラッシュはこれからだ。

一年D組の扉を握り締め、ゆっくりと開けた。

覗きこんでから声をかけるつもりだつた。すぐに気付かれ、呼ばれた。

「立村くん、おはよ！」

美里の、少し作り加減の明るい声だつた。なんで「作った」と思つてしまつのか、自分でもわからなくて、もじもじと答えるだけだつた。

「おはよー、ふたりとも、早いなあ

羽飛の顔をまず覗き込んだ。

「立村か。ちょっと来いよ」

やつぱり恐れていた通り笑顔での手招きではなかつた。少しにらみが入つていた。ブレザーとネクタイを外して椅子の背中にかけ、自分の席で片足外して座つていた。

「ああ、あのさ、羽飛」

「いや、なあ美里、さつき話していたんだよなあ」

上総の言葉を遮るよつて、貴史の手は美里を指差した。

「美里、ほり、再来週さ、藤野の踊りの発表会行くつて言つただろ？」

「うん、言つたよ」

なんか、羽飛も作った言葉使つてこるよつた気がする。

背中に窓枠が影をこしらえていた。貴史の背中、白いシャツの上に十字架を背負わせたかのよつに見えた。

「立村知らないだろうなあ。あのな、俺と美里と小学校の時同じクラスだつた奴で、藤野つて子がいるんだけど、今度の踊り発表会があつて日曜日、お前から美里を借りなくちゃなんないんだ。ジェラシー燃やされる前にあらかじめ報告しといたほつ、いいだろ？」

立ちすくんだまま、上総は貴史の前髪を見つめていた。若干くせがあるのはドライヤーでえせリーゼント風にこしらえたからかもしない。眉とひたいが丸見えだが、顔はさほど大きく見えなかつた。目線が鋭いせいだろう。やつぱり、口調が親しげなのに反して、まなざしがきつい。

「別に。いいよ。そんなの」

「そつか。じゃあ、美里。立村の許可が出たからこいで予定立てるか

「いいよ、でねでね」

貴史の前にいる奴はまだ來ていなかつた。さつそく美里は上総を素通りして椅子に横座りした。ちゃんと足をそろえて流した。ニコースキヤスターのお姉さん風座り方だつた。貴史も今度は美里のみに顔を向け、目は穏やかに話し出した。目が穏やかだつた。

踊り発表会つて、再来週の日曜？

昨夜、カレンダーに赤丸をつけた日だつた。

いきなり背を向けるのもなんなので、もう少し机に近づいて立つた。片手を広げたままぶら下げて、耳を傾けた。ふたりは完全に上総のことを無視してしゃべりまくっている。

「ほら知ってるでしょ。一学期にこずえが日舞教室のチラシ持つてきたことあつたでしょ。あの写真の子なんだ。立村くん」
申しわけ程度に美里が説明してくれた。その「藤野」という苗字の元同級生は美里ととりわけ仲がいいらしい。話の内容からだいたい把握した。

「でね、今度初舞台を踏むから来てねつてチケットをもらつたのよ。やつぱり同じ学校の奴同士で行くのが一番だよね。貴史と花束持つていこうつて思ったの。立村くん日本舞踊とかそういうのに詳しいでしょ。どういう花持つていつた方がいいと思う?」

「なんだよな。俺もそれ知りたいよな。俺だつたら花束もらつたって母ちゃん姉ちゃんに分捕られるだけだから、ありがた迷惑だと思つぞ」

ふたり、四つの眼が上総を見据えた。さらつとだが重たい。

「いや、たぶん、花束は、喜ばれるんじや、ないかな」

語尾をどもらせながら上総は答えた。花束よりもむしろ、一万円を包んでもらつた方がいいとは母の言い分だがその辺は誤解を招くので言わないのでおいた。

「ふうん、あつそ。でね」

しらけた口調で美里がつぶやき、ふたたび貴史と話を弾ませた。
「場所がね青潟市民会館なんだけど、どうなのかなあ。日本舞踊の会つて、私たちがいきなり楽屋に入つていいようなもん? お高い人たちばかりつて感じで追い出されたりなんか、しないかなあ?」

「やっぱ制服で行かねばなんねえのかよ」

「私は卒業式に来たようなグレーのロングワンピースで行こうつて

決めてるの。でも貴史はねえ、まさかねえ。トレーナーとジーンズはよくないよ」

いや、別にいいんじゃないか？ そんなあらたまらなくとも。会話を振ってくれるならば、ちゃんと答えてやつたのに。」「立村くんなら絶対スースで行くよね。ちゃんとネクタイ締めてもう一度顔を上げてふたりがねめっちくみる。

「いや、細いのは締めるかもしれないけど、そんな大げさでなくても」

言いかけたところで、

「あつそ、わかった。でさあ貴史」

切り方が冷たいのなんのつたらなかつた。少しむつとしたけれど、割り込む気もなかつたので黙つて聞き役に徹することにした。うつかり口走つて後悔しないとも限らない。

「たぶん、詩子ちゃんが踊るのつてすつじく可愛い着物きると思うんだ。女の子が踊るものつて袖が長くて髪の毛にかんざしたくさんつけたので。詩子ちゃん背が高いからきっと、似合つと思つんだ」「さあな、俺はその辺全然わからねえよ。母ちゃんも何がなんだかつて言つてたぜ。金持ちだなあつてか」

「ふうん。十月五日、日曜日よね。ひずえが持つてきてくれたチラシにも、ええつと」

胸ポケットの生徒手帳に挟み込んだチケットらしきものを取り出し、上総の方にちらつかせ、後、貴史に一枚手渡した。

「ほり、志遠流、つて書いてる。知つてる？ 立村くん？ この前は知らないとか言つてたけど」

「そうだよな、なんか裏がありそうな言い方してたよな、お前」
ふたり、もう一度呼吸を合わせて上総を射た。

射られた拍子に窓の照り返しがまぶしくて、瞬きを数回。日の前には綿を細く引きのばしたような雲が広がっていた。理科の授業で習つたうろこ雲だった。

まさか、このふたり。俺にあてつけてるのか。

虫に食われてしまいそうだった。言葉が出てこないのは、あの雲の子のような虫たちに全部食べられてしまつたからかもしれない。「ほほこ孔が開いていきそうだった。すうすう気持ちが冷えていきそうだった。上総はひたすらこらえた。美里、貴史から飛び出す言葉の虫たちが食い破つてきそうだった。

なんでそんなこと言うんだよ。

かばんの柄を握り締めた。美里と貴史、交互にじっと見返した。

でもやつぱり、本当のことは言えない。

一人が話す内容から考えて、上総が母の下僕としてこき使われる「志遠流日本舞踊おさらい会」に出かけるらしいことは確実だと思った。青鴻市民会館の大ホールで日曜日、十月五日。これ以上何も言つことはない。

また、美里の友だちといつ「藤野」という子にも聞き覚えがあった。

一学期の段階では、日舞教室の写真に載つているといつといつまで記憶してはいなかつた。断じて、あの段階では藤野といつ美里の友だちについての記憶は残つていなかつた。彼女と知り合ひだから動搖しているのでは、とかんぐられるのはお門違いだ。

ただし、八月十五日に行われた「ゆかたざらい」にて、上総はひよんことから「藤野詩子」という中学生が志遠流のお弟子さんについてことを知つた。会話らしいものはほとんど交わしていない。ただ、向こうは上総のことを覚えているかも知れない。ちょっとだけ楽しくない出来事が起つたので、思い出したくない対象の可能性が高い。自分の身に置き換えてみても、かつて悪いところやうそがばれた場面なんかを、貴史や美里に見られるのは、避けたい。

まさか、清坂氏の友だちが、あの藤野さんだとはな。

彼女だつてそうだつ。上総の母と多少なりともやりあつたちょっとした出来事……ひそかに上総は「玉兎事件」と呼んでいる……は、決して自分の名譽になる話ではない。そういうところを見られ

た相手が、仲良しの友だちの「彼氏」だつたら。

小学校時代の俺の暗い過去を、清坂氏に全部知られたらどうする、つてのと同じことだよな。

上総の判断としては、

その子、知らないよ。

と答える方が自然のように思えた。もちろん嘘をつくことにはなつてしまつし、ばれた時にはまた「藤野とやましいことしてたのかとかんぐられる恐れはある。でも、「どうして知つてるの?」と聞かれて「ただゆかたざらいで名前知つてたから」と言い訳するだけではまずいような気もした。言つならばすべて、きっかけ、「玉兎事件」、ついでに上総の恐ろしい母上沙名子さんとの顛末も語り尽くさねばならない。巧くごまかせればいい。でも、貴史と美里にそんな小細工は通用しないだろう。嘘をつくなら徹底しなければ。一年間付き合つてきた経験そのもので、そう思う。

嘘もこれ以上つきたくない。やつぱり黙るか。

約五秒。そのままだつた。

だいぶクラスの連中も教室に集まつてきていたけれども、まだまだ空席だらけ。南雲と奈良岡さんがそろそろと入つてきたが、二人の世界を心地よく教室の隅でこしらえてくるらしい。気が付いていふとは思えなかつた。

「立村くん」

口を切つたのは、やはり美里だつた。

貴史がじつと見据えたままでいる。

「もういいかげんにしてよ! 黙つてたらわからないよね!」

声は響かなかつた。様子をうかがう奴もない。ただ上総の方には怖いくらいはつきりと響く声だつた。

「美里、おいおい」

「全然白状してくれないんだよね。立村くん、あんたつて人は!」

「何やつてるんだよお前」

貴史が机を軽く叩いた。上総にも視線を投げながら、

「でもまあ美里の言いたいことも俺は分かる。立村。お前さあ、知ってるんだろ、藤野のこととかさ。お前の母ちゃん、日本伝統芸能のなんとかかんとかしてるって言つてたからさ、知つてるんでないかつて俺も思つてたんだ。お前がストレートに言わねえから」

「貴史ももういいよ。こんなに私だって立村くんに、隠し事しないように言つてやすく持つて行つてあげたのにさ、なんでいつも黙つてるのよ！ 別に知られたつて困ることじやないじやない。もっと私たちの話に割り込んでくればいいじやない。なんでどう様子見して黙つてるの？ いつもいつも、いつも！」

「「めん、俺もそれは」

言いかけたとたん、美里はびしやつと貴史の机を平手打ちした。本当は上総を一発張り倒したかったに違いない。

「あんた口癖だよね、『俺が悪かった』つていつも言つよね。本当にそう思つてるわけ？ 口癖だからつい出てしまつ、ただそれだけじゃないの？ 本当に頭を下げたいんだつたら、ちゃんと土下座するなりなんなりしてよ。いつもそのなよ、立村くんつてば口先ばっかりで」

「おい美里、それは言いすぎだぞ」

思いがけず貴史が割つて入つてきた。上総はただ視線を逸らさずに言葉を受けるのがやつとだつた。静かに美里の罵詈讐言を受け止めていると思われたのだろう。だんだん気付いたらしく周りの連中たちが様子をうかがう気配がした。声を低くしてほしい。周りの「また立村やらかしたのかよ、またまた」という雰囲気が苦しい。

「美里よくわかつた。落ち着けよ」

「私、貴史に言つてるんじゃないの！ もうがまんできないのよ。なんで立村くんいつも隠し事ばっかりするのよ。宿泊研修の時だつて」

「これ以上言つな！」

上総が言葉を虫食われている間、貴史は数回止めるじぐさをして

いた。手で何度も机を叩いていた。其の手がついに美里の腕を引っかみ、ぶるんと揺らした。

「美里止めろ」

「もう知らないから!」

美里は音を立てて椅子を机の下に押し込み、上総を一秒しつかとにらみつけると、かばんを持ったまま教室から出て行った。貴史が難しい顔をして机に向かいうつむいているのが意外だつた。

上総はとうとう意味ある言葉を投げられなかつた。当然、あやまるにできなかつた。

「あのや、羽飛」

「お前追っかけねえのかよ!」

今度は貴史が上総を怒鳴りつけた。一歩うしりすりして周囲を見渡すと、D組教室内が興味深々といった空氣に満たされてゐる。完全、舞台、主役だつた。

「いや、俺が追っかけていつたら、たぶん逆上するんじゃないかな。俺だつたらたぶん放つておいてほしいと思うはずだから」

「お前本当にバカか？　お前本当に美里の彼氏やつてるのかよ」

「それとこれとは別だつてさ。なんか俺も今顔合わせたら、ひどいこと言つて傷つてしまいそうな」

「だからお前は救いようのないあほんだらだつていうんだよ！　どけよ」

美里に対しでは腕だけだつたが、上総に対しでは肩を突き飛ばした。男女の差だ。貴史は一点に集まつた視線をひとつひとつぶすよに見据え、舌を鳴らした。

「勝手にしろ、つたく」

扉を開けて出て行つた。ちょうど締まるのと同時にチャイムが鳴つた。みなばたばたと席に付き始める。朝自習の用紙を箱から取り出し始めた。数学の問題だつた。具合が悪くなつたので上総はほとんど見ずに裏返しした。

じゃあどうすればいいんだよ。

結局、その日は帰りの余が終わるまで美里、貴史ともに姿を現さなかつた。いわゆる「さぼり」だつた。南雲も何か言いたそうな顔をしていたけれども、あえて先週の全英ヒットチャート100についての話でごまかしてくれた。隣席の古川こずえからも、「なんで羽飛まで行くわけ？ あんたほんとに、ガキよねえ。まあんたが追つかけていかない理由も私にはわかんないことないけどね。ふう」

と、バカにしてるんだか思いやつてくれてるんだかわからないお言葉を賜つた。

「おい、どうした、羽飛、清坂いきなりエスケープだあ？ いつたいあの幼なじみコンビ、珍しくもなあ。あとでたっぷり絞り上げるとするか。さ、授業始めるぞ」

菱本先生も、よりによつてなぜこの二人がいないのか、納得のいかない表情を浮かべていたけれど、取り立てて上総に「どうした、あいつらは？」と尋ねはしなかつた。一学期までだつたら、おそらく上総に対していろいろ

「清坂とやりあつたんだつてなあ。お前も全く、清坂の思いやりを全然受け止めようとしなかつたんだろ？ 少しは大人になれ」と説教されたいたに違いない。宿泊研修三田田バス脱出事件以来、菱本先生も上総に対しては距離を置くよつ心している。上総にとつては非常に好ましい状態だつた

もつとも、菱本先生と相性のいい生徒たちから仔細を聞き出したらしい。

大して心配するよつなことでもないさ、と笑顔で明日以降、説教することを考えていらしかつた。

「じゃあな、明日、おさほりのお一人さんにはたっぷり油を絞つてやるからな」

笑顔で職員室に戻つていつてしまつた。たぶん上総に事情聴取し

たところで、なんとかそこにはならないと割り切つている感じ。

一日、ふたりが出席していない授業中、上総は真剣にノートを取つた。文系授業ならいつも通りだが、数学の解き方をすべて写し取るのは骨だつた。しかも数学担当の狩野先生は、上総のために小学生レベルの問題を補習教材として渡してくれる。自分にとつてはありがたい内容だが、美里、貴史にとつては「けつ」の一言だらう。黒板の数字やアルファベットを、いわゆる「写生」している気がした。丸写しは骨が折れた。

たぶん、見落としあないよな。

六時間目終了まで、とうとうふたりの席はつるんと光つたままだつた。

つりこ雲が消えた後、空には金色の太陽を隠し持つた綿雲がベルを張つていた。クラスの連中と「じゃあな」「お先」、言葉を交し合つ間、上総も空と同じベルを被り続けていた。どうかミスがないよつこ、どうか虫食いで破れていませんよつこ。祈りながら。

美里に怒鳴り返すことは簡単だつただらう。いくらなんでもそこまで嫌味つたらしいことを言われ、あてつけがましくも「立村くんにいかげん白状しなさいよ」という態度をされたら、文句のひとつふたつ言いたくなる。貴史も昨日の意趣返しなのかどうかわからぬが、そういう根に持つていたことは確かだつた。

謝るうつと思っていたのだ。ちゃんと切り出さうとしたのだ。

なのに。

俺はほんつとに、救いよつないことしてるんだよな。

あのふたりが、あいつらに似合わないよつないことしてしまつたくなるくらい、許せないことしてるんだよな。

あんなことされて俺も当然だよな。傷つく権利なんてないよ。謝つても口先だけだと思われるのなら、何も言わないほうがましなのかな。

どうすればいいんだろ？

手元の大学ノートを五冊、取り出した。

国語、数学、英語、社会の歴史、あとは茶道。

文字はたぶんコピーしても読み取れるだけ、濃く書いている。

印刷室へと向かった。ここだと青大附中生の特権で無料コピーを取らせてもらえる。個人コピーは禁止のはずだけれども、その辺は大目に見てもらっている。評議委員の用事がある振りをして、図書館から借りた本を重ねて持つていった。大きなコピー機の蓋を開け、ガラス張りのセット部分にノートを開き載せた。一枚ずつ刷るよう「2」のボタンを押し、作動させた。

なんだか繰り返し、残りの茶道、英語、数学、国語、すべての複製を完成させた。摩擦熱でかなり高温な用紙をテーブルに載せ、いち、にと分け、半分に折りたたんだ。印刷室を出る頃には、廊下側から見える空もだいぶ黒味を帯びてきていた。風が揺らす音は夏と変わらなかつたけれど。

ふたたび一年D組の教室へ向かった。やはり一人は戻つていなかつた。

持つてきたコピーの束をもう一度数え直し、端と端をきちんとあわせて折り目をつけ、それぞれ机に突つ込んだ。

誰もいない。両手を合わせて双方の机に頭を下げた。

どうか明日こそ、元に戻れますように。

2 羽飛貴史は経験で判断する

だから言つただろつての。できねえことするからだつての。

美里の足は速い。駆け出していったのだろう。でも貴史には十年以上つちかってきた、「美里を追いかけるための触角」が備わっていた。まずは玄関に向かうことになった。生徒玄関のたたきで靴を脱

いでいるところを発見した。幸い、鍵は内側だ。出でいく分にはかまわない。遅刻者をチェックするために先生たちはみな、来客用玄関に移動している。

「美里、待てよ」

「今日は学校休むから」

「休むつて、お前にここに来てるじゃねえか」

「だから帰るの」

口を尖らせて、貴史の皿をじつとにらんだ。

「だからなあ、お前、なんで途中で暴露しちまうんだよ。こりこり

どこがお前、女だよなあ」

「女、女、つて言わないでよ！」

まずい、火に油を注いでしまっている。しかたなく貴史もかばんをあごでささえながら外靴に履き替えた。

「どこ行くんだ？ 反省会やるんだつたらしきあいつぜ」

「別にあんたに来てほしいわけじゃないもん」

「ばあか、このまま俺が教室に戻つたらどうするんだよ。まず立村にはにらまれるし、他の女子連中には文句言われるし、菱本さんにはお前がいな理由を問い合わせられるし、と三重苦もいいとこだ」「要するに貴史、自分のエスケープ理由を私にかこつけてるでしょ」と吐き捨てるようにつぶやき、美里がかぎを外した。掛け金式だ。すぐに開いた。

「悪いが、第一お前が持ちかけたんだからな、これからどうするかは考えないとまずいだろ」

しばらく掛け金をひとさし指でもてあそんでいた美里。もう一度貴史に向かい、

「あんた、出席日数足りてるの」

「一年になつてから休んでねえもん」

「あつそつ。大学の中庭でどう」

昼間から午前中、制服姿でうろついても補導員に声かけられないですむ、先生に見つかっても言い訳ができる場所。となつたら附属

高校をすつとばして、大学構内にもぐりこむのが一番だ。

青潟大学附属の場合、附属高校、大学の授業でも学校側からの許可があれば出席することができるシステムを取っている。立村がたまに公認でドイツ語と英語の授業にもぐりこんでいるのもその辺に理由がある。貴史と美里はあまり関心がないのでどうでもいいのだが、大学のキャンバスをうろついても怪訝な顔をされない環境というのは嬉しいものがあった。高校の授業でも、美術や音楽などで同じ扱いをされている奴は結構いるらしい。

天気はぐずれそうでぐずれない。傘が必要のかいらないのか、よくわからない。はつきりしないのに、風だけは強くぶつかってくる。じわっとひらい手の平程度の落ち葉がころがっていた。

美里はなれたもので、すぐに大学中庭のベンチを見つけて座り込んだ。女子大生たちが生協で買い込んだチョコレートを分け合つてはしゃいでいる。煙草を吸つている野郎連中、みなそろいにそろつてジーンズ姿だ。中に一部、濃いグレーの薄いチェックを着ている連中もいないことはないが、たぶん高校生連中だらう。目をつけられるんではないかと最初ひやひやしていただけれども、どうやら中学生をいじめて喜ぶような連中はあまりいないようだった。

「貴史、最近けんかしてないんじゃないの？」青大附中に来てから、あんたおつとなしくなったね」

「別に殴るような相手いねえもん」

靴の紐がほどけていた。結び直しながら汗をぬぐつた。

「小学校の頃はすごかつたのにね。何があんたをそうさせたわけ？」

「なんてつか、なあ」

考えてみるとわからなかつた。むかつく奴や氣に入らない連中がないことはない。クラスの中には弱いものいじめをするような奴がいないから手を出さないだけであつて、個人的にはむしゃくしゃするものがたしかにある。

たとえば、南雲あたりだなあ。

会つた時から虫の好かない相手というのはいるわけで、貴史にとつては規律委員の南雲がどうもその対象らしかつた。一言一言交わす時に、妙に気取つてゐる態度が気に入らない。小学校時代だつたら。

「立村が押さえてるだろ、しゃあねえよ」

よつやくこれだけ答えた。美里相手だ、そのくらい本音言つたつていいだろ。

「そりなんだ。まさに隠し事得意な人だからね」

「しゃあねえだろ。こつちだつて一発ぶんなくつてやるうかと思つてたら、あつとこう間に立村が話をつけてなんもなくなつてしまつんだ。俺だつてまあ、片付いていれば意味なくバカやる必要もねえから、そのままあなあになつちまうつていうか、さ」

欲求不満がたまつてゐるのは否めない。貴史は美里の顔を覗き込んだ。納得顔で頷いていた。

「だけどね、貴史」

「なんよ」

「いい時はいいけど、あのままじゃあまずいよね。私、今ほんつとにそう思つたよ」

「今つて、ああ今な」

貴史ももし、他に誰もいない場所だつたら、ためらひ」となく一発くらいぶんなぐつてゐるだろうと思つ。朝っぱらからアザ作るようなこともしたくない。向こうだつて、やり返すだろう。本気出したら怖い奴だ、立村は。

朝、美里が学校帰りに持ちかけたときはさすがにおどろいた。

「立村くん絶対、詩子ちゃんの出る舞台のこと知つてると思つんだ。詩子ちゃんのことは知らなかつたとしても、志遠流とかいう口舞の流派については知らないわけ絶対ないし、お母さんが口舞やお茶の関係の人詳しいつてのも聞いてるはずよ。貴史、昨日立村くんがお母さんらしい人と一緒にいたけど、違うつて言われてどうのこうの

つて言つてたじゅない？ だつたひれ、とほけるのもいいかげんに
しゆつて、言つてやりたくならなー？ 向こうの性格考えると絶対
に、素直に口を割るなんて思えないから、私と貴史とふたりで

一芝居、かよ。

当然貴史としては止めたかった。あたりまえだ。仮にも貴史にと
つては親友で、美里にとつては彼氏の立村をだ。騙すなんてやり方
が汚すぎる。

「やめろよ。こけたらお前立村から三行半突きつけられるぜ」

「だつてか、私も貴史も、そのくらいのことたんまりされてるんだ
よー。昨日から言つてるじゅない。私だつて何度も、言いたいこと
あるなら言つてよね、つて口すつぱくして言つてるのに、全然聞い
てくれないんだよー。だつたら、荒療治するしかないじゅない！」

「お前なあ、難しい」と言つてゐんじゅねえよ。それだつたら、え
とでつりあげりやいじゅねえか

「えさつてなによ」

「ほんとの」と言つてくれたら、ちゅーのひとつでもしてやるつて
「変態ー！」

すねを蹴られて逃げられた。捕まえるのに一苦労した。ブレザー
の襟を掴んで思いつきり突き飛ばしてやつた。通りすがりの高校生
たちに、

「やだねえ中学生、女子いじめてるよね」

と、非常に勘違いしたネタを飛ばされた。

結局校門で説得されてしまった。

だから話をあわせた。

でもな、やつぱりやだよなあ。尾を引くぜ。

別れ際の立村が、唇をかみ締めてうつむいていた姿が、一週間前
のあのことをいやおうなしに思い出すさせる。

宿泊研修三日目帰り際も、貴史はぎりぎりのところまでがまんして
家にかえった。襟ぐり掴んで追い詰めたけれども必死にこらえた。

やつたことが悪いとか、そんな先公みたいなことは言わねえよ。ただ。

バスの中から脱走したことに関して立村は一切言い訳しなかった。次の日、菱本先生により、ある程度かいづまんだ形で事件の真相を知らされたけれども、立村は一言も言ひ返さなかつた。冷たい目で二言三言尋ねただけだつた。

こいつかは話してくれるだらう。そういう気持ちでどうしようもないということを打ち明けてくれるだらう。これでも仲良くなつてしまんだから。美里だつて彼女だし、貴史だつて親友だ。

ずっと待ちつづけてきた一週間。しかし、立村の口は堅かつた。

何事もなく、何も起こらず、当たり障りのない言葉だけが続いていた。

「わかつた。美里。どうするこれから

「これからって？」

「教室にもどつちまうか、それとも大学の中で遊ぶか

答えはだいたいわかつていた。

「戻つてまたあの不景気な面見て、何が樂しいつていうのよ。向こうが頭にきてるのはわかつてるから、こつちだつてなにするかわからんないもん」

「わからねえなんて、言つなよ。しゃあねえなあ。美里、今日金どのくらい持つてるんだ？」

「ええつと、千円くらい」

そのくらいあれば十分だ。自転車もある。

「大学の図書館行つてみつか。あそこまで補導員も来ねえだらうじ。そこでさ、バンでもかじりながらひとつ、考えるとするか」

美里もようやく笑顔を取り戻した。こいつだつて一週間というものが、ひたすら悩んでいたはずだ。自分の彼氏だというのに、何も教えてもらえなかつたときたらプライドもずたずただろう。立村は美

里がどれだけあの宿泊研修中神経を痛めていたのか想像すらしてないに違いない。どのくらい泣いていたのか、どのくらい心配していたのか、たぶん。

「あとな、確認するが、美里」「なによ」

大切なことを、もう一度、きちんと確かめておきたかった。

「お前、立村と別れる気はねえんだな」

「あたりまえでしょ！」

これが本音だよここつ。

五時間同じ顔をつき合わせていると飽きたんでは、とよく親からも言われるが、なぜか美里相手だとそんなことがなかつた。会話が続く続く。切れない。合同家族旅行でも、いつもふたりが車の中で繰り広げる会話のおかげで誰も酔わないという、副産物つきだ。

図書館ではみな必死に、分厚い本を積み上げて勉強していた。閲覧室ではさすがに熱く語るのもためらわれるので、ロビーの長いすを占領し、チヨロロールパンだけ一袋買い込み、ふたりで分け合つて食べた。

「要するにや、立村にいいかげん隠し事するのを止めやつて言つたいだけだら」

「そうよ。それだけよ」

「でも直接言つても無駄だつて思うんだな」

「思うよ。何度も口で言つたけど、だめだつたんだもん」

「そりや そりだわな。だつたら」

ひとつ案を授けたことにした。正直、貴史もやり方が汚いと思うのだが、男としては本音でもあるわけで。

「美里、しばらくあいつと口を利くのをやめや。一緒に帰るのもやめろよ」「え？」

両手を口に重ねて、咳き込む美里。食いすぎたんだらう。

「つまりだな、男としては、自分の付き合っている女が相手にしてくれなくなつたらまず焦るだろ。俺も鈴蘭優ちゃんが……」

「あんた生で会つたことないくせに、ばあか」

「うるせえ。立村もお前の知つてるとおり、お前に、まあ、その、あれだつてことは男の立場からしてよおくわかる」

「うそばっかり」

口ではそういうものの、ソファーのクッションを指先でもみもみしているところみると、まんざらでもなさそうだ。おもしろい。「そういう相手がだ、いきなり相手にしてくれないとなつたりどうする？」

「でも男子だよ。やきもち妬くなんてこと立村くんにかぎつて」「いや、世の中わからねえぞ。まあ代わりに俺と帰つたつていつものことだからあいつも何も言わないだろうよ。他の奴と帰るとか、あとはそうだな、大学にもぐりこむか小学校時代の連中と遊んでるか、言い訳してとにかくあいつから距離を取れ。そうしたら」「うそだあ」

美里は目を真ん丸く見開いた。

「そんなことしたら、立村くん、あつさり」

「わかつてねえなあ、美里。お前、男の心理を全然理解してねえよ。つたく、だから女は神経逆なでするようなこと平氣で言つんだよなあ」

「なによ、あんただつてその倍言つくせに！」

一瞬、後ろの方から、ちつと舌打ちする音が聞こえた。カウンターに座つてゐる、白いトレーナー姿の若い男性だった。

「もつと小さい声で言えよ。ばあか。美里いいか、よつく聞け」

仕方ない。貴史の経験的男性心理のレクチャーをするしかない。聞きたくてならないのが見え見えの美里が、ずいと貴史の方に顔を向ける。肩と肩が触れ合わんばかりいくつついてしまつ。相手が鈴蘭優だつたら話は別だらうが、なにせ一緒に布団に寝てもトークで

盛り上がるのが関の山の自分らだった。勝手に想像する連中にはばかり、と言つてやう。

「あのな、男はしつこい女が好きじゃねえんだ。別にしな作つて迫るのも気持ち悪いが、こっちの方からべたつとやられると、やる気がだんだなくなつてくるもんなんだ」

「ははん、だから一年のあの子を振つたわけなんだ」

「関係ねえだろ！ とにかくだ、うるさくされると氣に入つていた相手ともしゃべる氣なくなるし、かえつてうざつたくなるつてわけだ」

妙に納得顔で頷く美里がいる。素直にしてりやいくらでも教えてやるのにだ。反省しる、とつぶやいた。

「ふうん、そなんだ。でも相手によるんじゃない？ それか貴史の趣味か」

「大抵の男はそういうもんなんだ。立村が本条先輩とホモの関係でない限り、奴にも通用するはずだ」

「難しいところね」

おいおい、お前の彼氏だら、とつこみたくなるが、ここには落ち着けと自分に言い聞かせた。

「けど、一学期の奈良岡と南雲の一件みただろ？ 全然奈良岡のねーさんがその気なかつたのに、あの女つたらしがすべてをかなぐり捨てて追い掛け回したつていうあれだ。俺からしたらどうも、きな臭い匂いがするんだが、結局くつづいちまつたんだからしゃあねえな。あががいい例だろ」

「彰子ちゃんの場合は特別だよ。男子は性格のいい子が好きだつていうただそれだけでしょ」

いちいち言い返す美里を説得するのは面倒だ。貴史はひとこと、じやがつしいとつぶやいた。

「黙れ。要するに俺が伝授したい」とつてのはだ」

声を低めて、両手に息を吹きかけて。

「立村に追いかけさせろ。美里がもう自分のことを好きでないんで

ないかつて不安にさせてみる。そうしたらあいつだって男だ。必死になんとかしようとすると決まってる。無視されたらその時は、お前もあきらめろ」

「あきらめろって？」

「ま、そういうことはねえと思うがな、あれだけお前のことを清坂氏とか言つてるくらいなんだからなあ。別に好きな奴がいるような顔して、しばらく奴のことを無視してやれば少しほは、反省するだろうな。男はな、美里」

最後の秘策を授けた。

「アイドルの追っかけとおんなじだ。手が届かないと思つほど、燃えるんだ」

「あんたと鈴蘭優のようにな」

今度は貴史が美里をかばんでぶん殴る番だつた。きやあ、つと小さな悲鳴をあげつつ、尻でパンをつぶしそうになりながら、ソファーに倒れこんだ。

羽飛家と清坂家を知る人には「ぐふつ」の日常なのだが、どうもこの図書館では違つらし。斜め前の「コピー機前に並んでいた五人の男女が、申し合わせたようにじりじりとにらみつけてきた。

「どうする？ 場所移動する？」

「そうだな、次は生協のカフェテリアだな」

そそくさと図書館を後にした。まだ一時間目は終わっていないだらう。

やはり空は雨が降りそうで降らない、しけつた風が吹いていた。

3 清坂美里は見たもので判断する

小遣いはかなり減つたけれども、久々のおさぼりはなかなか楽しかつた。連れの相手が貴史だつたから、気兼ねなかつたつていうものもあるだろう。別の授業でたまたまビデオ映画が放映されていたのでこつそりもぐりこんだり、カフェテリアで贅沢してアイスクリー

ム付き珈琲ゼリーを頼んだり。

四時過ぎになるまでずっと遊びほほつけていたかった。

「明日は、どうする?」

「学校に戻るしかねえだろ!」

「そりだよねえ、でもさ、念のため教室に戻つてみない?」

美里は時計の針が四時十分をさすのを確認してから中学の方角を指差した。

「だな、なんかプリント渡されてたらしゃれにならねえし」

見事なくらいのさぼりだつたから、たぶん明日、先生には呼び出しを食つだらう。それは仕方ない。あとでこずえにクラスがどんな状態だつたかを確認すべく電話をかけようと決めた。

空はまだ雨が降らなかつた。途中、

「やつぱりあんたらさぼつてたんだあ」

と、他のクラスの子から声をかけられたりもした。でも貴史と一緒に行動することは、すでに当たり前のことになつていた。そういうように仕向けたのだ。一年間、クラス、教師、その他もうもうよく教育したと、美里は思う。

いつもだと教室に誰かかしらうのだが、今日はひとりもいなかつた。いつも残つてゐる相手の代表格、立村上総の姿もなかつた。

しかたないよね、帰つてるか。今日は委員会もないから、本条先輩のところに行つてるのかな。

「本条先輩」と名前が浮かんだとたん、ちりりと心に紙の破れる音がした。

きつと、立村くんは本条先輩にだけ、本当にこと話してるんだろうな。

私には絶対話せない」と。

「おいでじした美里」

つづむいてしまつたのに気付かれたらしい。貴史がちょっとだけぞの利いた声で尋ねてきた。だんだんぎこちない声に変わってきて

いる。

「なんでもないよ」

掃除の終わったぴかぴかの机と床。美里は自分の机にしゃがみこんだ。まさかばんから筆記用具とノートを用意した。一枚引きちぎつてメモを残した。

「何書いてるんだよ」

「菱本先生に、今日は『めんなさい』って」

菱本先生、今日は『めんなさい』。明日は『めんなさい』。明日は『めんなさい』。明日は『めんなさい』。明日は『めんなさい』。

「なんだよ、これ」

「ほりあんたも書いときなよ」

貴史にマジックペンを渡した。書くまで見張るつもりでいた。

「どつぼこはまりそうな気、するけどな」

先生』『めん。いろいろと事情があるんだ。人生いろいろあるつてことだよな。

お互いの名前を最後に記した。教師用の靴箱に入れてくれておいていた。した。

「じゃあさてと、万が一うちに連絡が入っていた場合の言訳を考えるか」

「そうね、でもまあいろいろあつたと『まかすしかないよね。たぶん菱本さんのことだから、すぐに連絡が行つてるとは思わないけどね。大学の図書館で調べたいものがあつて貴史をひっぱつていったら、あつという間に時間が経つてしまつてたつてことにしようが」

美里なりに考えた案である。学校がどれほどのものかと割り切つている両親に言い訳するのはそれほど辛くないけれど、やはりさぼりはまずいだろつ。特に原因が立村くんのことだとしたらなおさら

だ。

なんかわかんないけど、うちの親嫌がつてるらしいもんね。あの人のこと。

「わかった。口裏あわせとく」

「お願いよ。さてと、なんかプリントかなにか入つてるかな」机の中を覗き込んだ。学校を休んだ次の日、必ずなにかかしら入つているものだつた。たぶん誰かが入れてくれたのだろう。左手でかき回してみると、しゃかしゃかと音がした。かなりたくさん入つていて、ノートかもしね。引っ張り出してみると、「学年だより」「保健委員会だより」に混じつて分厚い「コピー」が十枚くらいい、二つ折りで押し込まれていた。

「なんだろうね、これ」

言いながら開いた。

立村くんの字だ。

書道の楷書に似た細い文字だつた。和歌でも短冊に書いて飾つておきたい、そんな細々とした文字だつた。見忘れるはずがない。名前がなくともわかる。

「おい、美里、これつてさあなんだよ」

窓際で背中のシャツを橙色に染めてかがみこんでいた貴史も叫んでいた。

「わかつてるつてば」

「わかつてるつておい。お前のここにも入つてたのか?」

窓から差し込んでくるいきなりの夕焼け色。うす曇の雲が突然裂け、溢れている輝きがまぶしかつた。さつきまであんなに暗かつたのに。貴史の全身を染めていた。どう思つていいのかは光に溶けて見えないけれど。

「これ、立村くんのノートまるまるコピーだよ。英語も、国語も入つてる」

「あいつコピーしたのかよ」

「今日の数学、立村くん空間図形のこんな難しい問題、自分で解け

るわけないじゃない。こいつだって狩野先生に小学生レベルの易しい問題渡されてるんだよ。絶対に難しい問題[写す]わけないじゃない。それに英語だつて

あせつてめぐり取り落とした。しゃがみこみ、広げた。

「私だつたら絶対こんな難しい訳つけないよ。引用文まで[写したりしないよ。全部立村くん、明日の分の予習分、全部作つてくれてる」

「あいつがか」

拾い集めてもう一度たたんだ。手がコピーのインクでいつすら艶のある黒味を帯びた。ハンカチでこするうとしたとたん、鼻のところがつんとして息が詰まつた。目を閉じたとたん、まぶたが熱くなつた。

「おい、どうした美里」「違うよこんなの」

貴史が橙色の光から飛び出してきた。背負つた影が長く伸びた。近寄られると体温からか、じわつと首筋が熱くなつた。たぶんさつきまで浴びていた夕日の余熱なのだろう。かえつて泣ける。美里は「ペー用紙を机に叩きつけた。他の関係ないプリント用紙が滑り落ちた。

「私、こんなことしてほしかつたからじゃないって、どうしてわかんないのよー。どうしてよどりしてよどりしてよー...」「おいおい何いきなりわめいてるんだよ」

「わかつてないのよ全然！ 立村くん、これで罪滅ぼししたつもりなんだよきつと。立村くん、これで私にあやまつたつもりでいるんだよ。ばかみたい。そんなことしてほしいからじゃないんだよ。どうして立村くんには言葉が通じないのよ。もついやだよ」

言葉は返つてこなかつた。いつもなら貴史も立村くんについてかばう言葉を口にするはずなのに、窓の方を向いて顔を見せないようになつた。美里の机に尻を押し付け、身体を折り曲げていた

「貴史、わかつてるよね、あの日のこと。なんで立村くんが宿泊研修三日目の中、大嘘ついてバスから飛び降りて美術館に逃げ出した

のか。理由わかつてゐるよね

「ああ」

首を振りたくてならなかつた。わかつてゐるなら言つてほしかつた。「A組の人たちと合流するのをやめさせたかったんでしょ。ただそれだけでしょ。そりやわかるよ。前の日だつて立村くんずっと菱本先生に食つて掛かつてたもん。A組の人人が退学するから集まつてゐるだけだから、ほつといてあげてほしにって思つのが立村くん流だよね。わからぬわけじやないけども

「まあな」

貴史の返事は短い。

「でもどうして、私に言つてくれなかつたのかわからんないよ。いつん、貴史にだつて一言も、きりきりまで言つてくれなかつたんでしょ。わざとこづえの隣に座つて、わざとものを外に落とした振りして、わざと菱本先生に泣きついて下ろしてくれつて嘘いつて、あんな情けないことしてまでして、なんでそこまでしなくちゃいけなかつたのか、私にはわからんないよ」

「俺たちだつたら、もつとづまくやつたよな、美里」
「いらっしゃい、あんな奴、だいきらい」
「だいきらい、あんな奴、だいきらい」

涙畳の眼に、テレホンクラブの電話番号がプリントされた深紅のポケットティッシュが見えた。貴史がポケットから出したものだつた。まだ手付かずだ。ゴローの上にぽんと置いてくれた。

家に戻つたのはかなり遅かつた。親の顔を覗き込んだが何も知らされていらないらしくいつものように洗濯の手伝いをさせられた。やっぱり菱本先生、その辺はわかつてくれている。怒られたくないのは当然だ。明日言い訳しておこうと決めた。優等生っぽく、「図書館で本読んでいてはまつた」が一番だろつ。

部屋に戻ると一通、手紙が机の上に置かれていた。

銀杏のイラストで飾られたきれいな封筒。

差出人は「藤野詩子」だった。

詩子ちゃんだ。

一年ぶり、だよね。

すぐに封を切った。たつた一枚だけ一筆書きの便箋が入っている

清坂美里さま

お久しぶりです。お元気ですか。

このたびは、いらしてくださるそぞりありがとうございます。
ぜひ、楽屋にもいらしてください。

お待ちしています。

木々が揺さぶられて葉が落ちた時、きっと幹は淋しく思うのだろう。

来てほしくないというのが見え見えだ。

言葉どおりに受け止めれば、感謝で一杯なのだろうけれども。

前の詩子ちゃんだったらもっと、いっぱい書いてくれてたよね。

決して文章が巧いわけではないけれど、以前の詩子ちゃんだったらもっと、学校のこととか、クラスのこととか、家族のこととかをたくさん綴ってくれたはずだった。なのに、用件と心のこもらないありがとうだけ。

きっと詩子ちゃん、まだ私のことを許していないんだ。

封筒にしまおうとしてびんせんをひっくり返した拍子に、銀色の文字がちらつと横切った。目に入るか入らないか、本当に小さく。本文よりも丸っこい文字だった。きっと封印する寸前に書き込んだのだろう。田に近づけてゆっくり読んだ。

時辻さんという人、青大附属にいますか？

今度会った時、教えてください。

三回読み返した。何度読んでもわからない。

時辻さんってだれ？

少なくとも一年にはいないけど。

詩子ちゃんの知り合いなのかなあ。

「立村」ではないのかと何度もみ返した。でもどうみても「時辻」としか読めなかつた。別の関係で、詩子ちゃんには知り合いでいるのだろうか。

「今度会つた時、教えてください」とあるところみると、十月五日には美里と会つて話をしたいという気持ちはあるのだらう。別の日に会いたいから電話をよこせつてことかもしれない。どちらにせよ、落ち着かないで美里としては時間を作つて会いたかつた。顔を合わせて一対一で話をしないと、伝わるものも伝わらない。あのばか彼氏で泣きじやくした後の美里としては、なんとか口ですべてを伝えたかつた。

詩子ちゃんに会おう。絶対に。

私が、青大附属に行こうと思つた理由をすべて話そつ。これで詩子ちゃんとはこれつきりになるかもしないけど、でも。

じらえて知らん顔で樂屋を尋ねてゆくのだろう。立村くんだったときつときつするだらう。何事もなかつたかのよつに友だちづきあいをしつづけるのだらう。立村くんのよつ。

でも、明日から美里は立村くんを一切無視しつづける予定だつた。立村くんのやり方を真つ正面から否定してやるつもりだつた。後ろには貴史もついている。

相手のやり方を別の友だちで真似るのだけは、絶対にいやだつた。

私は、あんたが間違つてゐてこと、絶対に認めさせてやる

んだから。立村くん。あんたが何も言わないから私が怒ってるってこと、わかつてもらわないと、絶対に困るんだから。私だけじゃない、貴史だって絶対そうなんだって。

1 立村上総としては当然のことだと思ふ

全く状況は変わっていない。

「あのや、立村も何やってるんだかねえ。美里を怒らせるようなことしたわけ？ あんたにはもう少し気合入れてがんばつてもらわないと、こっちの方が大変なんだからね」

朝一番、古川こずえのやかましい声が耳をつんざいた。

「古川さんに何迷惑かけたつていうんだよ」

「羽飛と美里がくつついちゃつたらどうするの？」

靴をすのこの上で履き替えながら、上総は深くため息をついた。

「それでもいいだろ、別に」

昨日、美里を追いかけて貴史まで姿をくらましてしまったことに、きつここずえは動搖しているのだろう。そうに違いない。一年の頃からこずえは「羽飛がんばれー！」の絶叫で並み居るクラスマート一同を凍らせていたのだから。非常に分かりやすい「好き」の表現者だ。

もつとも貴史は全く無視しているらしい。タイプではないらしい。何のことはない。貴史の場合アイドル鈴蘭優ぱりの美少女でないかぎり、女を感じないのだからしかたない。

羽飛もな、人のことばかり面倒みてないで自分のことも。

上総から見ると、こずえと貴史はなかなかいいコンビになりそうな気がする。妙にいちゃいちゃしない、からつとした、他人様にも迷惑をかけない感じの仲良しにだつた。南雲と奈良岡彰子ほどくつつきあつていいない。自分と清坂美里ほど隔たりがない。

でも、そんな面倒なことしたくないってのもわかるよな。

しつこく顔を覗き込んでくるこずえを手で追い払った。

「古川さん、俺以外にもかまいたい相手がいるんだろ。ほりせつさと行けば」

「なあに言つてるのよ。HACHの対象外だから安心して話せるんじゃないの」

「あのせ、朝から話すことじやないだろ」

よくわからないがこずえは決して上総のことを嫌つていないというのがよくわかる。だから安心して下ネタの応酬ができるってわけだろう。裏を返せば色恋の対象外だと割り切つてくれているから、何を話しても傷つけないで済む。こういう付き合いだつたらいくらでも受けて立つのに、なんで。

清坂氏とはうまくいかないんだろう。

付き合つって、やつぱり、よくわからないよな。

外は黒雲に覆われている。驟雨の到来か。上総は三年側の靴箱を、身体斜めにして覗き込んだ。A組の、下の段が乱れていいかを確かめた。本条先輩の靴がその辺に並んでいる。来ていたら靴箱が開いたままになつていいはずだった。

「ほらほら、行くよ」

憎まれ口を叩きながら待つていってくれたらしい。好意を無にするのもなんだつてことで、上総はこずえと並んで歩いた。階段を昇りがけに、また一発、

「でさ、今日あんたも朝、大丈夫だつた?」

「なにがだよ」

「朝立ちあつた?」

いつものパターンだ。さらりと流した。

「あつたらどうする」

「いや、ストレスたまるといろいろ男子つて大変だつてきくからさ。お姉さんとしては気にしてやつたのよ」

「そういうのを、よけいなお世話つていうんだよ。女子のみなさん

には気遣いのひとつとして覚えておいた方がいいと思つた

顔をしかめて見せたこずえ。やれやれといった風に片腕をぐるん

と回した。

「あのさ立村、あんたどうして女子みたいな発想するわけ？ 昨日あんたが美里を追いかけなかつた気持ちもわからんくはないけどさ、でも」

「話を蒸し返すよつだつたら、今のネタを全部羽飛に言いつけるからな」

「こずえの弱点を知つてゐる上総の逆襲技。貴史の前ではもう少し可愛く見せたいと思う乙女心だ。みんな承知しているのにつゝこまないのは、後でこずえに下ネタ攻撃されるのが怖いからだろつ。その点、上総は一年半、猥談攻撃に慣らされていた。

「わかつたわよ。ほんつとあんたつて反抗期よね」

三年A組の教室に寄つてからにしよつと決め、一階まできたところでこずえと別れた。来週の評議委員会に関する資料、十月末の学

校祭、および一年限定合唱コンクールに関する意見書を本条先輩に

渡したかつたからだつた。理由はある。

「なあに逃げてるのよ」

とはこずえの捨て台詞だつた。
用事があるのでから仕方ない。

三年の教室にはだいぶ人が揃つてゐた。顔見知りの先輩も並んでいた。

上総が扉を開けて覗き込むと、

「まだ本条来てねえぞ」

と声をかけてくれた。一年間しつこく通い続けたかいあつて、すつかり「本条里希の弟分」としての認識を持たれてゐるらしかつた。クラスにいづらくなつて休み時間、本条先輩のいる場所に避難したことも一度や一度ではない。無理やり用事を見つけては側にくつついていて、時間をつぶすだけのことだ。十分いやされた。

少し待つつもりで廊下の窓辺にもたれた。

外にいのししめいた雲が通り過ぎているのが見えた。

昨日と違ひだいぶ冷え込んできたのが肌で感じられる。首筋、手の甲の皮が堅くなっていた。上総は外をぼんやりと眺めながら、銀杏の葉が黄葉していないかを確かめた。一枚もその気配なし。かばんからノートを取り出した。昨日の夜は眠れなかつたから、十月の学校祭、球技大会、一年限定期合唱コンクールの手はずについて書き込んでいただけだった。

ゆっくり動いていく黒い雲。

本条先輩、公立高校行くんだよな。

誰にも打ち明けていないと、本条先輩は夏の評議委員夏合宿の夜話していた。

確認していないけれども、まだ他のクラスから「評議委員長本条里希が公立高校を受験する」噂が流れてこないところ見ると自主的に話をしてはいないらしい。知っているのは上総だけなのかもしれない。男女問わず交流の多い本条先輩だが、とりわけ親友と言える相手がいるわけではなさそうだ。上総も一年半じっくりと観察してきたが、男性との友情関係はつかず離れず、上手に取っているふうに見えた

いなくなっちゃうんだよな。

もう一度心でつぶやき、上総は一階に下りていった。すれ違うかと思つて何度かきょろきょろした。全く気配がなかつた。二年D組の教室にたどり着くまでの間、友だちとは顔を合わせたし挨拶もしたけれど、結局本条先輩の姿は見かけなかつた。

「立村、お前なあ」

開口一番。

貴史が上総の机に寄りかかつて腕組みをして待つていた。

「ああ、羽飛、昨日はごめん」

「そんなのどうでもいい。あのな、よく聞けよ」

機嫌は決して良くなさそうだった。腰を低くして貴史の側に寄つた。

「「じめん、俺も悪かった、だから」

「黙つてろ、お前美里があの後どうしたのか知らねえのかよ」
美里の席はからつぽだつた。貴史の首の陰から覗き込むが、他の女子が勝手に椅子を借用してだべつているだけだつた。

「清坂氏、まだ来てないんだ」

「当たり前だろ！ ここだけの話だがな、立村」

声をくぐもらせて貴史が耳にささやいた。

「美里、お前に相当愛想尽かしたみたいだぞ。あいつ、真剣に今後のこと考えねばって言つてたぞ」

「今後つて、なんだよ」

にやつと笑つて上総のネクタイを軽く引っ張つた。

「お前は一年半しかあいつのことを見てないから知らんだろうが、美里は結構、上級生受けする性格なんだ。かなり、今までもちよつかい出されてたらしいんだ。でも立村がいるからつてことできつぱり断つてきたらしいけどな。聞いてねえか。でも、言つてたぞ。『一回、まともな人と付き合つてみて、それから立村くんとどうするか考えた方がいいかも』ってな。まあまだ、相手を選ぼうとか、そういうとこまでは進んでないみたいだけどな。立村。お前本当に、このままだと美里に縁切られちまうぞ」

「縁を切られるつて言つても」

上総は貴史と互いの顔を見交わした。嘘を言つていなか、もしかしたら立村が引き止めてくれるんいかと真剣に思つたらしいぞ。せつかく追つかけてやつたのにさ、俺なんておよびでなかつたみたいだしな。しゃあないから、俺があいつをとつつかまえて聞き出したところ、そういうことだ。立村、本当にこのままだ

た。

「昨日お前、結局美里を追つかけなかつただろ。あいつのことだ、もしかしたら立村が引き止めてくれるんいかと真剣に思つたらしいぞ。せつかく追つかけてやつたのにさ、俺なんておよびでなかつたみたいだしな。しゃあないから、俺があいつをとつつかまえて聞き出したところ、そういうことだ。立村、本当にこのままだ

と大変だぞ。まあ、俺には関係ねえけどな」

以上、一切、周りのクラスメートには聞き取れない声でささやき、貴史は自分の席に戻った。誰かがいきなり蛍光灯をつけた。初めて教室が暗く、人の顔色を読み取れないくらいだったことに気が付いた。

縁を切られるつたつて、羽飛。

扉をもう一度眺めやつた。

「ねえねえ、何話してたのよ。羽飛とさ

「なんでもないよ」

席につくやいなや隣りでせつづく「ねえをあしら」、もう一度前がわ、後ろ側の扉に目を走らせ、あきらめた。来てもこなぐても、どつつけにせよ。

俺はじうすればいいんだろう。

美里が入ってきたのは後ろ側の扉からだつた。上総の席の隣りを行き過ぎる際に、一言、

「昨日は、ありがと」

そつけない礼を告げた後、さつさと自分の席に付いた。

見るからに「機嫌はよくなかった。

「あのさ、清坂氏」

「あ、もういいから」

田を合わせずに上総の言葉を打ち切つた。二の句が継げない上総を一切無視し、教科書の準備を始めた。貴史に向かって軽く手を上げてなにやらひそひそ話をしている様子だが、当然声は聞こえない。

い。

「あんたねえ、本当に男としてやることしなくちゃダメよ。立村、あんたさあ、美里と羽飛くつつけどつするのよ。まじまじ、浮気されてるかもよ」

「別に、それはそれで」

するするつと言葉が流れた。

「俺は羽飛と清坂氏が付き合つようになつたとしても、そのまままでいられると思うけどな」

決して深い意味はなかつた。

少なくとも上総はそういうつもりで言つた。

「立村、ちょっとこっち向きな

平らな声で呼ぶこづえ。振り向いたとたん、筒のようなものが目に入り、避ける間もなく頬をはたかれた。地図帳を丸めて制裁を加えたつもりらしい。本の角が頬を擦つた。

「なんだよ、冗談やるにも程があるよな

「お黙り。お姉さんの言うことをよく聞きな

片方の耳が少しハウリングしている。上総は頬をさすりながらぎつとこづえをにらみつけた。当然の権利だ。

「古川さん、なぜそういう暴力的なことをするんだよ

「正当な意味での体罰は必要つてことよ。あんた、自分が何を言つてるかよくわかつてないんじゃないの。まずあんた、誰に答えた?」

「そりやあ、古川さんに

「私が誰に熱上げてるかよく知つてゐよね

「ごめん、忘れてた

「それはいいよ。どうせ脈ないつて思つてるだらうしね。それから、美里とあんたはどういう関係?」

「関係つて、まあ、一応

「彼氏彼女つてことは、了解あればキスもできるしHッチもできるつてことだよね」

過激な朝の漫才。この辺りはポーカーフェイスで通すことにした。

「立村、あんたそういうことを自分の大切な相手が他の男とそういうことしているつて想像できる? 羽飛にされたらどうするか想像したことある?」

「だから別に、友だちなんだから

言い終わる前にもう一発肩を殴られた。避けられない。

「あんたの言つてること、美里のことなんてどうでもいいっていう意味に取られたってしちゃがないよ。あんた、英語は天才的だけど、日本語の素養全然なってないよね。少し反省しな。もし立村、あんたがおんなじ」と言われたらいびつするのを。美里に、私とあんたがくつついても付き合いでできるって言われたら」

少し考えて、上総は答えることにした。

「そうしたら古川さんが逃げるだる。でも、仮にそうなつたとしても、四人でしゃべることには変わりないんじゃないかな」

全く何も考えてないのに、なぜ目が吊り上がるのだろう。いづえが貴史にほの字だとこりの字は前から知つていてことだ。できれば二人がうまく行つてほしいと思っている。ひそかに応援してやることに決めている。

美里と貴史にやきもち妬いているならば話はわかる。

古川さん、なんで憤つてるんだろ。

上総にはどうしてもわからなかつた。

「あんた、どうして友だちつてことにしてだわるんだろうね。つたく、ガキなんだから」

「悪かつたな」

話を打ち切りもう一度、貴史と美里の顔色をそつとのぞいてみた。いづえとのやりあいを盗み聞きした様子はなかつた。もしかしたら傷つけてしまう言葉だつたのかもしない。上総としてはただ。

ふたりとも、俺にとつては大切な友だちだからそう言つただけなのにさ。

思えば思つほど、ずれていく言葉の地軸。元に戻したくて必死に突つ立てているのに。

授業が一通り終わるまで、上総はほとんど貴史と会話を交わさなかつた。不自然な無視ではない。出席番号順に並ぶ授業がたまたまなかつたことと、南雲とまといつものように音楽の話題を交わしたり、委員会の最新情報をまじえたり、盛り上がつていたから、ただそれだけだつた。

帰りの会、締めの言葉の最後に、担任菱本先生は、貴史と美里を指差した。

「今日は居残りしろよ。羽飛、清坂。終わったら生徒指導室に来い。真面目な顔をしているけれども唇からは笑みがあふれんばかりだ。決して鉄拳制裁を加えようとはしていないらしい。ふたり、肩をすくめ、田配せしてなにやら合図しているらしい。上総は終礼が終わるとちらりと背中に視線を走らせた後、大急ぎで教室を出た。

昨日のことだと絞られるのかな。

次は俺が呼び出されるかもな。その時はその時だ。

外は土砂降りだった。廊下に少し、傘から落ちた雨粒が染み付き床を濃い色に染めていた。

2 羽飛貴史としては「」で押さえておかねばならないと思い

「いい？ 貴史、部屋に入つたらなにはともあれすぐ、『ごめんなさいつてするのよ。そうすればあとはこっちのペースなんだから』

「美里もずいぶん、計算高い性格になつたよな」

帰りの会が終り、立村が脱兎の「」とく教室を飛び出していったのを見届けて、貴史は美里に返事をした。

「何考てるんだろうな、しつかしあいつも」

「知らない、そんなの知つたことじやないつて。もう」

美里の演技も相当なものだと貴史ははつなつていた。前の日に授けた「男心をかく乱させるためのテクニック」を、美里はすっかり身に付けている。女つて、一時間で変わるもんだ。つづく感心しつつも、思う。

いざという時は俺も、気をつけれってことだよな。美里と立村で、俺の将来の勉強をするつてわけかよ、なんだかなあ。

窓ガラスを叩いている雨の音。この中を走つて帰つたとは思えない。立村の姿を探したけれどいなかつた。きっと、三年A組の本条先輩にぐちりに行つたに違いない。美里に嫌われたんでないかと真剣に相談しに行つたに違いない。

俺には話さないことも、本条先輩にだけはホモみたいにくつついてるからなあ。

男相手に嫉妬するなんてもつたいたいことはしない。それが貴史の主義だった。しばらくは放つておくつもりだった。

美里がかばんに教科書類をしまいこむのを待ち教室を出た。いまさらひゅうひゅう言う奴はいないけれども、なんとなく細い視線がからみつく。振り返ると、B4版のスケッチブックを開いて他の連中としゃべっている南雲から発せられていた。ずいぶん、きざつたらしいまなざしだ。髪も裾をぎざぎざにそろえ、前髪の付け根を軽く持ち上げたすタイルだ。こっちを見ているだけだ。

つたく、何か文句あるのかよ。

見られているだけでむかつく。時間があればいちゃもんつけてもいいが今日のところはがまんしてやろう。貴史は音を思いつきり立てて扉を閉めた。

「貴史あんた、ちょっとでかい音立てすぎだよ。みんな白い目で見てたよ」

「いいじゃねえか。どうせ」

生徒指導室は三階の視聴覚教室隣りに配置されていた。放課後に問題のある生徒を呼び出すための場所だから、あまり人気のないところがよいという配慮からなされたものだという。実際は遅刻の多い奴が説教されたり、公立高校受験などで相談する人が先生に呼び出されたりとか、そういう使われ方が多いらしい。

「貴史、生徒指導室に呼ばれたことあつたつけ」

「なんども。違反してる格好とか、髪にポマードつけるのやめろとか」

「それって趣味の問題よね。校則がどうのこのつていう以前にね、軽口を叩きながら人気のない生徒指導室の前に立った。

「あんた、入れば？」

「わあつた。じゃあノックは美里、お前がしろ、

人差し指を鉤型にして、奥ゆかしく美里が扉を叩いた。

「どうぞ」

菱本先生の声だった。

「じゃあ、行くわよ。いつせえの一で！」

結局美里が扉を開き、ふたりで合唱した。

「先生、昨日はごめんなさい！」

先手必勝。あっけに取られているのか菱本先生はうすく唇を開いたままだった。とにかく先に謝つておいて、深い追求を避けるようにしよう。美里と前日から本日にかけて煮詰めておいた計略だった。

「全くお前らふたり、いきなりエスケープするから心配してたんだぞ。ほら、座れ」

革張りのソファーアにふたり並んで座った。真正面からは樹齢百年以上は経っているであろう銀杏の木がカーテンから見え隠れしている。気付かなかつたけれども、ずいぶん葉が黄色く染まっている。

菱本先生がげんこつで頭を撫でた。痛くない。手加減しているところみると、ご機嫌はそれほど悪くなさそうだ。美里と田配せしつつ頷いた。

「じゃあまず罰の宿題だ。国語、英語、数学、社会。このプリントを明日までぜんぶやって来いよ。昨日の授業分、するけたんだからそのくらいはやれよ」

立村がコピーしてくれたノートのことを思い出した。

「すみません。けど、全部やるんですか？」

すっかり気を抜いた様子の美里が、渡されたプリント類をめぐり、うんざりした顔を見せた。そりやあ貴史だってあきあきする。

「出来ねえよ、先生。反省してるんだけどなあ」

「ばか者、一日休んだら授業についていくのに骨だと思つたから、俺が他の先生に頼んで作つてもらつたんだぞ。感謝しろ」

「これ以上つっこんでも意味なし。判断して貴史はかばんにしまいこむことにした。美里も真似をしていた。

「それはともかく、羽飛、清坂。ここだけの話、いきなり学校を抜け出したりするのには、それなりに事情があつたんだろ？　話せることだつたら話してみろ」

「人生いろいろあるもん」

茶化してごまかすつもりでいた。美里も大きく頷いた。

「いじめとかいやがらせとか、かつあげとかじやないから安心してください。まあただなんとなく、つて感じ」

「なあにふたりでおちゃらけてるんだ。あのな、清坂。ここだけの話、立村と何かあつたんだろ？」

知らん振りしろ、美里。

貴史の方を見て、物言いたげに「どうする？」という視線を送るのはやめてほしかった。ばればれじやないか。

「先生、なんで立村のことなんて出るんだ？　誰かそんなこと吹き込んだのか？」

ため口を叩いても菱本先生は怒らなかつた。嬉しいのだ、きっと。「朝、クラスの連中から聞いたぞ。みんな心配していたんだ。立村を含めた三人組で口げんかしていて、清坂が激怒して飛び出していつて、羽飛が慌てて追いかけていつてと」

「で、立村が取り残されてつてわけかよ」

ぼろつと口からこぼれてしまつた。いかんと思つたが遅かつた。やつぱり菱本先生は大人である。にやつと頬の筋肉を持ち上げた。

「無断欠席はまあ誉められたことじやないが、まあ、騎士が姫を守るために飛び出したということで、そうだな。お前たちの家に報告することだけは止めておこうか」

「どうせ一学期の出席日数、通信簿に書かれればれるけど」

よけいなことを言つ美里。どうやら美里も完全に菱本先生の手に

落ちたらしい。立村のよつに大騒ぎ起つりますよつも、適当に妥協しておくるもひとつ的方法だ。

どうせ、関係ないもんな。菱本さんとはな。

貴史も部屋の中ではへらへらすることに決めた。

菱本先生は両手を組んで一人の眼線にあわせるよつかがみこんだ。「羽飛。」こじだけの話、立村とはあの後、うまくやつてゐるのか」美里に尋ねないところがやはり、教師だ。貴史にとつて立村は「親友」だが、美里にとつては「恋人」だ。中学生の恋愛なんておおっぴらに認めたくないのだろう。「友情」で通すしかないだろう。

「別に、なんもないけど」

「宿泊研修の時のこと、まだ引きずつたりしてないか。あいつは宿泊研修三日目後遺症がかなり残つてゐるらしい。貴史はつんと鼻を天井に向け、ちょっとだけ考えた。隣りの美里がぎゅつと口を引き締めている。聞かれても変なこと答えるもんか、と言いたげだつた。

「先生、ショックだつたよなあ。気持ちわかるよ」

「そうか、わかるか。羽飛」

苦笑と一緒に小さく頷き、菱本先生は立ち上がつた。後ろの方に缶ジュースを用意してくれていたらしい。三本、ガラステーブルに置いた。だいぶぬるまつていた。

「内緒だぞ」

「ラツキーかも！ ありがとうござります！」

美里も用心していたようだが、食い物飲み物には弱い。永年美里と行動を共にしてきた貴史には、油断マークが点滅しているのがよくわかつた。美里を手なづけるにはケーキがあれば一発だ。あまたるいオレンジジュースをすすつた。ひじで小さく美里を小突いた。知らん振りしている。

宿泊研修三日目帰りのバス内で、立村がいきなり窓からものを落としたと騒ぎ出し、無理やりバスを止めさせ降りたはいい。しかし

進行方向とは反対側にいきなり走り出し、バスの運転手は計画どおりとばかりに美術館へゅつくりと進んだ。当然、二年D組連中および菱本先生はしばし慄然呆然。美里も当然、泣かんばかりだった。

貴史も思わず、

「あの大馬鹿野郎！」

と絶叫したのを覚えている。

意外と落ち着いていたのが立村の相手をしていた古川一吉で、「やつぱりねえ、なんかたくさんでいると思つたけどね」

わざとらしいため息を吐いてみせ、美里をさらに激昂させた。

「悪いけどさ、さつき立村、キー・ホルダーを落としたふりしてたけど、人差し指にひつかかってたまだつたよ。先生、気付かなかつたの？」

かわいそうだったのは菱本先生だ。さすがに貴史もこれは同情してしかるべきだと思つた。頭を抱え込み、運転手に激しく抗議し、「運転手さん、教師にとつて、自分の受け持ちの子どもは、ほんとの子どもみたいなもんですよ。それを、なぜ、そういうことをするんですか！」

見た見た。充血していた瞳を。菱本先生は熱血漢でかつ、真っ正面から受け止めてやるうと必死な男だと、貴史は認識していた。男としていい根性はしている。やり方があざといと思わなくもないけれど、貴史は嫌いなタイプの男ではなかつた。少なくとも南雲のようないつもへらへらして、女にだらしなくて、自分の見た目ばかり気遣つている奴よりははるかにましだと思つていた。

しかし、古川もずいぶん冷静だよなあ。あいつも見た目よりもかなりぱりぱりなのかもなあ。単なる下ネタ女王じゃねえってわけか。

口には出さない。氣があると誤解されたらもつと面倒なことになる。だから言わない。貴史はこの一件で古川一吉の頭脳明晰に一旦置くよになつた。さすが、美里と対で付き合える女子だ。

「先生、俺さ」

「バスの中ではさすがに言えねえあとは思つてたんだけさあ。た。

「バスの中ではさすがに言えねえあとは思つてたんだけさあ。ここだけの話」

「ここだけの話、か。まあいいだろ。言えよなんでも」心を開いた振りをするだけで、乗つてきてくれる菱本先生だ。このくらい立村だつてやればいいんだと、貴史は思う。ぬるくなつたオレンジジュースを頬に擦り付けるようにして飲み、貴史はぐいと身を乗り出した。

「先生、立村のこと、男として嫌いだろ」

団星を差してやつた。たぶんそうだろつと前から思つていたけれど、さすがに教師だから言えないだろ。そんなこと。

「おいおい、それは違うぞ。担任が受け持ちの生徒嫌つてどうするんだ。ばかだなあ。そう見えるのか。羽飛には」

菱本先生はにやつと笑つて美里に話しかけた。貴史に言葉は返しているが、聞かせたいのは美里の方だつてことだ。分かりやすい態度である。貴史はさらに続けた。

「言い方代えるとさ、先生の友だちとして付き合つ場合、ああいう奴、苦手だろ」

「羽飛にはまいつたなあ。まあなあ、たぶんああいうタイプで遊ぶ友だちはいなあ」

玉虫色のお答えである。もちろん田線は美里を向いたままだ。不気味がつている美里の気持ちはわかる。でももつとつこまないと話が進まない。

「だろ。俺も先生の気持ちわかるよ。あの宿泊研修の時、すっげえ俺も頭にきたもんな。なんで誰にも何にも言わないで勝手にやつちまつんだつてさ。今だから言えるけど、一発ぶん殴つてやるうつて本気で思つてたんだ」

「ほう、立村をか?」

「先生だつてそうだろ?」

菱本先生は軽く握りこぶしをつくつて、軽く揺らしてみせた。

「でも羽飛が殴つたら、立村ふつとんでしまつんじやないか」

「あいつ、見た目よりも根性ある奴だから、たぶん五分だと想つ。先生はたぶん知らねえと思うけど、立村は見た目よりすぐえ喧嘩強いと思うんだ。だから俺もよっぽどのことがないと手を出したくないんだ。だから、まあがまんしたつてわけなんだ、けどさ」

言葉を切つて菱本先生の出かたを待つた。同時に美里に伝わつてゐるかどうかを確かめた。軽く美里の足を踏んでみた。黙つてゐる、の合図だ。

「そうか、お前立村のこと結構買つてゐるんだなあ

だんだんひつかかってきた。もう一度美里の足を踏んづけて、こ

くこく頷いた。

「そうだよ。先生さ、なんで立村が評議としてずっとみんなから評価されてるか謎でなんないだろ。そういう顔、いつもしてるもんなあ。あいつも見栄つ張りだから表面ばっかりいいようにしてごまかしてゐるけど、本当はずつと頭も切れる奴だつてここまで隠してゐんだ。俺にはわかるんだ。な、美里もわかるだろ」

じょじょに美里の顔が赤らんできた。決して部屋の中が暑いからではない。

「友だちとして、立村と会話が続くのか?」

「いや、それがさ」

ここでひとつ、爆弾を投げてみよう。貴史は美里をちらつと見やつた。とにかく、美里に口出しをしてほしくない。瞬間沸騰で思いついた湯気のような案だつた。かき回されたら消えてしまいそうだつた。

「ご存知の通り、あいつつてしゃべらねえよ。ほんつと、俺とか美里とか、あと古川とかがさんざんこけにして遊んでいるけど。でも、なんつてのかなあ、立村とふたりでいろいろネタかましてると、俺の方がすうつと気持ちよくなるんだ。優ちゃんのレコードをねバ

— ホンディングで聴いていのと同じような感じで
「ふふふと噴き出す声。美里だ。あとで蹴りだ。本当のことを言つ
てるだけだ。

「お前、そういう友だちつてもうとこると思つてたけどなあ」「
やつとこむらを向いてくれた菱本先生。ぐつと田を見つめて五回、
細かく頷きを繰り返した

「いねえよ。俺は友だちを選ぶんだ。だけどさ、先生。本当のところ
俺があいつにどう思われるかはわからねえけどな。こらこら考
えることあつてさあ。例の宿泊研修以来」

咽が渴いてきた。口よりもまず身体の中の方が警告サインを出し
ているらしい。別に嘘を言つていいわけではないけれど、貴史らし
くないことしているという意識はあるらしい。

「ああ、そうだな。羽飛、理由は説明しだらう」

「一応、先生から聞いたことで見当はついた。バスの中でも古川が
謎解きやつてくれたからな。けどさ、あいつ俺だけじゃなくて、ハ
ーーの美里にすらほんとのこと言つてねえんだぜ」

「貴史！」

とつとつ美里が足をぐりぐりつぶしにかかった。美里の本気は怖
い。帰りは距離おいて帰ろうと決めた。

「ハニーときたか、羽飛、お前おもしろいなあ

笑いこけている菱本先生。当然、ここが笑いどんぐ、狙いである。
貴史の読みは当たつている。

「だらだら！ おー美里、事実をそのまんま告げただけだ。足離せ」

「あとで覚えてなさいよ！」

大人が目の前にいるのは、うれつたいことがほとんどだが今はな
かなか助かる。特に担任とは。

「だから俺が言いたいのはさ、先生」

最後の締めだ。じじぞと力を入れた。へそのところに根性こめて、
ふんばつた。

「昨日俺と美里が学校ふけたのはまずかつたと思つ。その点はおもいつきし反省してゐる。ちゃんとあのプリントやるからさ。でも、これから俺が立村と男と男の勝負をしたいと思ってることだけはわかつてほしいんだ。あいつ、ずっと俺からも逃げてるような気がするんだ。だから徹底してあいつと決着をつけたいんだ。いい奴だつてわかつてゐからさ、なおさらなんだ。曖昧なところはなくしたいんだ。だから、そのことを昨日、美里と相談したくて大学の図書館で話してた。嘘じゃねえよ。大学の白いトレーナー着た人に聞いてもらつたら絶対わかるつて。とにかく、俺は」

どじめの一言をぶちかました。

「先生、男同士の頼みだ、俺と立村との果し合いには一切、口はさまないでほしいんだ。菱本先生だからわかつてくれると思つて、だからさ」

美里は思いつきり腹抱えてわらつてゐることだらう。無言で貴史の方を見つめてはいるけれども、口の脇に強いえくぼができる。菱本先生がいなかつたら爆笑の渦に飲まれてゐることだらう。

菱本先生も難しい顔をして黙りこくつた。五秒、沈黙が続いた。のるかそるか。

「羽飛、お前、男だな」

ぐいと両手を握り締め、右手を差し伸べてくれた。握手しろといふことだらう。貴史も腕をもつする時のようにひじをつき、首を立てて握り締めた。

「サンキュー、先生話、わかるよなあ」

「そのかわり、宿題きちんとやれよ。いいか。清坂もだぞ」

答えず美里は黒目を右、左と動かし、ぐぐつと笑つた。

これで、よけいな奴の手出しじゃないぞ。美里。

美里には帰り道、口に出して説明すれば万全だ。貴史はにやつきながら握手から腕相撲に態勢を変えた菱本先生へ、ひそかに手を合させた。大うそつき、羽飛貴史の罪悪感からだつた。

これでいきなり、菱本先生が、ホームルーム中に「立村と清坂と羽飛の間に起こった不和問題」とかいうのをネタにしないですむぜ。放つておいてくれるってことだからな。男と男の約束つてことで、俺と立村との問題には、触れないでくれるって約束だからな。言い出しつぺは美里じゃなくて、俺だつてことだからな。

あとは、美里、お前の演技次第だ。評議委員会で鍛えた演技力でとことんあいつをじらしてやれ。

3 清坂美里は自分の演技が逆効果なのではと思い

貴史の言つてはつてどこまで本当なんだね。男心？ そんなもの知らないよ。あれでもし立村くんに冷たくされたら、責任取つてくれるつもりなのかな。なわけないよね、貴史は、私が気のない振りして反応なかつたらあきらめろつて言つてたもんね。もう、なんかわかんない。もう。

四科目の宿題で徹夜するはめになつた美里は、ベットで寝ている妹を起こさないように仕切りカーテンをかけた。灯をもらさないようにするための手段だった。鍵つきの引き出しから、一年時の生徒手帳を取り出した。ひとりつきりの時にだけ、こつそり見つめるあの人姿だった。

一年冬休みの評議委員会ビデオ演劇「忠臣蔵」完成の記念写真だつた。全員で写した写真は誰でも見られるアルバムに貼つたけれども、たまたま水色の着物にはかまを纏つた立村くんと、太い縞の入つた和服姿の美里のふたりで撮つたものだけは、誰にも見せないよう隠しておいた。まだ美里の一方的な片想いだつた頃だ。休み中会えない時はいつも、話し掛けたりしていた。もちろん誰にも気付かれないように。

けどや、言つてたよ。立村くん。

「俺は羽飛と清坂氏が付き合つようになつたとしても、そのままでいられると思うけどな」

聞こえていないと思っていたのだろう。いつものように言ふと夫婦漫才やつているのを、美里は聞き耳をたてていた。不思議なことだけど、立村くんの声だけはどんなに低くても、高性能マイクで拾上げることができる耳。美里も聞きたくないことまで耳で拾つてしまつた。

私と貴史とが付き合つよつになつたとしても、平氣だつてわけ?

昨日、立村くんが机の中に入れてくれた授業ノートのコピーを取り出した。なんで用意してくれたのかがおおむね見当ついた。しょっちゅう風邪を引いて学校を休んでいる立村くんのことだ。休み明けは地獄の自習課題に追われるであろうことが想像ついていたに違いない。味方は、友だちの取つてくれたノートくらいだろう。こんなのがいる、と破り捨てないでよかつた。貴史もきっと同じこと考へてゐるに違ひない。ほとんどノートのおかげで、宿題は無事片付きそつた。

私のこと、じう思つてゐるんだろう。立村くん。

最後に数学の検算をした後、かばんにしまつこんだ。

なんで貴史がいきなり、生徒指導室で立村くんに對して思つていること、計画などをまくしたてたのか、途中で気が付いた。貴史らしい。要はあまり、大人に口出しをしてほしくないということだろう。美里にとつても決していやな大人ではない菱本先生だけど、でも、教師の顔して三人を仲直りさせようとするのだけはやめてほしかつた。自分で計画したことは、大人に割り込んでほしくない。当然のことだ。

男同士の仁義を重んじる菱本先生だもんね。やつぱり単純よ。

立村くんだったそつこいつ手を使えばよかつたのよ。あの時も。また思い返す宿泊研修三日目のこと。机の上には、紫に桃色の花が描かれた宝石箱がのつからっていた。宝石はないけれど、緑地に黄色い格子の描かれたヘアーアクセサリーをしまいこんでいた。

生まれて初めてのおそりだった。

立村くんには同じ色のキー ホルダーを買った。まさか、あのキー ホルダーが次の日の事件を起こす発端になるとは思つても見なかつたけれど。バス窓の外に落としてしまい、拾いに行かせてくれと泣きそうな顔をして菱本先生に頭を下げ、よりによつて反対方向に向かつて走り出したのを見た時には、頭の中が真っ白になつた。周りの子たち、貴史、菱本先生がわめきちらしバスの中は騒然としていた。美里も本当だつたら女子評議として、毅然とした態度を取るべきだつたと思つた。結局、謎を解いてくれたのは、立村くんと三日目、ずっとしゃべつていた古川こずえだつた。

こずえはいいよ。頭いいもん。エッチなことばかり話してゐる子に見えるけど、言いたいことはすつぱり答えて何があつても堂々としていて、いいことも悪いこともきちりと、言えるんだもん。どんなに仲のいい子でも、いいことはいい、悪いことは悪いってはつきり言つちゃう子だもん。立村くんもだから、こずえとはよく話すんだよね。でも。

決してこずえにやきもちを妬いたわけではない。最初からこずえは立村くんのことを恋愛の範疇から除外していると断言してゐる。本人を目の前にしてだ。むしろ貴史一筋のあの態度に、親友として心苦しい思いすらしてゐた。だつて貴史は「鈴蘭優命」を公言してはばかりないのだから。昨日のことを思い出してもそうだが、貴史は「しつこくされると逃げ出したくなる」タイプの男だというのが判明した。こずえのアタックは、貴史に關して言えば逆効果なんだと、つづくと思つた。

でも、こずえがあんなにあつさつと立村くんのことを見ていたのに、私、付き合つてゐるのに。

水色の着物にはかま姿の立村くんはりすのような瞳を向けていた。
立村くん、はやく降参してよ。お願いだから。

宿泊研修三日目バスの中、いじすえの言い放った答えとは以下の通りだった。

つまり、立村としては一学期前に退学するA組の女子と狩野先生に、私たちD組のお元気集団を『対面させたくなかったのよ。昨日の話聞いてたらよくわかるよ。それに次。運転手さんさつき立村と話してたよね。ちらりと窓から見てたけど、なんかあいつ、泣きそうな顔して戻ってきてたよ。その時になにかあったのかなあ。さらに続けるね。キー ホルダーを落としたとか言ってたけど、私見てたよ。立村の奴、人差し指にキー ホルダーを引っ掛けてしまらく手を外に出したあと、すぐ引っ込めてポケットにもどしてたもん。たぶんあの時にキー ホルダーを外したんじゃないかと、思うんだ。美里からもらったものを落とすほどあいつも根性ないよ。なんか考えてるんだろうなあと思つたから、あいつの一芝居に乗つてやつたけど、先生も羽飛も、美里もどうして気付かなかつたの？
いじすえだって共犯じやないか、と後ろ指差したくなる。菱本先生に、

「だつたらどうしてそういうわなかつたんだ！」

と怒鳴られた時もこずえは、

だつて先生がこんなことを見抜けないわけないと思つたんだもん。全く。立村つて子、思いつめると何でかすかわからないつて、うちのクラスの連中はみんな知つてるもんね。だからさあ、先生。今回はあいつの顔を立てやろうよ。無理にA組の人たちと交わらなくたつていいくじやない。世の中にはね、なかなか理解できない感覚を理解しちゃう奴がいるつていうことよ。うちの弟みたいにね。

「ずえには一歳下の弟がいると聞いていた。小学校六年生。口癖のよつに言つのは、

「立村とほんとに性格似てるのよ。だから美里、恋のライバル視しないでいいからね。近親相姦はやだからね」

どうして立村くんの気持ちを、いざえのよつに受け止められなかつたんだろう。

全く動けなかつた。バスが静まつて落ち着くまで、美里は何も言えずうつむいていた。

もどつてきた立村くんに対して、いつも通りに振舞おうと決めた、それしかできなかつた。

立村くん。私、こずえみたいに細かいところまで見てられないんだよ。どうしても言いたいことがあつたら言つてもらわないとわかんないんだもん。きっと立村くんのことだから、私になんかわかんないつて決め付けているんだろうね。わかつてゐる。そのくらい。私に何にもあの時のこと話をしてくれないのはそういうことなんだつて、気付いてる。でも立村くんはやさしいから、それ言つたら私が傷つくんだと思つて、隠してゐるんだよね。嘘、下手だよ。立村くん。

けど、嫌いになんて絶対にならないんだよ。貴史も、私も。泣き虫だつたつて、いじめられつ子だつたつて、九九が言えなくたつて、立村くんのことを嫌いになんて絶対にならないつて、どうしたらわかつてくれるの。

貴史の授けてくれた男心操縦法。

「気のない振りしてじらしてやれ。そうすれば男はむしょに女を追いかけたくなるもんだ」

別名、アイドル鈴蘭優にめろめるの貴史の図。

一日試してみた。小学校時代の男友だちとトークの振りでもしようかと思っていた。

でも、一日で負けそつた。どうしても耳がよけいな言葉を拾つてしまつ。たぶん立村くんは、深い意味なく使つてゐるのだろう

けれども、自分にとつては剣のような言葉ばかりを。

ほんとに私と、付き合つていて楽しいの？

「じゅえみたいにすべてを見抜いてくれる相手でないといやなわけ？」

そして、もうひとつ質問をしたかった。詩子ちゃんからもひつた手紙を、下の引き出しから取り出した。小さく、隅っこに綴られた文字だった。

時辻さんという人、青大附属にいますか？

今度会つた時、教えてください。

美里の勘だと、おそらく「時辻」イコール「立村」である可能性が大だ。

まず、青大附中においてひとりも「時辻」という珍しい苗字の人はないということ。

次に、日本舞踊関係の人もあまりいないはずだということ。
最後に、立村くんのお母さんは離婚しているので旧姓の可能性が高いということ。美里はまだ、立村くんのお母さんがどういう苗字を使つているのか教えてもらつていなければ、だ。

今日の状況からして、それを確認するのは困難だ。たぶん詩子ちゃんと立村くんは顔見知りの可能性が膨らんできているけれども、向こうが隠したがつてている以上追求するのは難しいだらう。質問してなんになるという気もある。

美里はただ、自分から本当のことを言つてほしかつただけだった。行動で懸命に美里たちへ訴えようとするんではなくて、直接、目と目を見て、口で話してほしかつた。それだけだつた。

それがそんなに、ひどいことなの？ 立村くん。

「私、今週の日曜日、詩子ちゃんに会つよ。会つて、「時辻」さんが立村くんのかどうか確かめちゃうよ。詩子ちゃんから、立

村くんの知りたくないこと、全部聞くかもしないんだよ。
だってこいつしないといつまでたつても立村くん、私とじつで
話、してくれないんだもん。立村くんが悪いんだよ。こんなこ、こ
んなに。

1 立村上総が受け入れられるひとりの言葉

時間の問題だろ？ 美里から「もつ付き合いやめよつよ」と言われるのは。

それはしかたないよ。俺が当然のことをしてきたんだから。それ以上に友だちとしても「付き合い」すら絶たれるかもしれない。上総にとつてはそちらの方が眠れぬ理由だつた。

次の日、また次の日、貴史が上総に経過報告をしてくる。

「お前ももう少し反省しろよな。だから言つてるだろ。美里があれだけむくれておるのはお前のせいだつて。一言言えればいいんだよ。俺が悪かった。もう一度やり直そうとかなあ。昨日も美里言つたけどな、小学校の頃の仲間でサッカー部の奴がいてさ、そいつと土曜日におうかとかとか。まあそいつも俺のダチだから、別に目くじら立てることはねえけどさ。でも、少しあはれ心配しないのかよ」「いや、放課後のことまでしつこく聞くのは、俺としては失礼だと思うから」

「ふうん、じゃあ俺の知つたことじゃねえな」

鼻の穴を膨らませ、貴史は顔色変えず背中を向けた。上総ももつと何か、言つべきことが残つていてるよつた気がするのだけれども、言葉として出てこなかつた。そのうちに隣りの席へ南雲やこずえが来たりしてなあになる。

美里本人はちらつと田を上総に走らせ、

「おはよつー」

と短く声をかけるだけだ。「友情」らしきものはからうじて残っているのだろう。しかし、あいかわらず会話はない。評議委員会の行事も九月中は大きいのが特別ないし、クラスの男女が悩む問題もとりわけない。十月以降になると、学校祭を始め、クラス合唱コンクール、十一月に予定している一年全校集会の企画立てなどいろいろやることもあるのだが。

できれば、それまでには仲直りしたいとこなんだよな。いいよ、「付き合う」相手じゃないってことだつたらそれだつてさ。だけど、しゃべれなくなつたりするのだけは、なんとかしたいよな。

土曜日、一気に冷えが回つた空気を吸い込み、上総は教室を出た。いつもだつたら本条先輩のいる三年A組に駆け込み、「先輩、卓球やりに行きませんか？」

と声をかけるのが常だつた。一学期まではいつもそうしてきた。卓球というのは口実で、本条先輩の側で話を聞いたりかき回したりするのが楽しいだけだつたけれども。大抵の場合、

「またお前かよ。まあいいか。ほら行くぞ」

と、家来の犬を引っ張るごとく連れて行かれた。

でも、あえて一学期に入つてから、上総は本条先輩から距離を置くようにしていた。やはり三年生なのだ。クラス行事だつて忙しいだろう。ふたりの彼女に關してだつていろいろ手間がかかるだろう。何よりも本条先輩は評議委員長だ。生徒会、教師間、その他もちろんの関係事項で大変だろう。一種の部活として機能している評議委員会だけれども、細かい用事はかなりあるらしいのだから。

図書館に本を返した後、上総は大学のカフェテリアに向かつた。

土曜日の午後、給食の出ない日はうちに食事をするのも面倒なので、いつもこつして食べていた。三百円の焼き魚定食を注文し、洗い場の真つ正面席に座つた。遠く窓際の方には、ノートを一冊置いた状態にして大学生たちがおしゃべりに興じていた。大学には「サークル」と呼ばれる非公認部活動のようなものがあり、溜まり場と

してカフホテリアの机を上拋してこむといつ話を、聞いたことがあつた。

「つづちゃん」

さつそく、飯をかきもつとした矢先、田の前にしゃとラーメンを盆に載せて現われた。南雲が、襟元のボタンをひとつ外したまますとんと、テーブルに置いた。一気に漂つ塩ラーメンの匂い。

「お、和食ですな」

「つづで作るのが面倒なものさつやつて食べるんだ」

上総の顔を様子伺いしながらも、南雲は変わらない笑顔で答えた。

「いつもここで食べるのか？　土曜の午後なんかは」

「いや、本条先輩がいないから」

いつもだと南雲も、奈良岡彰子にべつたりくついて帰るのが常なのだが、何があつたのかもしれない。とりあえずは聞かずにおいた。南雲の方から勝手にしゃべってくれた。

「ふうん。俺もさ、今日、彰子さんが別の奴と帰ることになつたら、空いてたんだ」

「別の奴つて、おい、なぐちゃん」

ずるつとすすつた後、南雲は心配げ無用といつた風に口をほじるばせた。

「よんどこらのない事情あつてさ。相手も信頼できる奴だから、まず危険はないかなと思つたんだ」

その辺の事情はよくわからぬが、深く追求するのもまづことと思つ、上総は焼き魚をゆつくりとほぐし始めた。まずは腹^{はら}じしらえをしたかった。育ち盛りの十四才野郎がふたり揃つたら、まずは食つことが先決だ。時々、委員会関係の話を持ち出したり、お互いの知り合いである本条先輩の噂話などもしたりしてしばらくなつた時間つぶしていた。

「とにかく、つづちゃんに、渡したいものがあるんだ」

食べ終えた食器類を皿洗いの流し場に置いた後、お茶をそれぞれ用意して席に戻った。熱いお茶がうつとおしくない。やはり秋だった。

「何だよ、いきなり」

南雲はかばんから茶色い紙袋を取り出した。柄なしのクラフト封筒だった。

「教室で渡すのはやつぱり、次期規律委員長としてまずいだりうと思つてさ。ほら、すぐ見ろよ」

「言つ意味がわからず、まずは受け取つた。封を開けた後のある袋。さつと抜き出してみたが、瞬時に袋へ戻した。もう一度、覗き込み、他人に表紙が見えないようにもう一度引っ張り出した。

「なぐちやん、これつて、もしかして」

「こ」の前古本屋でりつちゃんの言つていた写真集があつたからか、キープしておいたんだ。ほら、宿泊研修の時言つてただろ。図書券で買うつもりだつたけれども、裸の女の子が縄で縛られていたから買わなかつたつて

持つてゐるだけで指先に血がたまりそつだ。かすかに震えているのが上総にはわかつた。いけないとわかつていても、表紙の写真から目が離せない。

「あ、な、なぐちやん、ありがと。こくらへりこした? 扱うよ
ちゃんと」

「じゃあ自動販売機で一本コーラおじいしてくれるかな。ほんとそのくらいの値段だつたよ。俺も中身ちらつと見たけど、せんせんいやらしくなかつたよ。まあ実用本にはなりずらかつたんだろうなあ」

かなり動搖していた。宿泊研修一日目、熱を出してホテルで寝込んでいた上総を、南雲がひとり残つて馬鹿話に付き合つてくれた。

その時たまたま、思春期の男子には必需品と言われる「女性グラビア写真集」の話題となり、

「勇気を振り絞つて本屋に行き、自分好みのモデルさんの写真集を買おうとしたが、縄やらロープやらでしばられている写真の表紙を

見て怖氣つき逃げ出した」とを呟いた。南雲にしか話していない。南雲もばらしていられない。その時に「手に入れられたら押さえておく」と約束してくれた。とつべの昔に忘れたことだと思つていたのだが。

「けど、よく見つけられたなあ」

「モーテルさんの名前だけ記憶してたから。それとロープ」

「よく買ったよな。俺なら絶対無理だ」

「だつてさ、古本屋だぜ。見たらわかるよ。あんまりスケベな写真じゃなかつたしさ。けど、ちょっと意外だつたなあ」

顔色がくるくる変わつてこらのだろう。面白そううに南雲は上総の顔を見てにやにやしながら、付け加えた。

「清坂さんと似てないよな、あのお姉さん」

ぱきりと気持ちの芯が折れたような気がした。封筒を持った手がだんだん冷たくなる。言葉が出てこない。しょせん夜の楽しみ用に使用するものなのだから、出すといふ出してくれれば関係ない、とも言えればいいんだろうか。わからなくて思わず唇をかみ締めた。

「関係ないだろ」

「まあ、そうだよな。ごめん」

南雲はこれ以上追求しなかつた。ありがたかつた。上総の的にぴたつとやせたことが気付かれたのかもしれないなかつた。そういう時、決して突き立てる言葉を重ねないのが南雲流だつた。

「昨日の放課後さ、本条先輩に会つたんだ」

話をいきなり変えてきた。封筒をかばんにおさめた後で、上総の方からは何も言つていなかつた。

「図書館で妙に真面目な顔して勉強していたから、ちょっと邪魔してやるうと思つてさあ。つちやんもいるかなと思つたけど、帰つたんだよな」

あの教室にいるのが苦痛だつたのと、本条先輩に声をかけるのもためらわれたからだつた。上総は頷いた。言葉はやはり出なかつた。

「で、ちょっとだけ話してたんだけじゃあ、本条先輩、つっちゃん
じつしてて聞いてきてそれで」

「なんか言つたのか？」

南雲は言葉を切つた。たぶん話をしたのだろう。雰囲氣で分かる。それも、あまりめでたくないことをいろいろと、だろう。この一週間、上総がどういう感情を持つてクラスで過ごしているか、たぶん南雲は感じてくれているはずだ。あえて音楽ネタばかり振つているけれども、もしかしたら南雲も、あのことを心のどこかにひっかけているのかもしれない。思わず身構えた。

「うん、言つた。嘘言わねえよ。俺の思つてること全部話した」

「まさか、じつう写真集ほしがつてるなんて言わなかつただろうな」

「冗談に振り替えたくて、ちゃかした。

「元気ないみたいだと、疲れているみたいだと、あとやうだな、でもやつぱりりつちゃん、あんたに原因あるよ、とか。ちょっとだけ悪口も」

あつけらかんとした顔で話している南雲。悪口と言つてしまつところが、大嘘だ。つい口がほこりなんだ。

「なんだよ、本条先輩に今度会つた時、思いつきり殴られそうだな」「帰つたら電話よこせつて伝えてくれつて言われたんだ。で、聞きたい？ 僕の話したりつちゃんへの悪口」

「悪口つてこいつそり言つもんだろ」

「それは陰口。ねちねちしたこと嫌いだから今のじつうじまつて思つてたんだ」

「どう考へても「悪口」を言つておられる口調ではない。じつうじまつたまま、南雲は軽く続けた。

「つっちゃん、やつぱり付き合つてる相手に別の男と付き合つていいと聞つのは、殴られて当然だぞ。俺が清坂さんの立場だったら、絶対にほこほこしてるとと思うなあ」

昨日こずえに、丸めた教科書で制裁された時の会話を、ざわざわ

南雲も聞きつけていたらしい。

俺は別に、清坂氏と羽飛が付き合つたとしても、今までどおりでいられると思つけどな。

思い出すとこみあげてきたりしない。
「ずえが怒るのも、南雲に『悪口』として忠告されるのもわからない。

そんな自分が一番いやだつた。

「お前も、やはつそつと思つたか」

「つちやんは思つてないのか」

うつむき加減で茶碗の中に皿を落とした。ほんの少し、茶葉が細かく溜まつていて。

「やつぱり変だよな、俺の感じ方は」

「たぶんつちやんのことだから別の意味で言つたんだろ」つて俺は思つてゐる。感じ方おかしいだなんて言わないつて。俺はつちやんの味方のつもりだけだだ

両手をテーブルの上に乗せ、茶碗の底をちくちくつまながら南雲はきつぱり言い放つた。

「付き合つてゐる本人のいる教室で言つひとじやないよな。その点は反省しろよ」

すとんと落ちた。納まつよく頷いた。

「なぐちやんの言つ通りだ。俺が馬鹿だつた」

反省ついでに、写真集代替わりのローラを持つてもう一度上総は戻つてきた。表情は全く変わらない南雲の様子。「悪口」をはつきり面と向かつて言われたけれども、腹も立たずに素直に受け取れたのが不思議だつた。

心の中で隠しておけばよかつたんだ。本当に俺つて馬鹿だ。
隣りで「サンキュー」と受け取る南雲の顔を見て、おやおおやおや
上総はわびを入れた。

「『めん、俺がやつぱり

「俺に謝る」とじゃないし、第一謝る必要ねえよ。清坂さん以外にはさ

「ひひひことじぱっかりやらかしているから、嫌われるんだよな」たらたらにやにやしていった南雲の眼が一瞬、きりつと引き締まつた。

「嫌われるって、何をさ」

「いや、いろいろと」

氣付かれているにしても、貴史と美里との間の溝を口にはしたくなかった。一言でも認めてしまえば、亀裂が完全なものとして受け取られてしまいそうだった。まだ表向きは何事もなく、さりげなく過ごしているはずなのだ。上総としては、自分からこれ以上物を壊したくなかった。

南雲が咽元を動かすようにコーラを飲んだ。ふわっとため息をついた。

「本条先輩と話、しててさ、俺も思つたんだけどな。りつちゃんの好みのタイプと清坂さんってかなりずれてるんじやないか？ いや、あの写真集ぱらぱらと見てて俺も思つただけだからただの勘だけど」

「それは憶測つてもんだよ、なぐちゃん

たしなめた。胸のもやもやがかえつて膨らみそうだつた。

「お前だつてそうだろ？ この前見せてもらつたグラビア写真集に奈良岡さんみたいなタイプ、いないだろ？ それと一緒にだよ」

「ああ、代わりになる人いのもん。俺にとつてはなあ」

分かりやすい奴だ。南雲が恋人の奈良岡彰子について語る時、切れ味のあるアイドル顔が見事に崩れる。人気ロックグループ「パール・シティー」のボーカルに似ていると、女子が騒ぐのもさもありなん、の顔がだ。和む。

「一つだけ確認していいか？ りつちゃん」

「黙秘權だつてあるんだからな」

愛しい人への思いを顔に保たせたまま、南雲は鼻の下をこすり、

「付き合いかけたのは、清坂さんの方からだろ？　向こうの方から言わたんだろ？　りつちゃんは、それで受けただけだろ？」

嘘は許さない、これだけは。そんな声がきこえたような気がした。

「本条先輩から聞いたのか」

沈黙、コーラの缶を握り締めた後、南雲は口元をほじりぱせた。

「やつぱし、そつか」

おじおじしたまなざしに見えたのかもしれない。軽く首を振つて南雲が上総に促した。

「りつちゃんこれから卓球場行かないか？」

クラスの連中には一応、付き合いかけたのが自分の方だといつことで話をした。美里から告白されて、それでなんとなくそうなつてしまつたというのが真相だけど、知つているのは自分たちふたりと、羽飛、あとは見抜いてしまつた本条先輩くらいだ。南雲にもそのことは話していない。

まさかいえないよな。こちらが流されたなんてや。

美里に付き合いをかけられて、一週間後にクラス中に公表した。あの時の美里が見せたはにかみ振り。あれを見てから上総は、美里のことを大切に思おう、他の女子たちよりもきちんとひいきして扱おう、そう決意した。ばかばかしいくらい真剣に、そう思った。それまでは可愛がっていた後輩の杉本梨南からも意識的に距離を取るようにしたし、何か自分で何かが起こった時はかならず、美里から話すようにしていたつもりだつた。美里に話さないとこうことは、他の女子連中にも打ち明けないこと。こんなに自分のことを心配してくれている相手を、傷つけてはいけない。そう思つていた。でも、みんな裏目に出てるんだよな。

上総にとつてはそれがわからなかつた。どうしても打ち明けてほしくないことだつてある。誰にも言いたくないことだつてある。美里には言つべきではないと判断して、心に隠したこともある。

大切な相手なんだ。

俺が学校で孤立しそうになつても、味方でいてくれた人だ。

こんな出来の悪い頭を持つて、数学の計算もろくにできなくて、人の顔色ばかりうかがつていておどおどしているこんな奴を、嫌わないでくれているんだ。好かれるなんて、奇跡なんだ。

南雲にはまだ言えない。金輪際口にしてはいけない言葉だと教えられた本心。上総はひそかに繰り返した。

俺は清坂氏に好きになつてもらえるようなレベルの人間じやないんだから。わかつて。ふさわしいのは羽飛みたいな奴なんだつて。

2 羽飛貴史がぶつけられたひとりの言葉

なんだ立村をつついても、曖昧な態度しか示さないのに、貴史はだんだんうんざりしていた。菱本先生も一切手出しをしないと誓つてくれた。美里の「気のない」演技もだいぶ巧くなつてきている。立村もかなり動搖しているらしく、授業中も上の空らしく。うなだれていた。

言えよ、言つちまえよ。つたく、気になつて仕方ない顔してるくせにさ。ばかじやねえの。お前。

テレパシーで連絡を取れたらいいのだが、そろはいかない。

たかが友だちの恋愛沙汰になんて自分がここまで気をもまねばならないのか。

全くもつて腹が立つてしかたない。

しかも立村は相変わらず、貴史に対してものの挟まつたようないい方をして、最後には避けようとしている。たまたま音楽の授業中隣り合つたのだが、相変わらず視線を合わせようとしている。こつちだつてお前に合わせて言いたいこと言わないでがまんしてるんだ。少しばかり使えよ。変なところばかり神経質にならねえでさ。

結局、南雲と古川一じよずえとしゃべつてはいるだけだった。帰りの会が終わるや否や、すたこらむつたと教室を出て行つてしまつた。逃

げ足の速い奴だ。立村の性格を考えるとそりゃあやつあるとは思つ
のだが、気持ちいいものではない。

「じゃあ、貴史。今日、会つてくるから」

わざと聞こえるよつて理由を出して、美里も教室を出て行った。前
もつて昨日、美里が会つのは藤野詩子だと教えてもらつていた。で
も言わないで、誰かさんとデータするらしいという噂をまいてや
うと決めていた。しかしながら、落ち込んでいるとはいへ行動をし
ようとはしない。

だめだつたら、あきらめろつて言つちまつたもんなん
もつと派手な噂流さねえとだめかよ。

なんで自分が懸命になつてゐるのかが、腑に落ちない。もちろん
美里も立村も友だちだ。ずっと友だちでいたい相手だ。だから、こ
うしてゐるのだ。なのに全く気付きやしない。あの昼行灯は。

腹がすいたのでどこかで食べていくか、それとも家に帰るかしよ
うと思つた。部活を始めると回りからはやいやい言われてゐるけれ
ども、そんな気はさらさらない。体育系の上下関係がどうも好きに
なれないし、委員会関係も似たようなところがあるらしい。一匹狼
で行動する方が貴史の好みではある。

久しぶりに、他の奴にでも会いに行くか。

小学校時代の友だち連中を数人數え、やつぱり家に帰ることに決
めた。なかなか帰りの時間帯が合わなくて遊べなかつた奴らだが、
たまには思いつきりやりたい放題したつていい。どうせいつもつる
んでいる美里も立村もいないのだから。

ネクタイをほどいてかばんにつつこんだとたん、扉が開いた。

見たくねえ奴が来るのかよ。

南雲秋世の姿だつた。すでに襟のボタンを外して、ふくらんだか
ばんをぶら下げていた。

「あれま、羽飛だけか」

「立村はいねえよ」

南雲がどういうことを考えているのか、貴史には理解できないし
知りたいとも思わない。もともと初対面の時から、「こいつ相性あ
わねえ」と思つていただけに、できればつらつと知らん顔を通した
い相手だった。何度か喧嘩沙汰になりそうだったが、立村の仲裁で
いつもお流れになる。もつとも立村だって一年の頃は南雲とそれほ
ど深い付き合いをしていなかつたはずだ。一年に入りクラスの班編
成が変わり、それからだ。異様なほどふたりがひつつくようになつ
たのは、もともと立村は、気に入つた相手とべつたり行動する傾向
がある。貴史とも一年時はそうだったし、本条先輩との関係もしか
りだ。現在は南雲がお気に入りなんだろう。今のように貴史や美里
と離れた状態だと、磁力は強烈だ。S極とN極がくつつきあつてい
る、そんな感じだった。

「さつき、大学の方に行つたのは見たけど、まあいいや
ありがとうも、さよならも、おつかれも言わない。南雲は自分
机から茶色い封筒を取り出しかばんの中に入れた。忘れ物なんだろ
うか。無視して貴史も教室を一步先に出ようとした。もちろん、
「おつかれ」

と言い残すつもりでだった。

「そう逃げるなよ、羽飛」

気の抜けた声で、南雲が引きとめた。無事にかばんには荷物を詰
め込んだらしく、ぱんぱんになつていた。

「用かよ」

「ちょっとだけ、規律委員として聞きたいんだがな
こいつが規律の顔してるとかよ。」

南雲が次期規律委員長に就任するという噂はすでにみなご存知だ
った。服装もラフで髪型も毎日一時間ちかくかけてセットしてくる
という、見た目重視の委員会なんだろう。こういう奴でも規律委員
長になれるのだ、立村が次期評議委員長になるのも頷ける。
「はいはいなんでがすか」

喧嘩を売るのも大人気ない。おちょくる口調で答えた。

「」の一週間くらい、妙に立村の「」と、いじめたりやおりませんか、羽飛くん

「いっ、「くん」付けで呼びやがった！」

「なんだと、おい、なに言いがかりつけるんだ！」

瞬間沸騰した頭を冷やす気なんてさらさらなし。貴史は音を立て扉を締めた。もちろん決着を付ける気はおおいにある。妙に落ちている南雲は前髪を横になびかせるようにして、上目遣いで見た。この顔、この態度、ぶんなんぐつてやりたくなる。

俺が立村を「いじめた」だと？

「おい、人を勝手に侮辱するのはやめろよな」

当然怒つていいと思った。南雲の顔は冷静だ。ズボンのポケット

に手を突っ込んだまま、右足のかかとをつけてつま先を左右させた。

「それともなにか？ 何か俺に文句があるつていうのかよ」

「俺はただ、規律委員として言つてるだけなんだがな」

ふざけ口調ではない。細い本気の糸が見える。テグス糸のようだ。ぴんと張つているのは貴史にもわかる。ただ、伝わる言葉、伝える言葉は本物のえさではない。きれいな飾りのえさだ。

「じゃあ俺がいつどいで、立村をいじめたっていうんだ？ 証拠もねえのによく言つぜ」

「さつき、なんやら嫌味な」と言つてたよなあ。俺、悪いが隣りで全部聞かせてもらつたんだけどさ。聞こえるよつて言つからはつきりわかつちまうんだよなあ

にやつと笑つて後、ゆつくりと足を向けてきた。近づいてきた。動くなといわんばかりにだ。

てめえに止められたくなんかねえよ。

「ふうん、そうか、友だち同士で馬鹿ネタかましてることが、そんないじめなのかよ。だったら俺はなんもあいつに言えねえってことだよな

「今回だけじゃない。一学期に入つてから、規律委員の俺の眼には

非常に、羽飛くん、君の態度がうざったくうつるんですわな。友だち、としてではないでっせ。あくまでもクラスの規律委員としてですな」「

しつこく、「規律委員」を繰り返す南雲。ろくに仕事もしないくせによく言つもんだ。貴史は無視した。帰ろうと思った。ほんとだつたら一発蹴りを入れるか殴るかしたいが、どうも腹がすいているとそういう気もなえる。それに南雲の腕力がどのくらいなのか、まだ把握していない。

南雲の言葉は続いた。

「今年の規律委員会は、クラスでの嫌がらせやいじめをなくそうと、いう運動を行つてゐるところなんですね。一年はそれほどでないけれども、一年の男女がすげえ状態だつて、いつのは、お前も立村から聞いてるだろ」

「それが関係あるのかよ。ああ、知つてるぜ。当然な」

「問題が起つた場合、まずクラスの規律委員か評議委員あたりが先生に申し出て、先生立会いの下、つるし上げの学級会を行うのが建前だ。まあ、俺だつてそんなのは当てにしてなんてないけどな。いじめた相手を目の前にして、だあれが正当な行為をしたつて言い張るかつてな。だから、裏で規律の人間が仕切るつてわけだ。そうだな、評議委員をいじめてるのが、表向き親友面している奴つていう、ややこやしいバージョンであつてもだ」

「この態度、反り返つた背中、なめきつた顔。見ているだけでぶつ殺したくなる。

やるしかないか。

貴史は襟元のネクタイを掴もつと、手を伸ばした。触れる寸前で南雲が身をかわす。

「悪いけど、今日はやつあう時間ないんでね。まあ、少しだけ考えてもらつて反省するなりなんなりしてもらえればいいってことさ。一応、前もつて注意はしたし。俺もあまりことを荒立てたくないしな。じゃあ

「待てよ、逃げるのかよ。第一俺のビニが立村をいじめたよつて見えるのかよ。言つてみろ。言いがかりつける根性あるんだつたら、言いかけた貴史を遮り、最後に南雲はこやつと笑つた。

「いじめつていうのはな、羽飛」

ドアを開き、片足を廊下側に出したまま、貴史を見据えた。

「やられた本人の感じ方で決まるんだよな。羽飛くん

だあれが規律委員なんだ、てめえ。

「おい、南雲、逃げるなよ」

追いかけて首根っこを捕まえてやうつとした。しかし、奴も足が速い。がたたと階段を駆け下りてく足音だけが残り、貴史は廊下で立ち尽くすしかなかつた。

俺が立村にいろいろ言つてやつてゐるのな、美里とつまくいくよつにしてるからじやねえかよ。

あのまほじやあ美里だつて、あいつに愛想つかすに決まつてるだろ。

そりやああいつの性格知らないわけじやえねえから、いひちが押してやんないと動かないつてや。

南雲からしたら全部、言い訳なのだろ。

美里がどんなに毎日惱んでこるのかを貴史は手に取るように感じている。

今日だつて、立村の表情を気付かれなによつに伺つていた。奴は気付いていないだろうが。お互い目の合わないところで不安そうに視線を向けているのを、貴史は後ろの席からみな觀察していた。なにも、南雲のように外から眺めている奴から言いがかりをつけられる覚えなどない。

第一、なぜ「いじめ」だと「規律委員会にかける」などと言わなければならないのだろう。

そりやあ南雲は立村と一年に入つてから妙に仲が良い。音楽の話

とか、委員会の話とか、貴史には入ることのできない話題で盛り上がりしている。そんな軽い話題ばかりを交わしているだけのくせに、いきなり立村の親友面するっていうのがまず解せない。貴史は入学当時から立村との付き合いがあるし、美里との間を取り持つてやった義理もある。さらに言つならば、立村が小学校時代やらかしてきた事件について、かなりの部分を把握している。昼行灯の見た目よりも怖い奴という認識はそこから生まれている。

表向きは紳士然としておとなしそうに見えるけれども、いざとなつたら手段を選ばない。たとえ自分の立場が悪化しそうになつても、敵をとことん叩きのめす。たとえ大人であつても、学校の番長格であつても。クラスの評議委員として優等生面していながら男子連中から圧倒的支持を得ているのは、そちらのバランスが加味しているのだと思う。

だから俺は、あいつを評議に推薦してやつたんだって。
だから美里を。

ふりかえり背中から伸びる影を見た。長い影。

3 清坂美里の認めたくない言葉と本音

どうせ立村くんとはしばらく口を利かないことに決めている。貴史と打ち合わせた通り、

「じゃあお先に！」

と声だけかけて教室を出た。不安そうにじくじくと頷く姿が、目に焼きついた。　怒りなさいよ、こんな馬鹿にされてるんだから。　私だったら、思いつきりひっぱたいてるよ。あんたにもしこういうこととれてたら。

つぶやいてみる。最初は心の中で、最後は自分の唇で。

「どうして何にも言わないのよー」

通り過ぎた一年の男子がくると振り向いてけげんそうな顔で見た。知らない子だった。

「あ、こめん、なんでもないです」

妙な言い訳をしてしまい慌ててしまつた。誰かに見られてないかを確認し、一年D組の窓を眺めた。外を見てくれていないだろうか。期待はあつた。でもガラスが反射して光るのしか確認できなかつた。

あれ？ 彰子ちゃん？

別に彰子ちゃんの姿を見つけたからではない。遠めでもわかる彰子ちゃんの姿形は、通称姫だるま。いつもだつたら髪をシャギーにまとめた、いかにも「パーカー・シティー」のボーカル似な彼氏が一緒のはずだつた。自転車を止めて語らつてているのは、彰子ちゃんよりも背が低くてスポーツ刈りした男の子。年下かもしれない。学生服だが、腕と裾とポケットに白線が入つていて。珍しいガクランだ。

あれ？ 彰子ちゃん、今日南雲くんと一緒にやないんだ。知らない男子だ。なんであんな派手な自転車に乗つてるの？ わあ、まさか彰子ちゃん浮氣してるのかなあ。南雲くん怒るかもよ。

他の青大附属生たちも、ひそひそとささやき、自転車を指差している。そりやあわかる。金銀まだらに、おそらくスプレーで塗り分けた自転車を脇に置いているのだから。たぶん「南雲くんと彰子ちゃんは熱く付き合つている」という既成事実を、多くの青大附属生は知つていることだろう。美里だけの驚きではないだろう。もし側にこづえがいたら、「ねえ、どうする？」と相談するんだが、いかんせんこづえは先生に呼び出されて職員室に行つてしまつた。残念だ。

「美里ちゃん、ばいばーい」

迷つてゐるうちに、彰子ちゃんの方から笑顔で手を振られた。

「あ、あの、彰子ちゃん？」

知られてかまわないのでこと？

相手の男の子は口をへの字に曲げて、青大附属の生徒たちをにらみつけてゐる。少々目線が怖いので早々に退散した。実は彰子ちゃん、噂に聞いた通り一部の男子にもてもてなのかもしない。

「この日は昼ご飯なしでいいと、親に伝えておいた。外食はおこす
かいがもつたいたないからするんじゃない、といわれるけれども今日
だけは別だった。

「せっかく詩子ちゃんを会うんだから、何か美味しいもの食べてら
つしゃい」

なにげに「今度詩子さんに会おうかな」と親に話したところ、
美里の準備が整わないうちに連絡を取られてしまった。どうやら母
は詩子ちゃんのお母さんと相談しあっていたらしい。今まで気付か
なかつた自分が馬鹿だとつくづく思つた。詩子ちゃんのお母さんも、
なんとなく美里との間が巧くいっていなことを気付いていたらし
い。親のとりもんちというのがどうもうさんくさい。

詩子ちゃん、どう思つてるのかなあ。

もう一年半も経つたことだもんね。

学校にいる時は、立村くんのことばかりで頭が一杯だつた。街に
出て、青鴻駅の改札口での待ち合わせをするといつことになつたわ
けで、どこに行くとも決めていない。後ろでぱさりと音がした。白
い木皮の街路樹から、枯れた葉が勢い良く落ちた音だつた。

とにかく、会つてからよね。五日の日、観にいくよつてこと
話して、元気だつたつて声かけて、それから。

駅に繋がる横断歩道を渡りながら、美里は肩に力を入れた。緊張
しているつてことだ。会うのは詩子ちゃんなのに。

時辻さんが、立村くんかを確かめようつと。

駅沿いに止まつているタクシーの前を横切り、怒られながら入つ
た。さつそく人を探し、背の高いほつそりした少女を見つめた。全
く変わつていなかつた。膝丈のブリーツスカートに籠色のブラウス、
白くちょっと眺めのカーディガン姿。ポニー テールに結い上げた詩
子ちゃんが、改札前の柱に背もたれして立つていた。

「詩子ちゃん」

声をかけた後、美里は思わず深く頭を下げた。

「美里……」

笑みはない。正面に顔が向いた時、一年前と変わらない凜々しい少女剣士のような表情が読み取れた。可愛いんじゃない、りりしい、そう美里は思った。

「チケット、ありがと。五日、私行くから」微笑まない代わりに詩子ちゃんは皮のポショットから、封筒を取り出した。

「隣りのホテルで食べられる無料の食事券、お母さんからもらってきたの」

ホテル、いいの？ そんなすゞことじで。

意表をつく展開にひいたものの、美里はそれに従つた。かなりおなかがすいていたのもあつたけれども。詩子ちゃんは歩いていく途中一言も発しなかった。ただ、肩越しにちらつと美里を見るだけだった。言葉の想像がつかない。美里は身を竦めた。

青湯サイレントシティホテル一階の喫茶「フェルマータ」に入つた。いかにも中学生かつ制服姿の美里と、やっぱり中学生の私服姿の詩子ちゃんとでは、客層が全く合わないようだった。ウエーテレスさんはそんなこと全然顔に出さなかつたけれども、周りのお客さんたちはじろじろ眺めてはひそひそ話をする。年齢的には美里のあばあちゃんくらいの人が多くつた。息苦しい。

「詩子ちゃん、じついうとこ、来るの？」

「この前連れてこられたの」

そつけなく答えが帰つて來た。

「ふうん、なんかお金持ちの人人がたくさんいるつて感じだね」「私、わかんないから」

顔を合わせて、サンドイッチセットとプリンが届いた後も、まだ会話は続かないままだった。おちょぼ口で上品に口へ運ぶ詩子ちゃんのしぐさはきつちりしていた。たぶん日舞の影響なんだろつ。なんとなく立村くんのことを思い出し、「時計さん」の名前を思い出した。

「踊り、いつから始めたの」

「中学に入つてから。お母さんに連れて行かれたんだ」「じゃあ一年半なんだ。けど、すういよね。もう大きい舞台に立つんだもの」

「ちつとも、すうくなんてない」

不機嫌そうだが、やはり詩子ちゃんはしぐさひとつひとつ切れがある。こうじうとこに男の子たちは熱を上げていたのだろう。熱狂的なファンがいたことを思い出した。

「『玉兎』だつたつけ？ どんな着物着るの？」

「きれいな着物なんかじゃない」

ぼそりとつぶやいた。オレンジジュースのストローをくこと曲げて、「一スターを見つめていた。

「私も、あまり日本舞踊のこと知らないんだけど、一学期にね、詩子ちゃんの写真が映つていてるチラシをたまたま見たんだ。黄色い着物着て、先生だつたつけ？ 一緒にポーズとつてて、びっくりしたものす」く可愛かったんだもん」

詩子ちゃんに話題を振つても乗つてこない。美里はあつとあらゆるネタをひっぱりだした。あえて小学校時代のことは持ち出さなかつた。決して、小学校時代木村という奴が詩子ちゃんに熱を上げていて中学時代もぎりぎりまでアタックを繰り返していったこととか、貴史が相変わらず美里と親友づきあいしているとか、ましてや立村くんという彼氏がいるなんてことはおぐびにも出でなかつた。ただ話せば話すほど、詩子ちゃんは黙りこくつしていく。

あの手紙だつて、詩子ちゃん、私と会つた時に聞かせてぐださいつて言つてたじゃない。失礼だよ、そう言つ態度。

とつとつしづれを切らせてしまつた。

「あのね、詩子ちゃん」

最後の最後にとつておこいつと思つていた質問。やつとサンドイッチを平らげたところだといつのに、まだ三十分も経つていないので、「手紙に書いてたことなんだけど、青大附属の時辻さんつて人のこ

と」

立村くんじゃないの？ と尋ねようとした。

「やつぱりいるの？」

初めて詩子ちゃんが殻を破つて身を乗り出した。

「あの、いないんだけど、ただ」

大きな瞳にとんがつた唇。火がついた線香花火。不意に何かが美里にも点火した。

「私も調べてみるから、どうこう人か教えてよ。もしかしたら二年かもしないし、一年かもしないし」

「たぶん、二年生だと思うんだけど」

「二年生？」

立村くんと仮定して話そうと思つたのだが、堰を切つたように語り出した詩子ちゃんの言葉には疑問点ばかりが含まれていた。答えが出なかつた。

ほんとに、立村くんなのかなあ？

「背がものすごく低くて、一年くらいだと思つんだけど。頭がぼおつとした感じで全然しゃべらないんだ。でも青大附属の制服着ていてて、まじめそうな顔してて。いつも手伝いしに来る人の子どもだつて言つてたの」

「背が低い？」

立村くんだとすると、あまりぴんとこない。最近貴史が自慢下に「よつしやあ、立村を抜いたぞ」とはしゃいでいたのを覚えているが、それでもクラスで真ん中くらいだ。

「顔はどんな感じ？」

「女の子みたいな感じだけど、すごく子供っぽいの」

「子どもっぽい？」

もちろん露骨に男っぽい顔立ちではないけれども、子どもっぽいというのがどうもひつかかる。詩子ちゃんの男子好みは結局分からずじまいだった。

「話はしたことあるの？」

「ないけど、けど」

「何かその時辻くんつて人とあったの」

「ない。ないけど」

けどを繰り返す詩子ちゃん。もつとほつきつじうごうとかを話してほしいのだが、難しいようすだった。詩子ちゃんが知りたいのは「辻くんという男子が青大附属にいるかどうか」ということだらう。

「一年の男子で辻くん？ 私は聞いたことないなあ。でも背が低いことは、もしかしたら一年生の可能性もあるよね」

「あるけど、でも一年生だと思う」

「どうしてその人のこと知りたいの？」

「それは」

言葉を区切つて、詩子ちゃんはしばらく唇を噛んだ。

「陰で調べたいなにがあるの？」

「ないけど、ただ」

詩子ちゃんの言葉が途切れ、ぽつりと続いた。

「ショッちゅう口舞の会で見てるから、どんな奴なのかなって思つただけよ」

結局美里は「辻くんつて、立村くんの間違いじゃないの？」の一文を飲み込んだままだった。以前の詩子ちゃんだったら一時間話してまだまだ足りない、授業中もおしゃべりに熱中して先生に怒鳴られる、そういうパターンだったのに、今日は四十五分話をひねり出すのに苦しんだ。

青大附属の学園生活について語るうとしても、「私、落ちたからわからない」の一言で切られ、詩子ちゃんに彼氏がいるのかどうか聞こうとしても、「私、そんなの興味ないから」と遮られる。いやがらせのために美里を呼んだのかと邪推したくなる。一番語つてくれた唯一のことが、辻くんなる少年の話だ。しかも、ときめきみたいなものは皆無。単に「どういう奴か知りたい」それだけらし

い。

まあね、立村くんだつて決まつたわけじゃないもんね。でも八割はそうだと思うな。

だつて、うちの学年で時計なんて奴いないもん。

食べるのも飲むのも退屈になつた頃、ふたりで店を出た。本当だつたらファーストフードとか、アイスクリーム屋とか、そういうところに寄りたかつたけれども、なんかそういう氣にはなれなかつた。

「美里、聞いていい？」

「なあに」

「今、羽飛とは付き合つてるの？」

「いつもや、美里を独占したいあまり、貴史に「美里をひとりじめするには、お願ひだからやめて」と文をよこしたという詩子ちゃんだつた。あの頃と同じ感情を持つてているとは思えないけれど、本当のことを言つしかなかつた。

「ううん、貴史とは相変わらず一番の友だちだよ。付き合つてる人は、別にいるもん」

「羽飛じやなくて？」

「うん。立村くんつていうんだ」

思い切つて、言つてみた。詩子ちゃんの反応を見たかつた。動搖させたかつた。

「ふうん、羽飛じやないんだ」

詩子ちゃんは天を見上げて、ふつと唇を尖らせた。横顔には斜に構えたような、すねた表情が浮かんでいた。

「でも、立村くんと貴史とは親友同士なんだ。それで私と一緒に人でよく遊んでる」

「ふうん」

一回、「立村くん」と口にしたにも関わらず、詩子ちゃんはあまり関心を示さなかつた。

「五日の日、貴史と一緒にに行くから。舞台、がんばってね」

詩子ちゃんは答えず、笑顔も見せず、片手だけひらひらさせた。

かつての仲良し同士だった面影はまったく残らない、駅の前の別れだつた。

詩子ちゃんは、やつぱり私を許してないよね。

家に帰る道を自転車引きずりながら歩いた。土曜日なのに歩道にはそれほど人がいなかつた。街路樹の葉を見つけては踏みつけた。蛇行しているかもしれなかつた。

あとで、こずえに電話して聞いてもらおうかな。立村くんのこともあるし。

一年前までは、何かがあるとすぐ詩子ちゃんに言いたいことを言つていたのに。今では涙も笑いもすべてこずえの方に向かつていて。こずえとだったら今日みたいな話をしても「なあに言つてるの、言いたいこといえばいいじゃないのさ。それにしてもあの昼行灯も美里のこと、気にしてゐみたいよ。今度もつと、お姉さまの権限で仕込んでやううか? リクエスト、ちよつだいよ」と笑い飛ばしてくれそうだ。たぶん詩子ちゃんのよつこ「私、そういうの好きじやないから」と切り捨てるよつな言ひ方は、しないだろ。

びひして小学校時代、私、詩子ちゃんと仲良しだつたんだどう?

だいぶ繋がりが途切れてきた小学校時代の女子友だちをひとりひとり思い出した。

吹かれて転がる枯葉を追いかけた。

1 立村上総の観た舞台裏

田曜田は母と約束した通り、朝十時に青潟市民会館へ出かけた。前夜も母の手伝いに狩り出され怒鳴り散らされかなり神経磨り減つている状態だが、そんなことを言つてられない。

「じゃあ上総、悪いけどこここの椅子とテーブルを全部奥にたたんでちょうだい。それからござしいてちょうだい。あとそうね、この辺にある御菓子を全部、籠に分けて入れてちょうだい。ちゃんと均等にするのよ。あとでいろいろ言われるのいやだから」

口早に命令する母を無視しつつ、やることだけはきちんとする。母を操縦するにはベストの方法だ。

何も考えずまずは長いテーブルの足を折りたたみ、抱えてどんどん積み上げていった。下ざらいそのものはきちんと別の部屋をあつらえて行つたが、みなが揃つて着替えたり準備したりする樂屋代わりの場所を用意しなくてはならない。

「おはようございます。上総くん、いつもありがとう。今田もよろしくね」

会主の先生が笑顔で現われた。まだ「やをしききつていなかつたので慌てて敷き詰める。秋の柄が入つた薄茶の和服を纏つっていた。「あら先生、こんな汚いところじゃなくて、ちゃんと和室とつてあるんだから」とひづれ、ゆづくりなさつて。今日は忙しい日なんだから」

「沙名子さんも早いわねえ。本当に助かるわ。そういう、今日は地じかたさん用の部屋も用意してあるの?」

「もちろんですよ。ちゃんと和室ありますから大丈夫」

よくわからないが、他の関係者たちはいい部屋を用意しているらしい。弟子一同が二十人近く集まることになると聞いている。運動会の父母場所取り大会を思い出してぞつとした。

「母さん、もう一枚！」ぞ、ないの」

「どうみてもこれじゃあ足りない。二十人が座りきれるとは思えない。

「十分よ十分、みんな譲り合つて座つてもらえればいいんだから。それに他の先生たちも別部屋にするし。上総、あんたよけいなこと考えなくていいのよ」

「どう見たつて間に合わないぞ、これじゃ。

そりゃあぎつちりと膝と膝付け合つて座るのならば、余裕もあるだろう。でも上総の記憶する限り、楽屋の中では脱いだ和服やら浴衣をたたんだり、お弁当を積み上げたりいろいろと大変なはずだ。人によつては蒔物を置く場所が足りないといって大騒ぎになるかもしれない。何度か母に付き合つてみてきた経験からして、そう思う。これが青大附属の学校祭とか、評議委員会関係の演劇とか、そういう場にいたらためらうことなく文句を言つだらう。でも。

いろいろあるんだろうな。

ひとりでせわしなくして氣が立つてゐる母を眺めながら、上総はたたんだテーブルの陰に、くるくる巻いたままになつてゐる「ぞ」の場所をチェックした。覚えておくに越したことはない。

「じゃあ上総くん、申しわけないんだけど、お弁当を下から運んできてもらえないかしら。さつき頼んでおいたのが十一時前に届くはずなのよ」

「つてことは、ちゃんと食事は出るつてことか。

愛想なく「わかりました」と答えたけれども胃袋を満たしてくれるのであつたら、弁当にだけは笑顔が出る。

前の晩は例の「和楽器と洋楽器のコラボレーションライブステージ」の手伝いだつた。といつても決して上総が外に顔を出すことは

なかつた。単なる切符のもぎりと、いただいた花束を飾り付けたり樂屋に運んだりする程度だ。もつとも数えることが大の苦手である上総にとつては結構面倒くさい仕事でもあり、母には思いつきり怒鳴られた。もちろん怒鳴り返す。酒の出る場所ということで未成年出入り禁止になつてたのは残念だが、上総はちゃんと気付いていた。一年の杉本梨南とその両親、友だちが堂々とやつてきていたのを。ちらりと見ただけなので声を交わしはしなかつたが。

一階の入り口をきょろきょろしていたら、ダンボールを抱えた男性が現われた。目的のものはこうやってあつさり発見した。受け取りにサインだけして受け取り階段を上がつていつた。思つたよりも軽い。サンドイッチ程度のものだらう。少々失望したけれども、女性陣がほとんどということを考えるとそれもしかたないことだらう。そんなに食つもんじやないだらう。

「ありがとう、じゃあ次、みんなに配つていつて。地方さんたちに十箱、うちの先生の部屋に五箱、音響さんに二箱、あと残りを他の人に持つて行つてよ。そのくらいできるでしょ」

馬鹿にしているものだ。思いつきり「ふざけるなよな」と言い返したいのをこらえつつ、紙箱を取り出した。人数分重ねて舞台の袖に持つていぐ。みな忙しそうに「ああ、ありがとうございます」程度の声しか聞こえない。一通りお運びさんをした後、手持ちぶたさでぼおつとしているお弟子さんたちにもつていくことにした。上総が会議室を離れている間にいろいろ人は揃つてきたらしい。あまり会つたことのない女性、子ども、がござの上で浴衣を広げたり、正座したまましゃべつたりしていた。ざつと観た感じ、若い女性が多い。小学生、大学生が中心らしい。お互あやとり遊びで盛り上がり、気の立つた母親に「ほら、早く浴衣に着替えるよ」と叱られていた。

あの人は来てないのかな。

藤野詩子のこと思い出した。「玉兎事件」のあの少女だつた。

まだ、荷物も置いていないらしい。

まさか、清坂氏と友だちだったとはな。

へたしたら、当田羽飛、清坂氏と顔合わせてしまうかな。

仕方ないだろ？ 上総も覚悟を決めていた。

「これで全員揃つたかしら。ちょっとみんな何やつてるの… ほらちびちゃんたちも遊んでちゃだめよ。早く順番が来る前に浴衣に着替えてちょうだい。ほらほら、衣装着てみるんだから。ちゃんと紐も三本持つて。それとお母さんたけ、ちゃんと衣装さん、鬱さんのお礼、持つてきましたか？ ほらほち袋用意したの？」

自分の息子だけではない。母のヒステリーはお弟子さんとその家族たちにもぶつけられている。同情すべきものがある。観ていて腹が立つのもわからないことではない。誰も浴衣を着ないで黙つてしまがつてているだけなのだから。上総が弁当を持つていくまで誰も動かなかつた様子が全てを物語つている。弁当を運び終え、いただきものの菓子を籠にあけ、ばたばた運んでいる間、ほとんど誰も手伝つてくれなかつた。もしこれが評議委員会関係の行事だつたら、即座に本条先輩から殴られているだろ？

「あのう、時計さん、いいですか？」

恐る恐る母を呼び止める声があちらこちらから聞こえた。ふんぞり返つたかつこうで母はひとりひとりから質問を受け付け、高飛車に返答する。もつとやさしい声で話せばいいのに、と思うのだが上総だつて母を怒らせたくない。何も言わず黙つてお茶を注いでいた。「ほら言つたでしょ。この前、ちゃんと帯を用意しておいてちょうだいって。いつ外出かけるかわからないんだから、伊達縫めだけで外うろつかないようにしてって。ホテルと一緒に。いいホテルでは浴衣で廊下を歩かないよつとしてくださいって言つでしょ。前にも言つたのよね」

別に借りればいいじゃないかよ。

母に言い負かされた犠牲者の数が増えるにしたがつて、隣りの部

屋からは三味線を爪弾く音や琴を爪弾く響きとか、いろいろなものが交じり合つて聞こえた。洋楽の匂いが一切しない、純正の和楽器だった。

「あと誰來てないの？ 藤野さん？ まつたくあの親子つたら」

頭にわざとらしく手を当てて、大げさにため息をつく母。しかし時間がないらしくさつそく命令をお弟子さんたちに出した。

「とにかくみな、衣装さんが準備出来たらすぐに着替えられるゆつにして頂戴よ。ほら早く」

後ろのドアが開いた。上総が振り向くと、噂をすればなんとやらの親子連れが腰をかがめている。頭を下げているのだが、あまりにもへりくだつた感じだった。やはり荷物を抱えている。上総はすぐにドアを支えてやつた。

「ありがとうござります。おはようござります。本日は遅くなりまして申しわけございません」

藤野詩子の母だとすぐにわかった。そして、腰をかがめているのが母親だけで、当の藤野詩子本人が唇を結んだままぺこっと頭を下げていたのも見た。相変わらず、態度が正反対の親子である。

「藤野さん、あなたたちだけじゃないんですか？ ほら詩子ちゃんもすぐに着替えて」

返事をしない。母には一警を投げただけで座りつとする。上総はすぐに、最後のサンドイッチパックを一箱取り出して藤野親子に持つていった。これで全員分配りきつたことになる。

「ほら、詩子ちゃん、じめんなさいって言いなさい」

「うるさいつてば！」

考えてみれば藤野詩子の『機嫌麗しい時をまだ一度も見たことがない』ような気がした。上総が持つていった弁当も、結局受け取ったのはお母さんだけだった。ふいと顔をそむけたままだった。たぶん、顔を見るのも嫌なんだろう。慣れているのですぐに引き下がつた。

が、

「もつと端っこ行きたいんだつてば！」

お母さんを相手になにやらまた愚痴つていてる。藤野親子が落ち着いたとしているところは、『』の真ん中らへんで、お弟子さん同士に挟まれている。角にいる方がほつとするタイプなのかもしれない。隠れていたいのかもしれない。その辺の気持ちは上総もわかるが、どうしようもない。

「ほら、またわがまま言つてるの？ 詩子ちゃん。もう中学一年なんだから」

「わかりました！」

完全に藤野さんとつちの母さん、天敵だな。

「もつとも事件を知つていてるだけに上総はあらためて感じた。母さんもなんでこんな露骨に馬鹿にした言い方するんだろうな。きっと相手がどう思つてるかなんて考えてないよな。この人。

とはいって、上総の目からすると、浴衣に着替えるためのスペースがかなりきつつきつなのも確かだつた。風呂敷や和服キャリーバックを開きながら、きちんと長方形にたたんだ白に紺染めの浴衣を出してはいる。が、広げるところまではいかないようだ。ちょっと袖のところをめくつては隣りのお弟子さんとおしゃべりをし、足袋らしき白いものをひっぱりだしては、またしゃべりと時間つぶしをしている。母がいらだつのも無理はない。特に大学生くらいの女性たちはなかなか袋すら開けようとしなかつた。

「ちょっとあなたたち、なんでそもそもたもたしてるの！」

口籠もるみなさま。上総は退散しようとした。とたん、

「だつてこんな狭いところじゃ着物広げられません！」

必死に押さえようとする母親を無視して、いきなり藤野詩子が金切り声を上げた。おそるおそる上総は振り向いた。母の様子を見ると、完全に見下した態度でねめつけている。

「詩子ちゃん、遅れてきてその言い方は失礼よ。あやまりなさい。

そしてすぐに浴衣に着替えなさい」

「だつて着替えたくてできません！」

いわゆる体育更衣室ののりだつたらかまわないのだらうが、この場所は窓からも丸見え、隣同士の肩と肩が触れ合つような小さなござだ。ポニー・テールをまだ解かずに詩子が鋭く続けてくる。

「こんなところで、できると思っているんですか」

「当たり前でしょう。詩子ちゃん。いいかげんわがままはやめない。他の人の迷惑になるでしょう」

「じゃあ私出ません。このまま帰ります」

また始まつた、とばかりに母は、詩子のお母さんにつなづいてみせた。すっかりおろついている藤野母は、何度も頭を下げて、片手で詩子のスカートをひっぱつていて。もちろん、振り払われているが。

だから母さん、要は「じれをしきやあいいんだろ、『じれを』。

上総は母の隣りをわざとぶつかるようにして通り抜け、部屋の隅に立てかけてある「じれをひっぱり」だした。海苔巻状態だ。ぐいと抱えた。

「これ、使つてもいいんだろ?」

「上総、でもこれ敷くと、場所が狭くなるでしょう」

「少し端と端を重ね合わせれば、通路はできるよ。当口はわからないけども、今日はそんなに人こないんだろ?」

母の返事を待たずに、上総はもう一枚の「じれを」を蹴飛ばしながら広げていった。くるくると広がつていくのがおもしろいかった。サッカーライフでかなりいいかけんな敷き方だが、スピードが一番だ。

母はヒールをこつこつ叩きながらも、ふんと息をついて、

「詩子ちゃん、これならどう? 好きなように使いなさい」

藤野詩子ではなく他のお弟子さんたちが安心したように、長方形の浴衣を広げ始めた。大判の風呂敷を広げて、化粧道具や洋服やら、ありとあらゆるものたぐさんばらまいている。口には出さなくとも、そういう不満が溜まつていたに違いない。広くなつたはずの「じざがあつ」という間に満員御礼だ。

上総が足先で端を整え、靴を脱いだ場所に戻った時、見たくないものと目が合つてしまいとまどつた。藤野詩子が唇をへの字にして、じつと上総をにらみつけていたからだつた。怖かつた。そのうち、藤野詩子の母が浴衣を取り出してばらりと広げ肩にかけていたが、露骨に振り払い言い合つてゐる声が聞こえた。

「母さん、俺の分の弁当ないんだる。どうせ」

「え？ あり、ほんとだわ。私ももらつてないわよ」

「さつさ配つてて氣付いたけど、俺も今日一日、何も食わずにやるのはいやだよ」

「上総、あんたなにを言いたいの」

「まだ時間あるだろ。俺はひとりでカレー屋で食べてくるからその無理やり母を会議室からひっぱりだし、上総は当然の要求をした。

代金」

あつさり、千円一度せしめることができた。母もめずらしく嫌味を言わずに、ぽつりと、

「一時までに戻つてきてよ。まつたぐ、この調子だと先が思いやられるわ」

上総に對してなのか、それとも藤野詩子に對してなのか、それはわからなかつた。たぶん両方だろ？

2 羽飛貴史の実験と計画

美里と藤野詩子との語り合いがどうなつたのかは、それほど興味がなかつた。貴史が知りたかったのは、はたして「藤野は立村のことを知つてゐるのか」という一点だけだつた。女子同士のいざこざには近づかないのが鉄則だ。貴史は日曜、美里と美術館で待ち合わせることにした。別に部屋に呼び入れても問題はないのだが、双方の親が立村のことを快く思つていいのを知つてゐる以上、ためらいもある。もつとも小遣いはかなり厳しい状況なので、互いにコンビニでパンとジュースを購入して持つていくのは当然のことだつた。

「結局どうなんだよ、藤野は立村のこと、知つてたのか？」

「たぶん、だと、思う。けど」

自転車を駐輪場に並べ、晴れた外のベンチに腰掛けた。午前中といつこともあり人は思つたよりいない。美術館の催し物も常設展のみなので、それほど集まつてこなかつたようだつた。

美里は髪を下ろしたまで来た。いつもだつたらわけのわからん編みこみとかいろいろしているのに、珍しかつた。指を絡めて、言葉を選んでいる真つ最中だつた。

「私の勘なんだけど、立村くんのことを時辻つて苗字の人だと思つてゐみたいなんだ」

「時辻つて誰だよ？」

初耳だつた。

「つまりね、立村くんのお母さん離婚してゐるじゃない？だから苗字も変わつてゐるんじゃないかつて思つんだ。時辻さんに変わつてるかもしけないじゃない？」

「けどあいつは立村つて」

「ばかね、貴史。離婚すると苗字が変わるけど、立村くんはお父さんのうちにいるんだから立村姓のままなのよ。でも、お母さんの手伝いで引っ張り出されているからまわりからは時辻上総だと思われてるわけよ」

「ははあ、やつと飲み込んだ。けど、あいつの母ちゃんが時辻だつて断言できるのかよ」

「出来ないよ。そりやあ。ただね、今まで立村くんの態度見てて、絶対これはクロだつて私は思つたね。とぼけようつたつて無理無理。もう私もあきれて物も言えないとね」

好きな相手に對してよく言えるものだ。無言で貴史はコーラを飲んだ。

「じゃあ、来週の日曜はへたしたら立村と顔合せができるんだな」「どうだか。向こうだつて私と詩子ちゃんが知り合つて知つてはすだから、姿隠すはずよ。立村くんの性格だもの、絶対そうす

るよ」

さすが、奴の性格を理解しているよな。」こつも。

「だから、しばらく私も無視することにするから。貴史悪いけど」

「ああ、わかった」

南雲にぶつけられた罵詈^{マリ}暴言^{ボウゴン}が、まだに耳から離れなかつた。土曜日の放課後、なぜ自分は一発奴をふんぬぐつてやらなかつたのだろう。

納得^{ダツク}がいかなかつた。

「こいつがこいつには、どうやら「羽飛貴史は立村上総をいじめている」ように見えるらし。そこで規律委員たる南雲が「注意」をしたということらしい。なあにが規律委員だ。と貴史は大声で怒鳴つてやりたい。」こいつにそんなことを言われる筋合^{ハセ}いはない。何よりもまず、どうをどうすれば「いじめ」になるのだろうか。

「あんなあ美里」

「なによ」

「俺、あこつをこじめてるよつて見えるかよ。見えねえよな」美里は少し首を傾げ、ちゅちゅとサイダーをすすつた。

「全然。当然のこと言つてるだけでしょ」

「だわな。いつたいどこがいじめてるつてんだよなあ

「貴史、あんたそんなこと誰に言われたのさ」

「いや、な」

南雲に言われたんだと愚痴^{ウチ}るのは情けないことだと、貴史も自覚していた。

男たるもの、だらだらみじめつたらしことこ見せ付けたくない。

「そりや、それでね、貴史。昨日ね、見ちやつたんだ」

声を潜めて美里がいきなりしゃいた。別に誰もいないんだから大声で堂々と言えよ、と貴史は思つ。

「はつきり言つちまえ、なんだよなんだ」

「あのね、彰子ちゃんがね、昨日の帰り、別の男子と帰つてたんだよ。堂々と！」

奈良岡彰子のことりじご。天敵南雲の恋女房だ。

「ほお、奈良岡もやるなあ、相手は誰だよ」

「知らない奴だった。白いラインがガクランに入つてる制服でね。すごいんだよ、金銀ぎらぎらまだらに光らせた自転車に乗つてるの。なんか、いわゆる不良化の兆しつつプリントに出てきそうな感じ」

思いつきり初耳だった。奈良岡彰子といえば、五月の下旬にいきなり南雲から告白をかまされてショックを受けたものの、心よく友情を保つお付き合いを引き受けたというなかなか出来た女子である。ただ、ぽつちやりを超えてビール瓶タイプの肝つ玉ねーさんという見た目が災いして、なかなか彼氏が出来なかつたのもまた事実だろう。貴史も入学式の時に、一目見て「ちょっとこいつとは」遠慮したい」と一瞬思つたことを覚えている。鈴蘭優命の貴史には、ルックスが受け付けなかつただけである。だが、貴史の美学をあつさりとくつがえしてくれる性格のよさに、男子一同みな「奈良岡のねーさん」という暖かい呼びかけをプレゼントしてしまつた。恋愛対象にはならないが、しかし、といつ奴である。

いやあ、奈良岡もやはりあこいつの本性に気付いたんだらうなあ。正しい選択だぜ。

さすがにこれも口に出さない。いくら南雲が憎しどうとも、悪口をこぼしたくない。美里の前では特にだ。

いきなり強い風が吹き、美里が小さなくしゃみをした。

「寒いのか」

「うん、けどいいよ。でねでね」

貴史はパンの袋を開けた。まずは腹ごしらえをしたかった。

「まさかねえ、南雲くんだつたら浮気つてこともあるかもしれないけど、彰子ちゃんに限つてそんなことないよね、って思つて声かけたら、いつものようにこり手を振つてくれたの。ふと思つたん

だけど、南雲くん知つてるとかかな？」

土曜日の放課後といつことば、貴史が南雲に言いがかりをつけられた時より後だろ。

俺にさんざんにちやもんつけてる間に、最愛の相手はビリヤへ消えてしまつたつてわけだ。情けねえ。

「知らねえんじゃねえか」

立村を探しにどこか行つてしまつたことを考へると、結局南雲は奈良岡とは帰らなかつただろう。

美里は左の一の腕を、袖の上からすりつりつぶやいた。

「やつぱりみんな、仲良しに見えてもこりこりあるんだよね。なんだかなあ」

一番いろいろあるのはお前だろ、美里。

「とにかく、どつか別のとこ行くか。俺もまじで寒いぜこ」

「うん、行こ」

となると、行く先は近所のスーパー、無料休憩所くらいだらう。クラスの連中に見つかってなんやかんや言われるかもしれないが、それはその時だ。誰か…… それこそ貴史と美里がくつづいているらしいと、南雲的思考の奴が立村に言いつけたとしても……、あいつのことだ、何も言い返してこないだらう。本当にほれてるんだつたら、意地でも尋ねてくるはずだ。

「美里、早めに決着つけるよ。俺もいいかげん汚いいじめやつてる奴だと思われるのたまたもんじゃねえ」

「あんた、だからどうしていじめにこだわるのよ。ほんと、貴史、変だよ」

しばらく貴史は美里を相手に、家族のことやり五日のこと、その他いろいろ馬鹿話をかましていた。無理に立村のことを避けなくても、話すことは山のようだつた。立村が結局、和楽器と洋楽器のコンボレーションみたいなライブに貴史と美里を誘ってくれなかつたことかも多少不満がないわけではない。美里だつて同じだらう。一

学期の時に誘われたのは覚えていたが、やはり一学期に入つてお互
い疎遠になりつつあつてからは、特別に盛り上がりがつたりもしなかつ
た。

目に見えないプレパラートのようなもの。

入学式の時、初めて立村と会つた時に感じたものだつた。当時は
まだ、貴史の知らない世界を纏つてゐる、きらきらしたかつこよさ
に思えたものだつた。でも一年半が経ち、立村の打ち解けない部分
を知るにつれて、それは防弾ガラスのようなものだつたのかもしれ
ないと感じるようになつた。

プレパラートつてさ、ピンセツトであつかわねえと大変なん
だぞ。破れてしまつて先生に怒鳴られるんだ。実験の時。でも、立
村の場合そんなピンセツトで捨てるようなガラスじやねえよな。
そういうガラスを破るには、俺だつて思いつきり弾丸ぶちか
ますしかないだろ？

それが、いじめだつていつのかよ。相手は全然反応しねえの
に。

歩いて五分くらいのところにある大型スーパーに向かう間、貴史
はもう一度あたりを見渡した。

とりあえず、立村の姿は見えなかつた。それでよし。大丈夫だ。

「美里、よく聞け。これはオフレコだ」

「なによ。どうせ私たちやつてること、みんなオフでしょ」

茶化されたけれども、もう一度深呼吸して続けた。

「明日も連休だろ。奴と顔を合わせるのは火曜日だ」

「まあね」

気のない声で答える美里。

「もしあさつての放課後、俺が立村にかなり厳しいやり方をするか
もしれないが、いいか、お前、口が裂けても本当のこと言つんじや
ねえぞ」

「厳しいやり方つてなによなに」

口を尖らせて美里が立ち止まつた。道路を一台、ワゴン車が通り過ぎていった。あとは誰もいなかつた。決して声を低めはしなかつた。堂々とだつた。

「俺が思つてたよりもあいつは簡単な奴じゃない。一発目を覚まさせてやらねえどどしきょうもねえよ。お前が無視したこと自体はすげえ、堪えてるんじゃねえかと思つけどな。あいつの方から本音はなかなか引つ張り出せねえよ」

「それならしかたないじゃない。結局私はあきらめるつてことだから」

「そんなんじゃねえよ。ばあか。美里、あいつがあれだけ落ち込んでるつてことは、言い出すきつかけがねえつてことだろ？ 度胸ねえから様子をうかがつておどおどしてただけだ。だつたら、俺がきっかけ作つてやろうじゃねえか！ まあな、世の中にはこういうことを『いじめ』だと勘違いする奴らがいるからな。俺もへたしたら規律委員会につるされるかもしれないが、まあそれはその時だ」「ちょっと、貴史、やめなよそんな。まさか立村くんを殴る……」

「俺が本気だしたらあいつ頭蓋骨すたずたになつちまうぜ。それに

暴力沙汰は学校の中でやらねえよ」

「けど、あんたまづこよ。そんなことしたらそれこそ停学になっちやうかもよ」

「お前覚えてるだろ。宿泊研修三日目の時、結局立村は停学もなにも食らわなかつただろ。あれを考えれば俺が一言一言、あいつとやらりあつたつてたいしたことにはならねえよ」

納得させられたのだろうか。美里は黙つてうつむいた。

「俺がそんなへまなんかしねえよ。全く、あいつも世話の焼ける男だぜ」

通りの店を五軒通り過ぎるまで美里は一言も口をきかなかつた。まだ捨てていなかつたサイダーの缶を、街路樹の側にあるべずかごにほおつた。ホールインワン。見事だつた。

「ほんと、そ、うよ。私たちやつてることって、ほんと、立村くんの親代わりよね」

奴にはわかりやしねえんだ。俺と立村と、美里との繫がりが。貴史が言いたいのはそれだけだつた。所詮恋人と思つている相手に浮気されていることも気付かない規律委員に、きつぱりと言い放つてやりたかった。

こういうやり方でぶつかつてくしか、俺と美里にはできねえんだ。

こういうやり方でないと、立村は気付かない奴なんだ。そんなこともわからねえのか、南雲。

3 清坂美里の生で見た寸劇

連休は晴れていたのに、なぜか台風到来ということで火曜日は大雨だつた。風も強い。かさもきかない。しかたないのでレインコートで出かけた。めつたに来たことのない真っ赤なケープ付きのレインコートは、かなり裾が短くなつていたけれども可愛くてお気に入りだつた。

立村くん、今日はバスかなあ。

品山から通うとなると、それしかないだろう。自転車で来る根性があるとは思えない。美里は「青大附中前」のバス停に降り立つ立村くんの姿を探した。やっぱりいなかつた。混んでいるんだな。

貴史、何考えるんだろう。殴ることはしないって言つてたけど。あいつのことだから生半可なことじやないよね。

日曜にふたりで話をしたことがまだこりとして残つていた。

結局貴史の提案を忘れたふりして、ふつうに遊びふつうに食べて帰つただけだつた。

来週の日曜は一緒に詩子ちゃんの舞台を観にこうと約束した程

度だった。

でも、忘れてるか。もう一日も経つたんだもんね。

貴史が考えていることがわからないわけではない。美里も反対の立場だつたらきっとそつしだろう。立村くんを問い合わせ詰めて本当のことを白状させる。全くもつて素直すぎることをやろうとしているに過ぎない。立村くんがいつも、裏に回つて巧くいくよう努力しているのとは反対だ。貴史もそつしだが、美里だつてそつちの方がすつきりする。言いたいことははつきり言つて相手の返答を待つ。納得いかなかつたら口で返事をもらつ。立村くんだつて口がないわけではないのだから、それくらいはできるだろう。

けど、立村くんは、何でも内にしまつちやうからな。

立村くんはいやなことがあつたら黙つて受け止めて、それから後で復讐するつてタイプだよ。きっと。ほら、小学校の卒業式で学校の番長格の奴と決闘した話とか、一年の時に加奈子ちゃんに追い詰められて裏ノートこしらえて乗り切ろうとしたりとか。結局立村くんは詰めが甘いから、大成功はしなかつたみたいだけど。そうよ、あの人詰めが甘すぎるのよ。ひとりで何でもやろうとするから、結局最後の最後でぼろがでるんじゃないのよ。だから、私と貴史に一言でも言つてくれたら、いくらでも手伝うのにさ。もちろん、嘘じやないことが前提だよ。「裏ノート」の時みたく、嘘八百連ねてどうたらううたらつていうんだつたら、私は絶対に乗らないからね。正々堂々と話をして、それで私たちに手伝つてほしつて言つてくれたなら、私、思いつきりがんばつちやうよ。当たり前じやない。

ずぼつと水たまりに足を突つ込んでしまつた。ショートブーツがぐつしょりぬれた。母には長靴を履いていくように薦められたけれど断固として拒否した。かつて悪いことはしたくない。でも足の冷たさにほんの少し、後悔した。ちゃんと代えのストッキング持つてよかつた。

トイレでストッキングを履き替えた後、急いで美里は一年D組に向かおうとした。すれ違いに降りてきたのは三年A組の評議委員かつ委員長、本条先輩だった。

「おはようございます！」

「よお、清坂ちゃん。雨にぬれた姿も色っぽいな。奴に惚れ直されるだひ」

「先輩じゃ、相変わらず大変なんですね。いろいろと…」

軽くかわして一礼した。

「ところで立村はどうして…？」

やつぱり聞かれると思っていた。立村くんをなめるように可愛がつている本条先輩のことだから、多少は気付いているだろうと覚悟はしていた。貴史や自分には一言も打ち明けないけれども、本条先輩にだけは洗いざらにしゃべつていいらしいというのは、女の直感だ。

感じた以上、『まかさなくては。

「やあですねえ。そんなの先輩の方が『存知でしょ』

「いや、知らないんだ。ほんとになあ。あの甘つたれが全然、最近俺のところに顔出さなねえからさ」

甘つたれ、とはまさにその通り。通常の精神状態だつたら爆笑してピースしてやるところだらう。本条先輩は頭を搔きながら続けた。「来週まで評議委員会がないからなあ。別に用がないならしゃあねえけどな。しつかし毎日通いつめられていた俺としては、それが全くなくなるとやはり、なんか悪いもの食べたんでないかと心配になるつてわけだ。清坂ちゃん、あいつになんかあつたら、俺に教えてくれよな」

「なんかあつたら、ですね。たぶんないと思いますけど」

色氣も恋心も感じさせない言葉を返した。本条先輩はかすかに顔をしかめて笑い、片手を挙げて廊下へ降りていった。

立村くん、本条先輩のところにも顔出してないの？

私、てつきり、本条先輩のところでべたべたしてるんだと思

つてたのに。

窓から雨のしぶきでガラスが解けているように見えた。水あめ状態。輪郭がぼやけた葉が揺れていた。

美里が一年D組の教室に入つたとたん、貴史の言葉が嘘じやないことに気付いた。

貴史は嘘をつかない奴だつたと、改めて思った。

氣付いているのは若干名。掃除箱の前でふたり、じつとにらみ合つていて。目に力をこめているのは貴史の方だつた。ブレザーを脱ぎ捨て、ネクタイを緩めたまま、片手で立村くんを壁に押さえつけるようなポーズを取つていて。対する立村くんは目を見開いて、ほんと瞬きせずに貴史の顔を見つめていた。目を合わせるのが苦手な立村くん。なのにこうも大きな目でじつと動かないでいるのは、それだけ貴史の迫力が勝つていてるからだらう。

美里はそつと近づいていた。声をかけよつとしたが、不意に肩に手を置かれた。振り向くと、真面目な顔をしたこずえが立つていた。首を振つていて。

「こずえ、いつから見てたの」

「ついさつきから。始まりから全部ね」

貴史たちの邪魔をしないようにふたり、ちらちら視線を送りながら会話を伺つた。

「あのなあ、立村、さつきから言つてるだろ。俺は別に、美里がどうとか女子がどうとか言つてるわけじゃあねえんだよ。なんでそもそもおどおどしてるんだ？ 俺、お前になにか悪いことしたのかよ。え、言つてみろってんだ。答えられねえのかよ！」

さすが教室の中。声は低い。やつぱり外じやないのだからしかたないのだろう。立村くんは相変わらず返事も身動きもしなかつた。周りの男子たちも一部、気にするじぐさをする様子だが、すぐに別の方を向いていた。なんのことはない、水口くんが奈良岡彰子ちゃん

んを探して騒いでいるので関心が移つただけだ。

「お前、聞きたかったんだろ？ 僕と美里があの田、どこで油売つてたか」

「いや、それは話さなければそれでいいと」

「お前それが本心かよ。本当は氣になつて氣になつてしかたなかつたくせにな。俺は前からお前の、そういううじうじしたところが大嫌いだつたんだ。言いたいことがあつたらはつきり言えよな。立村、お前口があるんだろ。聞きたいことあつたら聞けばいいだろ。それともなにか？ 言つたら何かされるとでも思つてるのかよ」

「そんな、そんなわけないだろ」

力ない言葉だ。こういう男を自分は好きなのだと思つと、情けなくなつてきてしまつ。あつさり「あんたとは別れるわ」と言い切つてやれればいいのに。それができないからこつやつて黙つて聞いているわけだ。美里はこづえと同じ方向をじつと見据えた。四つの視線に気が付いたのか立村くんは数回、身体を揺らした。動かさないのは貴史の手だった。

「ははあ、お前さ、ずっと言えないことみんな隠しているんだる。うつかり俺なんかに何か言つたら、裏切られるんでないかとかさ。美里を取るなとか言つたら、かえつて百発くらい息の根詰まるだけ殴られるとでも思つてるんでないのか。馬鹿野郎。そんな俺が肝つ玉小さい奴と思つたか」

貴史、あんた言つのちょっと女々しいよ。

「冗談からめてつつこんでやりたい。でも出来ないのは、後ろから見える立村くんの表情が能面のようだつたからだつた。いつも整つているあどけない表情なのに、完全に感情が消えている。怖かつた。見たことのない立村くんの顔だつた。

「言えよ、言つちまえよ。俺はサイクリングロードで決闘して騒ぎを起こしたり、車の中で大法螺こいてバスの中から抜け出したりし

たことねえし、どこかの誰かと違つてちょっとしたことで泣いたりなんてしない。ああ、そつだぜ。俺は全然そういうことしたことがねえよ。けどな

貴史、それだめだよ、あんた言いすぎだよ。

「すえが手を押さえようとする。でも押されられない言葉が湧く。あんた、そのこと言わないって約束してたのに、自分で約束破つてどうするのよ。ばか。

身体が勝手に動いていた。立村くんの肩を押さえている貴史の腕を、美里は両手で惹き下ろした。

「美里、お前黙つてろって言つただろ」

「いいの、あんたが言つてじやないの。私だつて言いたいだけよこれは私と立村くんのことだから。私が黙つてたらいけないの。

立村くんの視線はふらふらとさまよい、最後に美里の顔で止まつた。揺れている瞳をじっとにらみつけた。猫の眼だった。おびえたよつに光っていた。

この人が私の彼氏なんだ。

あふれ出た。

「立村くん。貴史はね、あんたのためにみんな言つてるのよ。おととい私、貴史と話してたんだから。あんたが全然私と貴史を受け付けようとしないから、みんな頭に来てるんだって。私だけじゃないんだよ。みんなそうなんだよ。私だつてずっと口に出かけていたけれども、言わないでがまんしてたんだよ。けどさ、あんた全然何も言つこと聞いてくれないじゃない。どうしてよ。こんなに私、わからつとしてるのに、どうして逃げるのよ。貴史と一緒に言つよ。あんた、口持つてるの？」

能面がわずかに揺れたように見えた。

「私知ってるんだよ。立村くん。あんたが小学校の時に本当にいじめられてたつてことだつて、手におえない泣き虫だつたことだつて、

お母さんが時計さんつて苗字だつてことだつて。あんたが隠したがつていることはみんな丸見えなんだよ。みんな一年の時から知つてるんだよ」

瞳がゆるんでいる。唇は堅く閉じられたまま。何か反応してと美里は叫びたかった。裏の声で叫んでいた。

「それがわかつて私、あんたと付き合いたいって言つたんだよ。想像の王子をまじやない、立村くんと付き合いたいって言つたんだよ。なのになんで、信じてくれないのよ。ほんとに馬鹿じやないの。もちろん立村くんが人のこと気遣いすぎる性格なのはわかつてる。ひとりでいつも背負い込んでしまうのもわかるよ。迷惑かけたくないって思つてのもわかるよ。けどさ、この前の宿泊研修だつてそうじやない。あんたが一人立派してやつてることは、みんな、私と貴史を思いつきり傷つけてるんだつて、気付いてないんじよ」

「そんなことないよ」

首を振る立村くん。能面がずれた。もつとひつぺがしてやりたかった。でも必死に冷静沈着の仮面を被りとおやうとするじぐせこ、思わず憤つた。隣りの貴史がじつと美里を見つめていた。こぢらは完全に、怒りの素顔をさらけ出していた。

「じゃあなんで何にもしてくれないの？ もしかして私と貴史がさぼつた時に口peeを入れておいたからそれでチャラになると思ってたの？ ばつかみたい。そんなことじやないよ。口どちらんと、謝るか怒るかしてくれないと、届くものも届かないよ」

「いや、あれはただ」

遮つた。聞けば聞くほど美里は言葉を尖らせてしまつた。たぶん言葉のやじりは針だらう。さくちく突き刺しているだらう。身体の奥からわけのわからない夢見じこちな感覚が湧き上がつてきた。身体がふわっと浮く感じ。言葉が途切れなかつた。

「あとで、お母さんのことなどをどうして隠すのよ。おとといの日曜、和楽器がどうたらこうたらのライブだつたんでしょ。一学期に誘つてくれたの忘れてると思ってた？」

「『めん、あれも場所の問題で』

「いいよ、わかつてるよ。説えない理由があつたんだって想像はつくよ。でも一言くらい、言ってくれたってよかつたじゃない。かくかくしかじかこういう理由で説えなくなつた『めんなさい』くらい。そうすれば、じゃあ今度誘つてねつて笑つて終わるのに。立村くんいつも言葉が足りなすぎるよ」

泣きたいのにわめきたいのに、体の奥だけ大笑いしているみたいだつた。いつちゃえいつちゃえと声がする。

「あんた、覚えてないでしょ。私と貴史がもし付き合つても平氣だつて言つたでしょ！」

貴史の顔が完全に炎で燃え上がつた風に見えた。ふたたび立村を両肩押さえて揺さぶつた。

「ばかやろう！　お前、正氣か！　本当にそんなこと言つたのかよ」「私、ちゃんと聞いたよ。別に悪意があつて言つたわけじゃないって、信じてるけど、でも」

けらけらおなかの中で笑つている不思議な生物がいる。目をつぶり顔を伏せる立村くんに決定打を浴びせたい。浴びせちゃえと声がする。口を開きかけた瞬間、

「美里、羽飛、いいかげんにしな」

片腕を握られた。貴史との間にこずえが割つて入つていて。ずっと聞いていたのだろう。立村くんの眼がこずえの方をちらつと見た。「立村、あんたはさつさと席に戻りな。全く、一人顔面蒼白にしてどうすんの。つたくあんたはガキなんだから」

立村くんは我に帰つたように、顔を上げた。美里、貴史をじつと見上げ、もう一度、

「『めん、本当に俺が悪かつた』

いつもの決まり文句をつぶやいて席に戻つていった。黙つてそつぽを向いている貴史。見ると貴史の腕をこずえががつちりと掴んでいた。憧れのダーリンにくつついているという風ではなかつた。罪

人の手錠、そのものだつた。

「羽飛、あんたやつてること、眞づかやなんだけどリンチだよ。もしうちの弟が、友だちに似たよつなことされたたら、羽飛だつて許さないよ」

美里には一言も言わなかつた。貴史の言葉は美里とイコールだといつしかこずえも気付いていたのだろう。ちらりと一瞥して、美里に、

「あとで、話すからね」

返事をしない貴史を置いて、さつわといじゅくは席についた。隣りの立村くんにはふたこと三言話しつけてこるよつだつた。南雲くんがにこやかに割り込んでいるよつす。でも、立村くんは田を伏せたまま黙つて頷くだけだつた。他の連中はそれほど関心を持たなかつたよつすだつたのが意外だつた。

菱本先生が入つてきて開口一番。

「悪いが、今日な、台風が来るところ」とで四時間田で終りにするぞ。なあに喜んでいいんだ。お前ら。外出歩くんじやないぞ。ほら、四時間のがまんだがまんだ」

ガラスが雨に洗われて溶けていくよつだつた。一切声を出さない立村くん、興奮の名残が顔の汗に残つてゐる貴史。ふと美里は自分の顔がどう立村くんに映つてゐるのだろうかと思つた。

1 立村上総は青空のもとに闇をみる

火曜日。台風の朝。貴史に小突かれ美里に罵られ「こずえに救われた時、上総は言葉を返す手段を見つけられなかつた。

「ごめん、俺が悪かつた」

と繰り返すだけだつた。四日たつた土曜の朝、今ならば冷静に言い返してもよかつたのではと思えるけれど。

三日間ずっと同じ言葉を夢の中で繰り返してきた。

すべて悪いのはわかつてゐる、だから。

ごめん、本当に、こんなことを考える俺が馬鹿なんだ。だから、だから。

今なら、と上総は唇をかみ締め思つ。口に出してみた。人前では言えない言葉だつた。

「でも、許せないことは、許せないんだよな」

上総が目を覚ました時、すでにカーテンは開け放たれていた。父が早朝、部屋に入ってきたのだろう。よどんだ空氣を入れ替えてくれたのかもしぬなかつた。

窓いっぱいに広がるのはなめらかな青空だつた。秋らしく、玉子の白身を薄く延ばしたような光だつた。枕から頭を持ち上げなくてもすうつと見える。

南雲と一緒に、黄葉山のホテルで同じような空を眺めたことを覚えていた。

もう、一ヶ月たつたんだよな。

だいぶ熱は引いた。

実際高熱でうなされたのは火曜の夜からだつた。台風の影響もあり、四時間目で早帰り。クラス全員の前での公開吊るし上げ。クラ

スの連中は当然、詳しい事情を探りたそうな顔をしていった。

上総が評議委員かつ、野郎連中に日常から恩を売りまくっている

こともあつて、直接

「ねえ、結局なんで美里にあそこまで言われるわけ?」

と追求されずにすんだ。クラスのために力を注ぐと見返りが返ってくる、ひとつの例だつた。

水曜の朝、父が仕事に行く前、車に乗せられて近所の病院で点滴を三十分打つてもらい、だいぶ体調はよくなつた。しかし薬が合わなかつたのだろう。一切食べ物が受け付けられない、無理して口に入ると吐き出してしまう、口にできるのは水だけという悲惨な状態に陥つた。

さすがに放任主義の父もまずいと思つたのだろう。食事を毎日上総の分だけ作つてくれた。取材の合間にはバイクで戻つてきて様子を見に来てくれた。一人ぼっちでうなされつゝも、木曜にはだいぶ落ち着き、「一ソースープくらいはおとなしく胃に収められるようになり、金曜にはおかゆを平らげた。だるいけれども、学校に行けないほどの体調ではない。

いつもだつたら、すぐに学校に行くのにな。
天の青空をそのままローラースケートで走りたい気分。一年前だつたら。

青大附属に通うことが辛くなることなんてないと思つていた。
小学校と同じことやつてるのかよ。俺つて学習能力なさすぎだよな。

四日間風呂に入つていないのでシャワーを浴びたかつた。棚の時計だと八時十分。間に合わないけれど、臭いままで出かけたくはない。急いで水浴びだけし、ブレザーに腕を通した。なんとなくするりと入る。身支度をして靴を履こうとした。

父が後ろでけげんそうに上総を見ていた。

「上総、大丈夫なのか」

「わかんない」

意味不明な返事を返した。

「無理するなよ」

なんでチョックのからし色シャツにチノパンという軽い格好なのだろう。父にしては珍しかった。普段は形だけでも背広を手放さない。父と似ている好みだ。

「父さんも、今日はうちにいるの」

「有給消化さ」

「うん、わかった」

意味が通つていらない返事を返した。父の視線が背骨あたりにしきくちく刺さつた。

午前八時半過ぎ。もうどうやつたって学校には間に合わない。でも行けば遅刻扱いとはいえた出席になるだろう。あまり休み過ぎると後で補習の嵐となる。川ベリのサイクリングロードをひととろ進んだ。途中で漕ぐのがしんどくなり、自転車から降りた。ガクラン、セーラー服姿の生徒はひとりもいなかつた。学校に吸い込まれたのだろう。

すれ違つたのはエプロンをつけた若い女性と、五歳くらいの小さな子どもたちだつた。二十人くらいはいだらうか。口をひん曲げた男の子が上総の顔を見上げて、

「顔、こわーい」

とつぶやいた。病み上がりで顔の輪郭が黒いのだろう。毎朝チェックする鏡の中、顔はくぼんでいた。

幼稚園児におびえられてどうするつていうんだよ。幼稚園児たちの騒ぎがだんだんまろやかな響きとなり、最後は消えた。

風がくるつと首筋を擦れて通つた。漕いでいたせいか、寒氣は感じなかつた。

上総は自転車を歩道に留めて、そつと土手から降りた。背の高い叢に膝を抱えて座り込んだ。雑草の中にもぐりこんでいると落ち着

く。小学校時代の習慣だった。中学に入つてからはさすがにしなくなつたけれども、久々のくせはやはり体になじんだ。

目の前に流れる川は途中どくんどくんと波打つた後、真つ直ぐ流れていった。空の青を水面に受けているのに、やはり陰が濃く映つていた。

こんな性格の曲がつた俺が悪いんだ。

貴史も美里も誤解しているのだろうと、上総は思う。
上総のことをいつも

「人の顔色ばかり見て気遣いばかりして」

と。

裏を返すと思いやりがありすぎて裏目に出ている、実は憎めない奴だとみな思つてくれていてるらしい。だから喧嘩してもいつもかばつてくれる。古川こずえも同じだつた。青大附属の連中はいろいろあつても上総のことをそのまま受け入れてくれている。

とんでもない勘違いだと大声で叫びたかった。

こんな汚い性格の奴がいるかよ。わかるか、羽飛、お前は知らないだろ？ 俺が小学校の時どれだけ人を見下してきたか。清坂氏、想像つかないだろ、俺が同じことをもし小学校の頃されてきたら、どんなことがあつても復讐していたにちがいないつて。

品山小学出身の児童が青大附属中学に合格したのは、四年ぶりだつたという。合格者をめぐる地域差別が存在したのか、単に品山からの受験者が少なかつたのかさだかではない。

俺はあいつらと違つんだ。だから、青大附属に行く。

さすがに口には出さなかつたけれども、中学受験で勉強している間、思い上がつたことばかり考えていたのを上総は覚えていた。二年前の高慢ちきな自分を絞め殺したくなる時だつた。

最低なのは俺だつたつてことに、どうしてあの時気付かなかつたんだろう。

膝を抱えて、顔を押し付けてズボンに涙を染みこませる。手で目をこすりすぎて痒くなってしまう。

逃げたから追いかけられただけだよな。

田を閉じると、まぶたの奥に蘇るのは壊れた自転車、土手、倒れて動かないかつての敵。

三月、卒業式用のブレザーを着ていた浜野といふ名の天敵を、上総は自転車の輪でもつて思いつき突き飛ばした。ぎりぎりのラインで輪が残り、自分がサイクリングロードにのつかつたままだつた。

ふつうの人だつたら、じついう時、すぐに手を差し伸べるよな。

涙流して感動するかもな。友情かもな。

なのに俺は何をした？

あの日まとつていつた黒いマント風のコートが重たかつた。決闘する以上は正装してやろうと決めていた。見下ろした時の、おなかからよじのぼつてくる湯気のような感情はなんだつたのだろう。見捨てて帰るのも、当然だとあの時は思った。勝利を確信して引き上げた。その後浜野が病院に運び込まれ、事の顛末について一切口に出さず、入学早々松葉杖の生活をするめになつたのを知らずにいた。

「こんなに私、わからうとしてるのに、どうして逃げるのよ」

「わかつて私、あんたと付き合いたいって言つたんだよ」

「口でちゃんと、謝るか怒るかしてくれないと、届くものも届かないよ」

いきなり貴史に

「ちょっとお前來い、話がある」

と掃除箱前に引きずられた時、何かの予感はあった。

たぶん、怒鳴られるだろう。殴られるだろうと思つていた。でも、

言い訳をしようとは思わなかつた。いつかはこうなるんだ、いつかはこういつ形で終りになるんだと、あきらめていた。

美里が割り込んできて、

「あなたのやらかしたこと、すべて知つているんだからねー」と言い切られた時、上総の中で、すべてが碎けた。

も「、この場所にはいられない。この中にはいられない。どうして泣かなかつたのだろう。一年前の自分だったら、がまんできずにしゃくりあげていたに決まつてゐるのに。言い返すことができるだけの自分がいなかつたのだろう。

結局逃げて逃げて、逃げまくつて捕まつただけだよな。 そうなつて当然だよな。

ひとしきり涙を出し尽くすまで流した。声は出さない。部屋か、土手か。誰にも見られていない場所でない限り、涙は流せない。

杉浦さんは正しいよ。俺がまともな神経を持つていたら、ちゃんと浜野たちの「好意」を受け入れて、感謝できたはずなんだ。

いつぞや、浜野の恋人である杉浦加奈子が上総に語つた言葉が今でも、耳に残つている。

「それは立村くんをみんなの仲間に入れようとしてしたことなのよ」 加奈子の言葉と美里の言葉が重なつていくような気がした。風のざわめきに耳を夫妻でかばんを抱いた。

けど、結局俺は、浜野にされたことを「好意」だなんて思えない。俺が悪いのはわかつてゐる。どうしようもない泣き虫だつたつて、テレビも見ない、普通の漫画も読んだことない、こんな奴を仲間に入れてやるうとしてくれたのに、俺はどうしても感謝、できない。

杉浦加奈子の言葉で、今まで青大附属で築き上げてきた自分の足場が崩れた。D組の人気者ふたりと仲良くしてゐるし、青大附属評

議委員として男子たちからの受けもよくなつた。すべて、青大附属にふさわしい人間でありたい、貴史、美里と同じレベルの人間なんだと思い込みたかつただけなのかもしれない。偽者が本物とうまく付き合えるわけないのに。

俺は、浜野たちを憎む権利なんてない。清坂氏、羽飛に怒る権利なんてないよ。そういう価値俺にはないから。ないんだ。

背中の汗が引いたのか、冷たく風が頬にぶつかった。背筋が寒くなる。川はひつかかる場所を何度も通つて、最後になだらかに流れていった。

背骨にクラクションの音が響いた。

振り返ると見覚えのある濃緑の自家用車がサイクリングロード沿いに止まっていた。

ちょうど今、狙いをつけて留めたという感じだった。

つややかな車。運転席と目が合つた。

父さん。

する休み、ばればれだ。時計を覗くとちょうど九時だった。二十分くらい座り込んでいたのかもしぬなかつた。泣いていると時間の感覚がゆるくなる。

運転席の父は、うちわで仰いだ風に手を揺らめかせた。来い、との意か。観念するしかない。上総は立ち上がつた。頬が熱かつたぶんおたふく風邪の患者さんみたくはれあがつていてるに違いない。

「自転車はトランクだ。お前は後ろの席に乗りなさい

怒らない人だつた。小さい頃からそつだつた。母には怒鳴られ平手打ちも数限りなくお見舞いされたけれども、父には叱られた記憶がほとんどない。むしろ間に入つてかばつてくれるやせしこ父だつた。

「あのさ、俺は」

父は首を振つてドアを指差した。

笑つてゐるでも、あきれているでもない。母がよく

「上総はお父さん似なのよねえ」

とため息をつく時、じつじう表情を自分もしているのだろう。

後ろの席にもぐりこむと、毛布がざつくつとたたまれて詰まっていた。

「寒かつたらくるまつてなさい」

車酔いしやすい上総の指定席だつた。長時間乗る時はいつも、毛布にくるまつて横になつていて。言われた通り、かばんを足下に載せてから身体を毛布で包んだ。芋虫状態で横になつた。

「言つて忘れたが、昨日、母さんから電話があつた」「え？」

「伝言だ。学校が辛いなら無理していくな。ただ、五日の日は万難排しても市民会館に来い、とのお言葉だ。以上

なんだよ、結局俺をこき使いたいのかよ。

母さんの言いそうなことだ。

「もう学校に休みの電話は入れておいたから、家で寝てなさい。もうひとつ」

父がサイドミラーを首かしげて見た。

「昨日の夕方、菱本先生と珈琲を飲んだ」

あいつとかよ！

吐き気がこみ上げそうになるのを毛布の端をかんでこらえた。

青大附属中学最大の天敵・一年D組担任菱本先生。

「宿泊研修のことを全部聞かせてもらつた。上総、質問したいんだが、いいか」「わかった

いつか報告されるとは思つていたが、こんな体調不良の時に。ついてない。

上総は首を竦めたまま、車の天井を見上げた。

「上総、お前、どうしてA組の先生の家に直接電話をかけなかつた

んだ？」

た。

△組の、まもなく退学する予定の女子たちがひつそりと別れの晩餐会を行つていた。その中に割り込もうとたぐらむ菱本先生に抗議するため、上総はあえて強硬手段を取つた。貴史が激怒し、美里が涙し、菱本先生が鉄拳を上総に食らわせた、あの事件だった。とつゝの昔に親には連絡が行つているだらうし、一度は退学も覚悟した。菱本先生の配慮で丸く収まつたことになつてゐる。少なくとも上総はあれ以来、菱本先生とぶつかり合つていない。

父の言葉はおだやかな調子で耳に流れた。

「お前のしたことは、冷静に考えてリスクが高い。上総、お前のやり方は成功か失敗かそれの方法を取つて、たまたま成功しただけだ。もつと確実性のある方法を考えるべきだつたな」

「父さん、どうこうことだよ。

わからなくななり、さうに言葉が見つからない。

「でも、一回田にしては、上出来だ」

「小学校のことも、知つてゐるのかよ。誰も、なんも、言わなかつたのに。

寒気が走つた。車がゆれ、ガソリンの匂いが咽につまる。父が細く運転席脇のガラスを開けてくれた。誰にも話したことのなかつた決闘事件。あのことも、このことも、すべて父にはお見通しらしかつた。

2 羽飛貴史は思わぬ言葉を跳ね返せない

土曜日、古川こずえと南雲秋世の間の席が空いたままなのを、貴史は目の隅に捕らえていた。机の上には来月分の給食献立、学年便り、学級通信、連絡事項、いろいろプリントが積み上げられているが、帰りには必ず引っ込められている。土曜の帰りも古川こずえが全部、机の中にしまいこんでやつてゐるからだらう。誰も授業中の

「Pマークを取つて入れてやつたりはしない。恋人たる美里が本来は担当するところなのだろうが、あえて何もしないのがあいつの性格だ。

貴史は美里と田配せして、教室を出た。

台風はとつぐの昔にぶあつい雲をかつたらつて北上していつてしまつた。代わりに汗が出そな程の暖かさが戻り、ジャケットは脱いだまま体育着バックに詰め込んだままだつた。。

美里は廊下で唇を結んだまま貴史を待つていた。かばんを軽く振りながら、

「あんたも呼び出されたんだよね」「同じく。まつたくなあ」

理由は明白だつた。なにせ火曜日の朝に立村を吊るし上げたのは、クラス全員が知つてゐる。なぜ誰も騒ぎ立てなかつたのか、なぜ南雲が割つて入らなかつたのか、貴史にも理解できない空気が流れていたのは知つてゐる。たぶん、立村が何も言い返さなかつたからだろう。四時間目までは何事もなく時が流れ、給食のパンと牛乳だけをかばんに詰め込んだ立村が教室を出て行くのを、貴史は黙つて見送つていた。南雲にいぢやもんつけられるかと身構えたけれども、あいつも無視したままだつた。つまり普段どおりつてことだ。

「やつぱり、あのことかな」

「まあな」

「でもさ、貴史。私もあんたも、間違つたこと、言つてないよね」

貴史は美里の瞳を覗き込んだ。どこまで本気なのかわからない。

口ではそう言つても、揺れている語尾ひとつで裏返しの気持ちが読み取れる。

「古川にはじやされたんだり」

「まあな」

短く言葉を切つた。廊下では生活委員会の週番連中が反省会を行つてゐる。こそこの窓際に張り付いて通り抜けた。

「貴史、あのや」

言葉が途切れ途切れだった。頷いて待つた。

「私、いじめてるって思われてるのかな。立村くんに」

何をだよ、と聞くのはやめた。美里の言葉だから、意味がすぐに通るから。わかったことを伝えたくて、上向き加減に頷いた。

「俺も同じことやってるんだ。おあいこだ」

菱本先生はふたりを見つけるなり、手招きした。今日は職員室での尋問らしい。

「腹も空いてるだろ。簡単に聞きたいんだ」

後ろからパイプ椅子を持ち出すよう指示して、座らせた。

「だいたい言いたいことわかつてるつて。先生」

貴史得意の先制攻撃だ。弱いパンチだけど、勝手に割り込んでほしくない意味をこめて。

菱本先生も言葉を飲み込んで茶色い茶をすすつた。

「立村のことだろ。みんな聞いてるだろ。他の奴の告げ口かなんかで」

たぶん、南雲あたりからな。

個人名はあえて出さずにおいた。菱本先生は膝に両手を置いた後、深くため息をついた。

「お前ら、親友だつて言つてたもんなあ」

「俺はな。美里は彼女だけど」

瞬時に隣りから強烈なにらみの視線が飛んだ。後で怒られるのは覚悟だ。

「そんなんじやないです！」

「まあまあ、わかつてるわかつてる。お前らふたりが、立村のことを心配しているつてことはよくわかつた。だから今は何も言わないでいるんだぞ。だがな、クラスの連中はそう思つていのにも事実なんだ。その辺を、今日は手短に聞きたいんだ」

「手短にこだわるよなあ、先生。もしかして今日『デートかよ』

「ちやかすなよ、まつたく」

どうやら図星らしい。独身、二十八歳。男性。彼女のひとつくら
いはいるだろ？。

菱本先生の後ろで、他の生徒たちがそれぞれうつりついていた。貴
史と美里が並んでいるのを黙つてみているもの、何話しているか知
りたそうな目で眺めているもの。いろいろいる。勝手にしろつてい
うんだ。悪いことをしているわけではないのだと、貴史はにらみ返
した。中に数人、立村と仲のいい連中がいた。耳をそばだてている
のかもしれなかつた。

「立村は決してずる休みしているわけではないんだ。火曜からずつ
とひどい風邪を引いて寝込んでいると、立村のお父さんから連絡が
あつた」

「おめでたい奴だぜ、先生。」

美里も同じ感想なのだろう。田配せしてきた。立村の場合、精神
的に壊れるとまず、身体に症状が出ることを菱本先生は気付かない
のだろう。

「だが、火曜の朝になにか、お互になかんぱちやらかしたらし
いという報告も入っているんだが、それについては本当のかな、
羽飛、清坂」

真面目だが、鋭く突つ込むとする様子ではない。

「大丈夫、交わせるぜ。」

貴史はあっさり答えた。

「いつかは言わねばなんねえなあつて思つてたことがあつてさ。け
ど、まあ、正直なところ言い過ぎたつて反省はしてるんだ。先生。
やっぱり人生経験十四年つていつのは、いろいろあるんだよなあ
「だから、人生経験二十九歳の俺に相談しきつて言つたんだ。まつ
たく、羽飛もぶきつちよだな」

あきれたように咳からため息を吐き出して、菱本先生は美里に視
線を向けた。

「清坂、お前もそつとう、溜まつてたらしいなあ」

美里は答えなかつた。そりやそつとう。自分の彼氏にあそこまで言いたい放題ぶつけたところを、あらためて省みるつてこつのはなかなかできることじやない。

「先生、美里に言つるのは酷だぜ。ここへあとで古三元こつてりしほられたらしいからなあ」

舌ににやけた言葉を載せてみた。美里が答えなくてすむよつてしたかつた。別にかばつたわけじやない。かえつてこいつの言葉で話が泥沼になるのを避けたかつただけだつた。

「古川かあ、なるほどなあ」

「立村と古川は血の繋がつていない、あねおとうじ、つて奴だからわあ」

「つまくいつた。菱本先生が声を上げて笑い出した。笑いを取れれば大抵は大丈夫だ。美里が虫歯の痛みをこらえたような顔でべそかいているのを、ちらちら見ながら貴史は続けた。

「でさ、先生。立村の様子はどうなんだよ。やつぱりあいのうじとあつてから気になつてしかたないんだ」

「だいぶよくなつてはいるみたいだぞ。生死の境をさまよつているわけではなさそつだから安心しろ。ただな、羽飛」

立村だつたら

「なんかあると菱本先生のように『だがな、立村』つて続けるのはやめてほしいよな」

と腹立たしげにつぶやく口癖だ。

貴史だつたらおとなしく聞き流す。それが一番だ。ふんふんと続けた。

「相手によつては時間がかかるのも忘れるなよ。お前たちが本当に立村のことを心配して言つてるのは俺もよくわかる。でなかつたら本当のことは言えないよな。親友だからこそ言える」ともあると思つんだ。ただ、かならずしも相手がそれを上手に受け止めてくれるとは限らないことも忘れるなよ。もし、まだこじれてしまつようだ

つたら、お前らふたりだけで悩むのはやめろよ。さつきも羽飛が言った通り、人生経験十四年のお前らと、かける2の経験をもつ俺とだったら、まだまだ修羅場の数は違うんだから。ばかにできないぞ、この差はな

にやつと笑いかけてきた。

修羅場の数か。先生。悪いけど俺も美里も、その倍修羅場を小学校で経験してるんだけどなあ。

腹がすいて死にそうなのか、それとも彼女が待っているのか、両方なのか。菱本先生はすぐに立ち上がった。

「じゃあ、今日は帰つていこう。気をつけて帰るんだぞ」

「貴重な」意見、ありがとうございました！」

結局、美里はほとんど口を利かないままだった。パイプ椅子を貴史の分もたたんで壁に立てかけるのを貴史はちらりと見て、職員室を出た。

「貴史、明日のことなんだけどさ」

ふたりきりだと重い空気が流れる。切り替えたかったのだらう。

「ああ、そうだなあ。結局何を持つていくんだ？ 藤野の喜びそつなものか？」

「うん、ゼリーみたいなすると飲み込めるお菓子がいいんじゃないかって、お母さんに言われたの」

美里もこの一週間は災難だらう。立村とのいさかいもさることながら、藤野詩子とのあまり楽しくない再会もあつたりして、相当神経が疲れているはずだ。

「楽屋、行つた方がいいよね」

「そりやあ、招待してくれてありがとくらいいはなあ」

「でも、あまり来てほしくない雰囲気だつたんだ」

言葉を濁した。そりやまあ、そつだらう。美里と藤野との関係を考えるとわからぬくもない。

「約束した以上は行かねばなんないだろ」

「でね、貴史」

お互いの言葉の裏を、よじやく形にした。

「立村くん、来るかなあ」

「だよな」

廊下で三年の男子たちと話をしている奴がいた。南雲だった。おそらく規律委員会の関係なのかもしれない。真面目な顔をした連中だった。貴史とはあまりかかわりたくないらしく、ふいつと向こうを向いていた。が、南雲だけがじいっとこちらを見つめ、返事をしろとばかりに視線を投げていた。

売られたものは、喧嘩でなくても買つのが羽飛貴史の鉄則だ。
「なんだよ、文句あるのか？」

三年の先輩たちを背に、南雲はつかつかと貴史と美里に近づいてきた。やはり、話したいことでもあったのだろう。貴史が思つに、菱本先生へ告げ口をしたのは南雲ではないかと予想していた。規律委員としての報告義務とでもいつのか。ちゃんと注意をしたのにも関わらず「いじめ」に近い行為をしていくと、つるやうと思つたのだろう。奴なら考えられるだらう。

「別に」

美里の方をちらつと見た。視線の意味が読み取れない。美里もきよとんとした田で見返している。女子にとつて南雲のようなタイプは、決して不愉快な奴ではないらしい。こうじう奴の本性を知つて奈良岡も新しい彼氏をこしらえようとしたのだろう。よい傾向だ。

「言いたいことあれば俺に直接言えよ。お前だろ。立村をいじめるとかなんとかつて告げ口した奴は。別にそれはいいぜ。俺が誤解されるようなことを言つたのは確かだからな。でもなあ

言つべきことはここできつちり片をつけるのも貴史流だ。

それが、といいたげに南雲は黙つて聞いていた。

「なあなあで付き合い続けているお前なんかとは違うんだ。言いたいことをぶつけ合つことのどこが、いじめだつていうんだ？」

「別に、って言つてるだろ」

何か言いたそうなのに口に出さない冷たい空氣。美里も危険を察知したのか、すっと貴史の側に寄り添つてきた。初めて南雲の表情に緩んだものが流れた。

「俺はただ、いつか来る時がきたんだな、って思つただけだよ」耳もとに小さくささやき声を残し、去つた。美里には聞こえないよつ氣遣つたようすだつた。

「本当にぐつぐつぐべきは羽飛とお隣さんであつて、つづちゃんでないんだつてことだな。親友面してひでえ話だ」

「南雲てめえ！」

あいつ、ぶん殴つてやる！

逃げ足の速い奴だ。南雲はすぐに三年連中と混じり、背を向けた。これで一回目だ。手を出して一発殴りつけたいと思つても、何も言えない自分が取り残される。美里が側で目をしばたいていた。

「貴史、南雲くん何言つたのよ」

「別に、だけだ」

美里とは帰り道、明日の日舞おさらい会についての待ち合わせについて話しながら帰つた。

あえて立村のことも、南雲のことも話さなかつた。

勘違いするのもいいかげんにしろよ。美里と俺どがどういう付き合いなのか、外見でしか見てねえくせに。馬鹿じやねえの、南雲。

3 清坂美里は信頼できるアドバイスを受け入れられるかもしれない

三日間、真夜中に引き出しを開けて写真を見つめているなんて、きっと立村くんは思つてもいらないのだろう。真面目にノートを取つて、いつゴローしても大丈夫なようにしているなんて、想像もしていないのである。本当に熱を出しているのだったら、ひとりで何を

考えているのだらう。

怒つてよ。文句言つてよ。でないと、わかんないよ。

いつも、泣き言を訴える先は「」ずえとなる。火曜以降どうも「」ずえとは話がしづらかつた。向こにはそれはそれほど眞にしていよいよ「」で、「おはよ、なあにふけた顔してるのはねえ。もしかしてあの日？」とつこみにくるけれども。いつも通り触れないようにして話をしているが、このままでは落ち着かない。いやだ。思い切つてダイヤルを回した。

「なあによ、もう。言つちやつたことは後悔したって始まらないよ。美里も言いたいことたまつていたんだらうし、それはそれで仕方ないよ。けどね、あれはちょっとまずいと思つたから、私はやめさせたつてだけ。美里や羽飛のこと嫌いになつたわけじゃないんだからさ。そこそこは忘れないでよね。特に羽飛には」

電話の向こから聞こえるのはやつぱりした口調。「」ずえはなんでこんなに落ち着いているのだらう。「」ずえは毎日エッチねたをかましているだけに見えながら実は鋭い。だから立村くんも毎朝「朝の漫才」に付き合つているのだらう。

「美里、かなり後悔してるんでしょ。言つ過ぎたって

「けど、私間違つたこと言つてないもん！」

電話の近くには誰もいなかつた。だから泣きながら言える。

「わかつてるよ。あんたが立村に言いたいこと何にも言つてくれなかつたつてこと氣にしてたつて。でもね、あいつの性格一年半も付き合つてればわかるでしょ。本質的にはガキだつて。ガキはね、飽きずに何度も繰り返して言わないとわかつてもうえないんだつて。うちの弟とほとんど扱い方、同じ」

「私、弟なんていないからわかんないもん。うちの妹だつてそんなことしないし」

しばらく美里はしゃくづあげながらしゃべりづけた。

「貴史だって、あの宿泊研修の時に打ち明けてもらえたことが悔しかつたつて言つてたの。私だってそうだよ。別に彼女だから言わなくちゃいけないなんてないけど、でも、もし私のこと信じてくれてたら言つてくれるもんだよね。信じてないんだよ立村くんは「そうだね、美里の言いたいことはわかるよ、けどさ」

「じずえが言いよどんだ。

「これは私の想像なんだけどね。立村つて美里とか羽飛に対してものすごく、気を遣つてるよう見えるんだよ」

「わかつてゐる、じずえに言われなくたつて」

「理由なんだけど、言いづらいなあ。これつて」

「そのくせ言つたがつてゐるんだね。わかるわかる。じずえの口調にはどこか、

「言わせないと後悔するわよ、たあ、聞く？」

とすこむ匂いが漂つてゐる。

「立村つてさあ、美里と羽飛をセットで好きなんぢやないのかなあ」
飲み物飲んでなくてよかつた。噴いてしまいそうだつた。

「ちょっと待つてよ。なんで貴史とセットでつて」

「つまりさ、私が思うに」

「じずえの言葉は、美里の想像をはるかに超えていた。

「ほら、美里気付いてたと思うけど、美里と羽飛がくつついてもかまわないって立村が言つてたこと。あいつの馬鹿さ加減にはあきれ果てるけれども、私も後で考えてみて納得したんだ。あいつうの六年の弟と精神構造おんなじだから、まだ女子のことを好きだなんて思つたことないんぢやないかつて。ところがさ、美里に告白されたじやない。人の顔色ばかりうかがう立村のことよ、まずどうすると思う？ 断つたら美里と氣まずくなるかもしれない。美里と氣まずくなつたら今度は羽飛ともそつなる可能性大だよね。そうなつたら、友だち一人もなくしてしまつわけよ。あいつのことだから悩んだと思うよ。どうしたら美里や羽飛と友だちでいられるかどうか悩

みに悩んで、結局付き合つことに決めたんじゃないかな

「『じずえ、どうしてそこまで想像できるの?』

「うちの弟に聞いたから。あいつに、もし自分がそつだつたらつて聞いてみたら、そういう答えが出てきたつてわけ」

「立村くんと『じずえの弟が必ずしもおんなじつてことないでしょ!』『じずえは笑つていい。自信あるんだろ?』衆くんを通した答えに。『でもさ、かなりの確率で可能性が高いと思つよ。美里のことも嫌いじやないけど、同じくらい羽飛のことも好きだし、ずっと友だちでいられるんだつたら大抵のことはがまんするよ。うちの弟だつたらね。私だつたら違うけど』

「けどそういうのつて、付き合つ条件と違つよ」

「好きだつてことでないとね、つてことよね。でもしちゃがないじゃない。そういう相手が好きなんだからや。それに立村だつてやつと自分が悪いつてことに気付いているかもよ。私は断言しちゃうけど、立村が三行半を突きつけることはまずない。月曜に学校に来て、『『じめん、俺が悪かつた』つて頭を下げるよ。いつものお約束』

もうひとつ、美里は疑問だつたことを尋ねた。

「『じずえ、どうしてクラスの連中、誰も私たちにつつこみ入れなかつたのかな』

「氣付かなかつたの。あれはね、規律委員様の南雲が男子連中に緘口令だしたのよ。いつものことじやない。立村が南雲と彰子ちゃんのらぶらぶ騒動の時に指示出したのと同じだつて」

「でも、なんか気になるよ。誰も反応しなかつたみたいだけ」

「南雲は羽飛と犬猿の仲だからねえ。南雲も悪い奴じやないんだけど、水と油つて奴だからさ。でも立村とは仲良しつていうのがなんとも言えないよね」

しばらく『じずえと、立村くん、貴史のことについて語りつけた。本当のことを言えば『じずえだつて気にはしていたのだろ?』。いくら貴史が間違つてこると思つても、好きな気持ちは変わらないのだから

ら、嫌われてもしかたないと悩んでいたのだろう。

「あ、こずえ、貴史ね、言つてたよ。『古川にそいつ嫌われても、しかたねえのかな』つて」

「言つてた?」

微妙に喜びの波動が伝わってきた。受話器の声がはじけていた。「やつぱりね、あいつ、間違いを素直に受け入れない奴じゃないもんね。さすが、私の惚れた男よ」

「こずえと一時間しゃべりつづけた後電話を切った。

もし詩子ちゃんに「いつ返事帰つて来たかな。

想像はついた。無条件で美里の言い分を認めってくれただろう。ためらうことなく、

「立村くんと別れなさいよ。美里は間違つてないんだから」と主張してくれただろう。

詩子ちゃんだったりきっと、美里の味方でいてくれただろう。

私が立村くんに文句言つてる時、止められなかつたもん。立村くんが青ざめてじつと私の顔を見詰めている時、気持ちよすぎたんだよ。私してたことって、そつだよね。

「こずえの言葉が正しいと、今の美里は思えた。

「羽飛、あんたやつてること、言つちやなんだけどリンチだよ。もしうちの弟が、友だちに似たようなことされてたら、羽飛だつて許さないよ」

あの時はかつとなつたけれど、四日経つた今は素直に受け入れられる。

「そうだよね、私、立村くんを追い詰めた浜野つて奴と同じこと、してたんだよね。」

美里は引き出しの写真を取り出し、両手で揉むようにさすつた。

1 立村上総の朝から昼まで

来週からくずれるらしい天気も、田曜の今日はさつぱりと晴れていた。

「上総、ほり、さつさと乗りなさいよ」

母が朝八時半に迎えに現われた。自分でバスに乗つていくつもりだつたのだけど、

「あんたに来る途中で倒れられたら段取りおかしくなっちゃうでしょ。今回だけ特別よ。全く、軟弱なんだから」

「手伝わせるんだつたらそのくらいしてくれたつていいだろ。交通費どうせ出ないんだし」

「親に向かつて言つ言葉なの？ 全くあんたつて子は「大抵母は気が立つていて。催し物が控えている日はなおさらだ。茶会の時も、華展の時も、いつも上総がパシリとしてひっぱりだされる時に、機嫌のいい日はまずない。

「どうせ制服で行けばいいだろ」

「そんなわけないでしょが。持つてないわけじゃないんだから、黒のいいスーツ着ていきなさいよ。まさか、つんつるてんになつたわけでもないでしょ。あんた背、伸びてないんだから」

人の気にしてることをよく言つよな。

言われた通り、晴れの日用の黒いスーツに着替え、ちゃんとネクタイも締めた。そこでもまた母からチェックが入つた。

「だから上総、なんで喪服みたいな格好にするのよ。ネクタイは少し遊んでいいのよ。あ、和也くん、この子に合いそうなのはない？ ほら、少し緑が入つたチェックの持つていたでしょ。あれ貸して

抵抗することなくわざわざ自分から持つてくる父が情けない。目と目が合つた。「わが身を思えばさからうな」と言いたいのだろう。過去の経験からして、受け取つて自分で締め直した。さすがに母は、「締めてくれる」ことはない。その辺だけははつきりしていた。

「それじゃあ、上総を借りていくわ。また後でね」

父は何も言わずに頷いて、見送つてくれた。

下ろしたてのワインシャツとスース、ほんのりと樟脳の匂いが残つたネクタイ。首筋から嗅ぎなれない匂いがよじ登つてくる。すぐに車の窓を開けた。助手席で外を眺めながら上総は母のお言葉を聞き流していた。

「今日は小道具大道具みな、会館の人任せてるって話だからそれほど心配してないのよ。まあその分お金かかるけどね。とにかくあんたは私の部屋で待機してもらえればいいのよ。衣装とか化粧とか順番を呼びに行つてもらつたり、花束届いたら運んだり、楽屋にたどり着けない人がいたら連れて行つてあげたりとかね」

「私の部屋つて、母さん専用の部屋あるのかよ」

「当たり前でしょ。せつかくだからつて、今回無理を言つて」

横暴極まりないよな。この人は。

たぶん楽屋の案内が中心なのだ、とは見当がついた。何度か手伝いをしているのでその辺のパターンはつかめている。女性の手伝いの方もいるのだろうし、楽屋内でうろちよろするのは、やはり気が引けるということもある。また、母の顔で「」あいさつ」にいらっしゃる方も想像以上に多いのだろう。

たぶんそのあたりをさばけばいいってことだ。

ほとんど外に出なくていいってことか。

「ところで上総、あんた風邪良くなつたの？」

初めて母は、上総を気遣うような言葉をもらした。

「もう大丈夫。今日のために学校四日間休んだから」

「そうね、今日倒れられたらしゃれにならないわ。学校なんてしょ

せん、いくらでも代えられるけれど、舞台はそうじやないからね
簡単に変更できるわけないだろ？　この人何考てるんだ？
少しむかついた。返事をせず、遠めで青く透き通つていく山々を
眺めていた。

「これだけは言つとくわ」

信号で車を止めて、マニキュアの光つた爪でつんつんと肩をつつ
いてきた。当然無視だ。

「上総、いくらでも学校なんて代えられるのよ。逃げたかつたら逃
げ出しな。でも、死んだら終りだつてことは忘れるんじやないよ
「わかつてゐよ、うるさいな」

自分の両親が友だちの親と異なる学校觀を持つてゐるのは小さい
頃から知つていた。無理に学校に行かなくてもいい。どうしても耐
えられなかつたら学校を休んでもいい。ただし勉強は家で続けるこ
と。それが条件だつた。大抵の家庭では通用しない論理らしく「ど
んなことがあつても学校に行け！」と怒鳴られるらしい。

でも、うちの親にそう言わると休みたくなるんだよな。
よくわからぬけど。うちで勉強するよりもそっちの方が楽だとか
思つてや。

「まあ、最悪の場合だけど

母はアクセルを踏みながらつぶやいた。

「住所登録だけを私のアパートにして、他の公立中学に転校とい
ふこともできるから、いざとなつたら考えときな

品川の学校に行かなくても、いいってことか。

情けないことだけど、すうつと肩から力が抜けた。断固として窓
を向いた。今の完全に溶けきつた自分の顔を、母にだけは見られた
くなかった。青大附中を退学するという最悪の場合でも、本品山中
学に編入することだけはないと母は言いたかつたらしかつた。

青潟市民会館の楽屋口に到着した。すでに人がだいぶ揃つて
いる。車を駐車場につけた後、紙袋を四つ上総に持たせて入つて

行つた。

「おはよ／＼ござります。本日はぜひお宜しくお願ひいたします。うちの師匠、まだいらしてません?」

受け付けの方に尋ねるとまだらしい。母はすばやくスリッパをふたりぶんすのこ脇の籠からひつぱりだした。

「それじゃ、まずは掃除ね。上総、ほつきとちりとり、あとバケツ持つてきて。私はお茶の準備するから」

返事をしたくないので上総も受け付けの人に、掃除用具の場所を尋ねすぐに労働体制に入った。自分を単なる働くマシンとして位置付けると、母に何を言われてもめげずにすむ。めげないふりができる。

畳二十畳くらいの大部屋が出演者の楽屋、四畳半の部屋を四部屋とつてあってそこが、会主、および他の先生たち、最後に水組み場隣りの小さな部屋がありそこだけが母の場所となるらしい。部屋といえるところではない。ただお茶くみの方がちょっとだけ腰を下ろす場所という感じみたいだつた。実際問題、上総と母が身を寄せ合つて正座する程度の広さしかない。荷物をざくつと置いて軽く部屋の掃除を行つた後、母のいい付け通りに動いた。上総が昨夜のうちに書いておいた出演者案内用張り紙をそれぞれの部屋前に貼り付けること、お茶菓子を籠に分配して部屋に置いておくこと。お弁当到着後の分配についてなどなど。かなり早口で機嫌悪げだが、出す指示そのものはわかりやすい。

本条先輩並みだな。

比較するのが本条先輩というところだけは、認めてほしいと思う。しくじつて落ち込む暇がないので、楽だつた。うつかり空いた時間ができると、忘れないことを思い出してしまつから。

羽飛、清坂氏たちくるんだろうな。

まあいいか。どうせ、俺は楽屋にかんづめだらうし。
けど、顔を合わせた時は、もう、終わりだらうな。

少しずつ現われる出演者のみなさまたちに、「おはよう」やいます。宜しくお願ひします」と一つ覚えの言葉を繰り返す。みな華やいだ着物や、裾にだけ柄の入った着物やら、背中に紋の入った着物やら、まとつて現われた。みな共通しているのは、和装ケースをはじめとして手に荷物がわんさと抱えられていることだらつ。ほとんどの場合時物だらう。

気になつた一人を探した。やはり、一番後から現われた。

「ほら、詩子、あんたがとろとろしてゐるから!」

「そんなの私のせいじゃないんだもの」

「今日は大変なんだから、機嫌よくしなさいよ」

相変わらず言い合つてゐる親子の声が聞こえた。若草色の地に銀色の模様が裾と胸元に入った和服を纏つた少女が、いた。帯は銀色の、遠くから見てもきらきら光る素材のもの。背中に亀が張り付いたような感じで結ばれていた。頭のてっぺんにくるくるとまきつけられ、鹿の子模様のりぼんで覆われていた。口紅だけが真つ赤だつた。尖らせているのがもつたいたい、と上総は思つた。

会主の師匠が現われ、パシリその一たる上総は大部屋に走つた。もちろん母の命令だ。

「先生がいらっしゃいましたので、みなさん集まつてください」

「まだ、荷物を受け取つたりばたばたしたりと落ち着かない様子だつた。ふくさに封筒を包んでみなぞろぞろと出て行く。中には着物を脱ぎうとしている人もいた。

上総は完全にその点部外者なので、出演者が集まつてゐる間はおとなしく母の部屋にこもつてゐた。母の話からすると、あとは言わるとおりこき使われればそれでいいらしいし、お弁当ももらえるらしい。自分の頭で不必要に考えなくててもいい手伝いらしかつた。そこそこが評議委員会とは異なる。楽なところだつた。

「あとは衣装さん、地方さん、顔師さん、大道具小道具さんたちにお弁当を運んでよ。ほら、今届いたから」

こつものことである。返事をしないで上総は立ち上がった。この辺はもうお手の物だ。人数分をメモした後、赤いじゅうたんの上を走った。頭の中によけいな隙間を作りたくなかった。まだ開演まで時間がある。仕事がたくさんあって、貴史や美里のことを考えなくてもいいようにしてほしかつた。

楽屋の廊下を走っているとだんだん大部屋の人々が出入り激しくなつていつた。どうやら一斉に浴衣へのお着替えが始まつたらしかつた。ふつう女子更衣室なんかを覗き込もうもんなら半殺しにされるのは目に見えているけれども、なぜかここでは違和感がなかつた。男の自分が用事あつてひょこひょこ出入りしても、誰も気にしていない様子だつた。まあ上総からしても、白いドレス姿でうろうろしている人々の群れ、としか映らないので、グラビア写真集を見た時のような心臓の鼓動は感じない。肌襦袢とそよけ、と呼ばれる和装下着でもつて構成はされているらしい。細長く畳まれた浴衣を引つ張り出し、簡単な帯で腰を結わえていた。最後に桃色、橙色、その他いろいろなうわっぱりを用意して上から羽織つていた。だいぶ落ち着いたらしくみんなお茶をすすつていた。

どうしても目が行くのが、一番奥でぶつきらぼうに膝を抱えている藤野詩子の姿だつた。相変わらずすねているのだろう。上総も正直なところ、ごもつともなことだと思つてゐる。下ざらいで母と一緒に交わしたのも関係しているのだろうが、あれ以来ずっと詩子は上総をにらみつけてくる。どうしてかわからないけれども、怖いのでもうつむいて目を合わせないようにはしてゐる。母と繋がりのある人々とは不要な会話を交わさないようにしておくれのが、わが身を守る方法だ。

上総としては決して彼女が嫌いなわけではない。同じクラスだったら、たぶん近寄らないタイプだらうと思つけれども、あいさつはするだらう。清坂美里の友だちらしいとも聞く。たぶん、それなりに会話を交わしたりはできだらう。あくまでも、学校では。

でも、こつたん日本舞踊というフィルターがかかると話は変わつてくる。上総にとつて、母の繫がりで垣間見る「日本伝統芸能」の世界は、やはり嫌いではないし、むしろ面白いと思つ。三味線や鼓の響きも、洋楽のロック系のものよりはなじみいい。あまり人には言えないけれども、はるかに心が楽な音楽の系統だ。しかし、一度その幕がかかると、ふつうに会話できる人々がどんどん遠くなつていく。決して先まで進んではいけない、といつ大きなたて看板が目の前に見えるような気がする。

その典型が藤野詩子だった。

たぶん同じ年だろう。でも、お互に会話を交わすことと頑なに拒んでいた。できればこのまま一切口を利きたくない。嫌いだからではなくて、この空気の中では繫がりを最低限のものにしておきたい。それが関係を保つていく唯一の方法ではないだろうか。他の日本舞踊関係の女性に対してもそつだけれども、特に、藤野詩子には強く感じていた。

ただ、

あの衣装は、辛いだらうな。

下ざらいでちらつと見た清元「玉兎」の衣装だが、袖なしのちやんちやんこみみたいなものを羽織り、膝くらいの着物をきつちり纏い、頭には耳鉢巻をつける。兎の耳がついている。鬘は時代劇のちゃんまげを小さめに結つたような感じだつた。下ざらいだから化粧はしていない。なおさら違和感があつたのかもしれない。

あとで母に聞いたところ、本来は金太郎がしているようなひし形の「腹掛け」に、「肉じばん」と呼ばれる下着のようなものを着るのだそうだ。足首のないタイツのようなものを履いて踊るのが正式なのだが、

「やはり女の子だからね。着物にしたのよ」

のことだつた。自分が藤野詩子の立場だつたら卒倒するだらう。見る分には面白いと素直に思うけれども、ただもう少し。

他の子が、振袖のかわいらしきのを踊つてゐるんだからさ、

もう少し演田なんとかならなかつたのかな。その辺の事情よくわからぬけどさ。

上総はぼんやりと、藤野詩子のむくれつらを眺めながら思った。

「そろそろ本番ですよ、みんな、髪の毛解いて顔洗つてきて。羽二重してちよつだい。ほら、化粧落としておいてよ。早くしないとあなた順番先でしょ。ほら、詩子ちゃんも顔を洗つてらつしゃい」順番としては「玉兎」はかなり前だった。お名取さんたちが入門の順番からか後ろに回つてゐる。プログラムの構成らしいが、その辺もよくわからない。

「わかりました！」

返事をしたのはお母さんだ。かなり、娘の初舞台とあって血が頭に昇つてゐるらしかつた。娘を叱り、他の人にはペコペコしつつも、やはり上総の母に対しては心穏やかならないものがあつたのだろう。あの人は敵作るからなあ。

樂屋にたどり着くのに迷いつづけるお客さんたちを案内したりしてこるうちに時間はどんどん流れていつた。「浅妻船」「お染久松」「藤娘」「屋敷娘」それぞの扮装が出来上がつていく。まだ鬘を被つていないので頭だけ紫色の布で隠したお坊さんに見えた。廊下をつるつるしつつ、椅子に座つてゐる姿を眺めているだけでも笑えた。

十一時開演で、序は師匠の「北州」から始まつた。らしい。順番としてはあと、四番ほどで藤野詩子の出番「玉兎」だ。十一時過ぎだろ。

手の空いてゐる時に食事を終わらせて起きたかった。

「母さん、どうせこれからもつと混むだらつから、俺も弁当食べていいかな」

「そうね。まあ落ち着いてきたし、樂屋にあまり男がつらつくのも機嫌よくない子いるらしきしね

「なんだよ、その言い方さ」

自分が気が気にしていたのだが、母は無視していたのだ。いきなり文句を言われても困る。

「いやね、あんたなんかを男だと思つてゐる子じゃないと思つたんだけどね。やはりお年頃の子がいるといろいろ面倒よ」

やつぱりな。

出所はたぶん藤野詩子あたりだらう。それとも大学生のお姉さんたちだらうか。いつもながら向けられた視線を思い返して上総はため息をついた。誰がときめくかって。

「じゃあ悪いんだけどあんた、ここで荷物見ていてくれる？ 新名取の子の面倒見てこなくちゃいけないし、しばらくは他の子も手伝ってくれるから。どうせあんたにはこれから荷物運びとかなんとかいろいろあるからね。そつそつ、私宛てになんか届いたら。まあそういうことはないと思うけどね。預かっててくれる？」

すでに部屋には、和楽器と洋楽器の「ララボレーシヨン関係で繋がりのある方から、大きな蘭の鉢植えが届いていた。ちゃんと部屋に飾られている。

「わかつた。どうせ上手の方にいるんだる。用があつたら呼びに行く

お盆にかつサンドのつつみを置いてくれた。

戸口には「時計」と、母の苗字が張り出されていた。「立村」でないところがみそだ。荷物運びも大変だらう。帰り、「この蘭の花、どうするつもりなんだらう。花に話しかけてみた。

「なんか、俺つて馬鹿だよな」

あつという間に弁当を平らげた後、誰かがふすまの前に立つてゐるような気がみそだ。よくあることだ。母のお客さんだらうか。お祝い持つてきたりしたのだらうか。

「すみません、母は今、上手の方に

言いかけて、息を呑んだ。ふすまを滑らせた手が止まつた。

「……羽飛」

制服姿の貴史が無言で立っていた。そこまでが上総の記憶だった。あとは覚えていない。一発、頬に張り手が飛んできた。倒れる瞬間にすばやくふすまを閉じたので、たぶん誰にも気付かれなかつただろ。もちろん貴史も敷居をまたいで部屋に入つてきている。ふたりきりで、初めて対峙した時に上総は覚悟を決めた。

「うなつて当然なんだ。

2 羽飛貴史の脣下がり

開場三十分前には到着していた方がいい。そう親たちにも言われた。正式な格好をするよりも、制服で出かけた方が一番無難だとう姉の意見ももつともだ。やたらと襟のきつきつなワイシャツや、丈の短くなつた小学校時代のスーツとか、そんなものよりも楽な方がいい。美里には、

「あんた、なんで制服なんかでいくのさ。全く、あんたつてば洒落つ氣ないんだもんね」

とあきれられた。美里の格好はとつうと、予告どおりひらひらしあつすねずみ色のワンピースだ。ちゃんと胸に白い花までつけてきた。そこまで気合入れてめかしこむ必要あるのか、と貴史の方が尋ねたかった。もっとも美里のことを良く知つている貴史としては、下手なことを口走つたら自分の身が危ないのでよけいなことは言わなかつた。

ふたりともあえて、口には出れない。

あの場所で、誰に会うのかも。

プログラムを見ると、演目の四番目に藤野詩子の「玉兎」が載つている。日本舞踊については全くわからないが、やたらと漢字ひらがなの羅列という印象が強い。どうせ、途中で何か食つてロビーで寝てればいいだろう。美里は美里なりに藤野のところへ行く用事があるかもしれないが。

到着して、楽屋に向かうまではそう思つていた。

「じゃあさあ、貴史、先に詩子ちゃんといふに行つてくるね。あんた、その辺にいるよね。まだ始まつてないしね」

めかしこんだ美里は、手鏡らしきものを取り出しこうこう表情をチェックし始めた。

「顔しつこく見たつてよくなるわけでもねえのに」

「つるさいわね。あんたの方こそもう少しもな格好しなよ。ほんつとあんたつてば」

ぴしゃんと叩かれた。痛くはない。

「じゃあ、俺もその辺でジュース飲んでるぜ。しつかしの辺つて暑苦しいよなあ」

チケットと引き換えにもらつた「志遠流おさらご会」のプログラムを開いてすぐに閉じた。

ロビーにたむろする集団はみな、着物を纏つた女性ばかり。年齢層は広い。帯を平たくたたんで背中にしょった人もいれば、金銀の布でこしらえた亀みたいなものを背中にくつつけたきれいな人もいる。ただみな、髪の毛を上にあげているので顔の分別がつかない。みな同じ人に見える。またやたらと頭を下げて「本日はおめでとうございます」と繰り返しているのが謎だつた。手には複数個の紙手提げをぶら下げ走り回る人もいた。いつだつたか鈴蘭優ちゃんのコンサートで来たことのあるロビーとは雰囲気が全く異なつていた。あんときもなあ。楽屋の入り方つていい方法ないかつて話してたんだよなあ。

楽屋？

キーワードがぴたつとくつついたような気がする。

同じ年代の連中がいないかどうかをぐるつと見回し確認した。もしかしたら。

美里が向かつた先も、楽屋のはずだつた。美里の推理が当たつてゐるとするならば、そこにはもうひとり美里の会わねばならない奴がいるはずだ。四日間姿をくらましている相手がいるはずだ。

立村、いるのか？

頭の中にある鍵穴に、ぐいと入った鍵。

行動するスイッチが入った。

楽屋だな。言い訳すればいいか。美里が戻つてこないからついてきたつてことにするか。

貴史は制服のネクタイを結び直した。襟のところだけを指でなぞり、はみだしてないか確かめた。完璧だ。学校では絶対にしない、完璧な違反なしの格好だ。「非常口」のランプがついた目立たない入り口を探し、着物姿の女性群にくつついていった。やはり楽屋へ向かうのだろう。その辺貴史は嗅覚がするどかつた。

「靴を脱いでください」と張り紙されているけれども、前の女性軍団は無視してぞうりのままあがつていつていった。当然貴史も真似をした。幅一メートルくらいはある通路、ちょうど舞台の袖が見えた。横にはスポットライトやちゃらちゃらした花飾りとか、天井からぶら下がつていた。中にはすでに、鬘を被つた時代劇の女優さんっぽい格好の人が椅子に腰掛けていた。椅子って言うのがなんだか妙だ。また黒い忍者の格好をした人が顔を出してうろついている。時代劇の撮影現場つてこんな感じなのだろうか。できれば大正時代の卒業式っぽい格好を、ぜひ鈴蘭優ちゃんにしてもらいたいと思つた。まかり間違つても美里には似合わないだろう。それだけは断言したかつた。

着物女性軍団についていくと、やがて突き当たりに辿りついた。途中、藤の花を背負つて黒い帽子のようなものを被りポーズをとっている場所にぶつかり驚いたりもした。記念撮影を、どうやらここでは廊下で行つているらしい。藤野かもしれない顔を覗いたが、真つ白く顔を塗つてある意味お化けじみた雰囲気だったので判断はできない。たぶん「藤娘」ではなかつたような気がした。

「きれいねえ、やつぱり『藤娘』はいいわよねえ」

美人がやればな。

ようやく樂屋らしい匂いが漂ってきた。大部屋、小部屋、色々並んでいる。戸はあけっぱなしのところもあれば、きっちりと閉じている部屋もある。とにかくうるさいことだけは確かだつた。なんでここまでガキの声がうるさいんだろう。またすれちがつた時代劇扮装の人を眺めながら、美里の姿を探した。かなりめかしこんできた美里でも、この環境下ではありんこレベルの認識しかされないだろう。

かわいそうな奴だ。まったくな。

大部屋に向かつたのかもしれない。一瞬足を留めた。湯沸し所らしきところの壁に、一枚紙が貼られていた。

もしかして、これつてな。

「時辻」と、見慣れた文字が並んでいた。

美里、見たのか。

この前、「コピーしてくれた立村のノートにも、同じような筆跡が残つていたはずだ。力が抜けたような、見ただけでは絶対に男の書いた文字だとは思えない書き方。習字の時間も文字だけはきれいだと讃められている。時辻という苗字が仮に、立村だとするならば。奴はいるのか。

躊躇する暇はなかつた。美里もいなかつた。部屋の前には誰もいなかつた。

「すみません、母は今、上手の方に」

立村の声だつた。四日ぶりに聞く、か細い声だつた。

器用な奴だ。敷居をまたいだと思つたとたん、真横のふすまが自動ドアのように閉まつた。自分の手が奴の頬を張り飛ばしていたのは条件反射だつた。

密室を作つてしまふ立村、こいつはやはり普通じやない。なんだか気が抜けて貴史は立村を見下ろした。

「なにびびつてるんだよ」

一言だけつぶやいた。伸ばした片足を立てて座りなおすよつじして、立村は貴史の顔を見上げていた。静かだったが、貴史のぶつけた本気らしきものは「痛み」として残っているはずだらう。

痛いなら文句を言えぱい。

怒鳴ればいい。殴り返せばいい。

反応してほしかつた。

やはり立村は指先で頬をさするだけで何も言わなかつた。ぐつとうつむき、片膝をかかえていた。側には食べ終わった紙の弁当の空箱が放り出されていた。食事でもしていたのだろう。四畳半もない小さな部屋には、蘭の鉢植えやら、紙の手提げ袋やら、格子のボストンバックとか、荷物だけがごちゃっと詰まっていた。立村ひとりでいるわけではないということが伺えた。

「どうして來たのかつて、聞かねえのかよ」

返事をしない。だんまりを決め込もうといつにいつのやり方だろ

う。いらだつた。ねめつけた。

「どうしてなんも言わねえんだよ」

やはり外に声が漏れるのはよくない。閉じられたふすまに響かな

いよう、貴史は言葉を押さえて続けた。

「時辻つて苗字じゃねえかつて美里が言つてたから、もしかしたらつて思つたけどな。ここまでぴつたりだとは俺も思わなかつたぜ」

息を呑んだように立村が顔を上げた。

「お前の母さん、時辻つていうんだろ。この前、廊下ですれ違つたきれいな人だろ」「

答えなかつた。視線を蘭の花に向けていた。

少し耳がはもつているように聞こえた。耳の穴を指先でほじつた。自分の声が、なぜかいつもと違つっていた。もう一度立村の目を見つめ返し、つぶやいた。

「お前と田の感じ、おんなじだつたから、一発でわかるつて」

無言でうなだれたまま、唇を噛んでいた。けど、逃げ出さなかつた。うつむいて、貴史の言葉を受け止めている。動こうとしなかつた。

た。嘘ではないということだけが伝わった。

こいつの答えかよ。一年以上かかってやつとかよ。

初めて貴史は自分のことばがたいらなまま、立村に伝わったことに気付いた。

俺が最初から言えばよかつたんだな。こいつには。

俺が、先回りして言うしかねえんだな。こいつには何を言つにしても。

美里も早く気付けよ。そここんとこ。

たぶん南雲がさわやいた通り、立村は美里と貴史がカッブルになつたとしても、抵抗なく友だちでいられると思つていいのだろう。周りでもそう思われているのだから、神経過敏すぎる立村のことだたぶん、自分を守る価値がないと、思い込んでいるに違いない。。

白状しろってどんなに責めたつて、こいつには通じない。こいつには、俺のやり方が通じないんだ。だつたら、どうする？

立村をはたいた時に残つたちりちりした指の痛みが、温もりに代わってきたような気がした。

こいつが貴史の求める返事をすることはまずないだろう。そういう奴だ。教室で問い合わせても、美里に激しく罵られても、奴は内にこもるだけで何も言い返さなかつた。今この場にて、思う存分殴りつけて言いたいことを怒鳴り散らしても何もしないだろう。明日以降も相変わらず冷たい態度で通すだけだろう。貶められることに立村はきっと、慣れている。怖いと思つていないのであ。

そういう立村のことが貴史は腹立たしかつた。宿泊研修の時も、その前の前の時も、何も相談してくれなかつた立村のことが許せなかつた。でも、そのやり方しか知らない立村を責めることはもうできなかつた。目の前で言葉とは違う返事を返して、これからどうすればいいか内で悩んでいるらしい立村を見ていると、追い詰めるのではなく、おびきよせる。怒鳴りつけるのではなく、話し掛ける。

真つ正面からでない言葉を用いて、それでもつながりたかった。
そう思える奴は立村以外今までいなかつた。今でもひとりだけだつた。

大人になるしか、ねえのかよ。

貴史と美里に問い合わせられて言葉が出なくて能面状態だった立村を、今まで通りにひっぱりだしてやりたかつた。貴史は深呼吸した。自然と気持ちがやわらいでいった。口を尖らせて息を吐き出した後、続けた。

「立村、さつきは」めん。つてか、この前も悪かつた。俺も、美里も、言い過ぎたって思つてゐる
おそるおそるといった風に立村が貴史を見つめた。おびえているのがまだ見え見えだ。

「ぶつちやけた話、宿泊研修の時、なんで俺に話もちかけてもつと別のやり方考えなかつたのか、それが腹立つてただけだ。俺だつたらクラス全員を味方につけて、狩野先生に電話をかけて、とにかく最後まで菱本先生を説得したと思うんだ。お前と菱本先生は天敵同士だから俺が代わりにやつてもよかつたと思つ。俺そういうのは得意だからなあ。けどな、立村」

学校では絶対に言えない。美里がいる場所では決して口にできないうことを、さらにつなげた。

「お前、言えない性格だよな。そういうこと。俺の方が気付けばよかつたんだよな」

小さく首をふるしげさをする立村へ、貴史は落ち着いたまま話しあげた。

「もしな、もしかしてだけどな、友だちなくしたくなくて美里と付き合つてゐんだつたら、そんなのやめたつていいんだからな。俺は誰とくつついても、お前と友だちやめようなんて思つたことねえからな。お前らが別れても美里と友だちでいるのやめるわけねえし、たぶん美里だつて、同じだと思うからな」

かぼそい声が、立村の口からもれた。

「「めん、羽飛」

「あやまるのは俺の方だ」

初めて気付いたかのように立村は頭をもたげた。美里のことを忘れていたのだろう。「きよ」と小さくつぶやき、改めて、

「清坂氏、来てるんだろ?」

ふすまの方を指差した。

「今じろ楽屋探してうるうりしてる」

手首の時計を覗き込み、立村は側にほおつていたプログラムを広げた。

「藤野さんに会いにか」

「ああ、あいつと藤野、小学校の頃いろいろあって、喧嘩別れしてるんだ。たまたま招待されたらしくて俺もセツトで来るようになるとわかれちまつてさ」

あまり詳しいことは話さなかつた。

「だから、一応付き合いで来たつて感じみたいだなあ。とりあえず挨拶について、先に楽屋に行つたんだ。けどこの辺にはいねかつたみたいだし」

親指であの先をなで、立村は立ち上がつた。いつもクラスの教壇に立つて、ロングホームルームの司会をしている姿に似ていた。何かをしようとしている奴の、前座の気配だった。

「藤野さんの順番からすると、そろそろ準備でばたついてるはずだ。舞台が終わつた後の方がいいんじゃないかな」

「舞台つて、なんだよ。俺その辺わからねえけど」

「清坂氏がいたら、そろそろ客席に戻るようになつた方がいい。舞台終わつてから改めて楽屋に来た方がいいと俺は思うから。その方が藤野さんも落ち着くと思う」

もう、貴史に殴られてうなだれていた姿は残つていなかつた。貴史を見下ろすようにして、頷いた。

「本番前的人は、大抵そつだけど緊張しているんだ。そういう時に
よけいなことをされたり、さつきの話じやないけれど清坂氏と藤野
さんに何かがあつたんだつたら、かえつて迷惑になると思う。だか
ら、終わつたら俺が連れて行つてもいい。羽飛、悪いけどさ、その
辺を頼む」

「俺じやねえだろ、先はともかく、今はお前、美里の相手だ」「
貴史も立ち上がつた。南雲のささやいた言葉を振り切るよつて」
「どつちにころぶにしろ、立村、美里と決着つけて来い」

いきなりふすまが開いた。見覚えある大きな瞳の女性が立つてい
た。

「あらま、どうしたの上総、お友だち？」

あの日すれ違つた年増のべっぴんさんそのまんまだつた。髪の毛
を上げて派手な化粧をしているところは、日舞系の人と思えなくも
ないけれど、目だけが違う。らんらんと輝いているところ。絶対に
これは立村と血縁関係にある奴だと断言できる。頭だけで貴史はお
辞儀をした。

「あの、母さん、あのさ」

どもるように言葉をつなげ、立村は貴史の方を見た。

「俺の、青大附中の友だちで、羽飛くん。さつき別の友だちのあい
さつで、ここ見つけてくれたんだ」

「あら、上総のお友だちね。偶然ねえ、この馬鹿息子と付き合つて
つて大変かもしれないけれど、どうかこれからも面倒見てやつてね」「
膝に手を握り締めたまま、なぜか立村の顔は真つ赤に染まつてい
た。目をすぐにそらし、歯をかみ締めているようすだつた。ただ、
貴史を紹介してくれただけなのに、なぜこんな様子なのだろう。

なんでそんな無理なことしてる顔してるんだよ、立村。

つぶやこうとした。でもやめた。

きっと、立村には「これだけでも辛いことなんだらうなあ。俺
には想像全然つかないけど。

「いや、じつにいつも、お世話になつてます。はい」「いきなり貴史の腕を掴み、立村は部屋から引きずり出せりとした。ずっと座っていたのでふらついた。足が痺れていた。

「なあによ、上総。せっかくだからお弁当持たせてあげなさいよ」つむを言わさずに銀色の小箱を押し付けられた。両手に納まる程度のお上品な箱だけじずつしりしている。立村の母らしきべつぴんさんは、明らかに貴史に聞こえるような口調でわざわざいた、「あんた、まともな友だちがいるんじゃないの」

「つむさいな、こんなところで言つなよ」

明らかにこの一人は親子である。もうじつペんぺこつと頭を下げた後、貴史は立村に引きずられるような格好で部屋を出た。

1 清坂美里は楽屋にたどりつけのか

異様な熱気は学校祭の直前、全校集会、体育祭に似ている。美里が楽屋の中を覗き込もうとしたとたん、紫色の布で頭を坊主に巻いた人がぞろぞろ出てきた。一人は紫の矢絣に振袖、また浴衣姿でくつついていく人もいる。

なんか可愛いけど、頭が変。

顔を白く塗り、口紅が赤い。目の周りを縁取りしている。舞台の席から観るとそれほどでもないけど、近づいて見るもんじやないと美里はつくづく感じた。

手元のお菓子をぶら下げたまま、美里は立ち尽くしていた。すぐに詩子ちゃんのところに行くつもりでいたのだが、どうもそれどころではなさそうだ。みな同じ浴衣に着替えていて誰が誰だかわからぬいし、怒鳴つている人いるし、とにかく美里が入り込む隙間なんてない。と思つたら、後ろで、

「すいません、ちょっとどいてください」

と、誰かが花束を抱えて美里を押しのけた。失礼な、とにらもうとしたら、無地の深い青の着物姿の女性がつかつかと楽屋内に入つていつて別の誰かに花束を渡していた。かなり強引だった。

どうかなあ、行つた方いいかなあ。

見えないように廊下の壁に背中をつけた。真上にはきれいな文字で「出演者控え室」と習字の文字で書かれていた。女性らしい文字だった。中にはちゃんと「藤野詩子」が入つていた。たぶんここだろつ。

詩子ちゃんに会つのも目的だが、美里にはもうひとつ確認したい

ことがあった。

立村くん、いるよね。いるに決まってるよね。

何気なく目配りしてきたつもりだったたけれども、見慣れた瘦せ型の少年は見かけなかつた。どこにいるのだろう。やはり体調がよくなくて今日は来なかつたのだろうか。四日間熱を出していたということならば、考えられないことではないけれど、でも。

立村くん、いるよね。

会つてどうするというのだろう。自分でもわからない。美里も、立村くんに会つた後何をすればいいのだろう。後味悪い火曜のこと。こずえも、「口にしたことはしようがないじゃない」と笑ってくれたけれども。簡単に許してくれる人ではないような気がする。いつもおだやかで、何を言われても「俺が悪かつた、ごめんな」と許してくれるかもしれないけれど、それ以上にもつと重たいものを突きつけてしまつた美里を、果たして許してくれるだろうか。

いや、許してなんて思つてはいない。確かに美里や貴史が立村くんにつきつけた事実は、嘘がひとつもないのだから。立村くんが素直に宿泊研修のこととかを話してくれれば丸く收まるのだ。どうしてだろう。いつも本当のことを言わないで逃げる理由がわからない。許さないなんて言つてないんだよ。私、立村くんのことわからうとしてるんだよ。どうして。

顔を合わせたらまた罵つてしまふんだろうか。ひとつひとつ、立村くんがかくしてきたであろうことを並べ立てた時、不思議に感じた優越感が気持ちよかつた。こずえに止められなかつたら永遠にしゃべりつづけていたかもしれない。押えていたつてことはめちゃくちゃ苦しかつたのだと、あらためて美里は感じた。

会つたら、どうしよ。う。

田の前を通り過ぎていく派手な衣装の女性たち。みな華やかだ。「いつらつしゃい」と声をかける人々、拍手で迎える人々。さまで。髪をつけて一気に、お人形らしく仕上がつた人々が背を向

けていく。どうやら舞台に向かうらしい。詩子ちゃんの出番をプログラムで確認した。

最初が「北州」で、次が「屋敷娘」、次がええつと「お染久松」、次ね、「玉兎」つて。どんなきれいな着物着るんだろう。見たいなあ。

きれいなものが大好きな美里にとつてはひとりひとりの衣装を見ているだけで飽きなかつた。すうつと桃色の着物に桃太郎の装束めいたものを来た人が通り過ぎていつたのに気付くのが遅れ、思わず声を上げた。

「詩子ちゃん？」

ちらりと、白塗りの顔が美里を射た。

表情は隠されているけれども、笑顔ではなかつた。

足首より短いピンクの着物に、ちゃんちゃんこのようなものを羽織つてている。さつき通り過ぎたお嬢様たちにくらべて軽そうな衣装だつた。いや、それ以前にこれつて衣装なのだろうか。鬘にかんざしがひとつもない。代わりに猫の耳に見える鉢巻を締めている。

「玉兎」か。つてことは、あの鉢巻、つて、兎の耳？

詩子らしいその人は、無言で樂屋に入つて行つた。お母さんらしい人が慌てて風呂敷を抱えて、詩子を追いかけていつた。美里には一切気付いていないようすだつた。歓迎されていない客、あらためてそう思つた。手元のお菓子包が重かつた。

私、来るべきじやなかつたのかな。來たらいやがられるつて、わかつてたのにね。

おしおいのにおいが漂う中、美里はそつと樂屋の中を覗いた。詩子らしき兎の耳をつけた人は、パイプ椅子に座つてストローでジュースを飲んでいた。背が高いし、このくらいだつたらたぶん間違はないだろうと思う。しかし、あの格好はいつたい。

詩子ちゃん、もつときれいな格好するんだつて思つてた。もつと振袖のひらひらしたの着て、かんざし一杯つけて、可愛い格好するんだつて。今のだつて似合つてないとは思わないけど、でも。

ずっと美里の頭に浮かんでいた羽子板のイメージが消えていた。白塗りできれいだったけれども、美里の美学からすると、今ひとつものたりなかつた。

挨拶だけして、帰ろう。

入ろうとした時だつた。

何？

左手の手首を誰かが押さえるけはいがした。

「え？」

振り向いた。黒いスーツ姿の、見慣れた人がそこにいた。か細い折れそうな姿でいた。

「立村くん？」

手首を握られていた。軽く引っ張られ、美里は樂屋から自分が離れていくのを感じた。違う人だつたら手を振り放すだらう、怒鳴るだらう。失礼などわめくだらう。でも、いえなかつた。美里は立村くんの背を見たまま、黙つて廊下の奥に引きずられていくだけだつた。すれ違う人がげげんそうにふたりを見ているのがわかる。体が火照つた。手首からカフスの布を通して感じるのは、確かに立村くんの温もりのはずだつた。一度だけふれたことのある、指先の温かさのはずだつた。

「りつ、りつむらくん、あの」

この前怒鳴りつけた時の勢いなんてどこかに飛んでしまつた。腕のゆるやかな温もりが怖くて、従うしかない。やがて立村くんは美里を舞台脇に連れて行つた。真横には三味線の音が鳴り響き、マイクでさらに膨らんでいる風に聞こえた。黒いカーテンが三枚、上には紫色の花のれんみたいなものがぶらさがつていた。マイクを持つて指示をしている人がいた。舞台の真ん中でしゃがみこんだり立ち上がつたりしながら鞠つきの真似をしている、矢絣の着物を着た人が見えた。

美里が立ち止まると、立村くんも少し手を緩めた。慌てて振り払

つた。

「なにするのよいきなり」

「悪かった」

短く答え、立村くんはもう少し近くに来るより皿で指図した。ふうっと通路口の扉を視線で追いつめよう。

「藤野さんに会いに来たのか」

「やはり知ってるんだ」

ずっととぼけていたくせに、ここになつて認めてくれたのか。もう遅すぎる。でもなんで。心に言葉が飛び交う。喉が長く伸びておなかに届きそうだった。

「今は客席で見たほうがいい。直前はみんな緊張しているからそつとしてあげた方がいいよ」

「わかってる、けど」

「終わつたら、ここで待つてるから」

立村くんは表情を荒立てず、でもつむを言わせぬ口調で美里を見つめた。

「待つてるつて、ここで」

「ここに入り口まで、羽飛に連れてきてもらえよ」

動かないと今度は無理やり腕をひっぱられるかもしない。温みが蘇つた。美里は射すくめられたまま頷き、唇を噛んだまま出口まで走つていった。立村くんは背を向けたままだつた。靴を履きかえる時振り返つた時も、そのままだつた。

立村くん。

扉を閉め、観客たちのざわめきに包まれて美里は我に返つた。

また入れ違いで着物姿の女性たちが戸口に吸い込まれていく。拍手が客席の扉から聞こえた。たぶん矢絣の人が踊つていたものが終わつたのだろう。立村くんが言つとおり、次は詩子ちゃんの出番のはずだ。

貴史、どうしているんだらう。

着物軍団の人々と違つて、貴史の格好は青大附属の制服姿で立つてゐるはずだ。明るくなつた客席に戻り、ひとり、またひとりと顔を覗いていた。ちょうど後ろの席に、くわつと口を開けて寝てゐる奴がひとりいた。ネクタイがまがつてゐる。制服姿、ひとりしかいない。たぶん奴だろ。美里は後ろから近寄り思いつきり両肩をマッサージしてやつた。飛び上がるのが面白い。

「おい、お前、何するんだつつのー。」

「こんなところでいびきかいしてどうするのさ。次だよ、次。詩子ちゃんの番だよ。」

「しつかし日本舞踊つてさあ、死ぬほど眠いよな。今も気が付いたら寝てたもんなあ」

幸い、周囲に座つてゐる人はほんどいなかつた。みな、前の席に固まつてゐるらしい。しかも、演目が終わつたとたん、みな手提げやら花束をぶら下げる出口に急いでいる。みな、一曲終わるたびに人が入れ替わつてゐる。

「ところでなあ、美里

「なによ」

「お前、藤野に会つてきたのか」

手にもつたままのお菓子包みに目を留めたらしい。

「楽屋で見たけど、口利いてくれなかつた。衣装着てたけどね」

「衣装つて、あんな袖の長い着物きてか」

「ううん、桃太郎みたいな格好してた」

噴き出した貴史を軽く叩いた。

「失礼だよ。笑いたくてもわらつちやダメだよ。でもさあ、詩子ちゃん背が高いし美人だから、白塗りしてもすつじくかつこよかつたよ」

「兎のぬいぐるみでも着て、ライダーショーみたいなことやるのかと思つたぜ」

「かもね」

まだ、貴史には言わないでおこうと思つた。だんだん上方の方のラ

イトが薄暗くなつてきて、お互ひの表情が読めなくなつてきた。だんだん真つ暗になり、扉の端にある非常口用のライトだけが縁に光つていた。美里はそつと、わざわざ立村くんが握り締めてくれた部分を同じようにふれてみた。

あんな時に、あんなこと、しなくてたつて。

美里が振り払つた時も、立村くんの表情は変わらなかつた。ちつともおどおどしていなかつた。ずっと静かに、何を言われても平気のへいざつて顔をしていた。いつもああだつたらいいのに。

ほんとに、いるのかな。

黒いスーツに身を纏つた立村くんの姿は、黒子のように周りに溶け込んでいた。自分が浮き上がつていた。美里は幕が開くのを待ちながら、見えるはずもない立村くんの姿を左手の方に探していた。

田の前に広がる舞台は青い背景に、大きな田。

さつき見た、耳つき鉢巻をしめた桃色の着物姿の少女が、白い顔のままぽんと跳ね上がつた。

隣りで思いつきり笑いをこらえてうずくまつている貴史をつねりながら、美里も下を向いた。

立村くんも、あの場所で見ているのかな。

本当に、待つてくれてるんだろうか。

笑えるのは舞台を見ている時だけだった。美里は指でわつかを作り、立村くんのふれたカフスのあたりを握つた。そうすると、切なくなれるから。

幕が下りるまで、笑えばいいのか感動した振りをすればいいのかわからず、美里は貴史とふたり、ひそひそさせめきあつていた。拍手はもちろんしたけれども、雰囲気からしてあまり長くぱちぱちしててもよくなないみたいだった。

「日本舞踊って、なんか想像してたのと違うよね」

貴史も顔を瞬間、しかめて答えてきた。

「なんつてか、テレビのバラエティ見るみたいだつたよなあ。寝ないですんだのはいいけどなあ」

華やかといえば華やかだ。顔を白く塗つて桃色の短い丈の着物、袖が短くて桃太郎のようなベストっぽいものを着ていた詩子ちゃん。決して似合わないとは思わなかつた。顔が凜々しくて、かつこいいと思う。でも踊りの内容はやはり、足を広げたり、かちかち山の真似をしたり、「これあいあいさあ」とか意味不明の台詞を叫んだり。美里の知つている詩子ちゃんのイメージではまったく、なかつた。もちろんこれが「新しい詩子ちゃんの一面よね」と心ときめけばよかつたのだが、日本伝統文化にもともと向いていない自分の感覚だ。

なんか、変。

これしか感じられなかつた。

「ねえ、これから楽屋行くけど、あんた、どうする?」

「ひとりで行けよ。どうせ俺は藤野に嫌われるしな」

「まあね、じゃあ貴史、ロビーでうろうろしててよ。どうせすぐ戻るもん」

「ちなみになんつて感想言うんだよ。お前まさか、大爆笑で死にそ

うでしたとか言つんでないだろな。俺だつたら」

「あんたにだつたら言つかもしれないけど、私だつてそこまで馬鹿じゃないわよ」

呆れ顔の貴史。手元に銀色の小さい紙箱を取り出している。何か食べ物らしい。中から同じく銀色に包まれたお菓子のようなものを取り出していた。あとで分けてもらおう。おなかすいた。

「じゃあ、行つてくる」

何か言いたそうに貴史は銀紙包を広げていたが、

「別に、遅くともかまわねえよ。俺も食い物食つてるしな
食い意地の張つた奴である。

ふたりでロビーに出た後、美里ひとりでさつき通つた楽屋への扉を探した。やはり分かりづらいところにある。着物姿の中年女性らしき人々が手に花束とか、紙包を持って行く道を連れば簡単だった。もぐりこみ、隣りの人の着物の袖で顔をすられながら靴を脱いだ。やっぱり「靴を脱いで」と張り紙がされている以上きちんとしなくては。スリッパを探した時、ひょいと目の前に緑のビニールものが並べられた。

足も同じだった。

「立村くん」

黒い服に、深緑の目立たないネクタイをした立村くんが立つていた。襟元に目を留めた。うつすらとチェックが入っていた。

立村くん、ネクタイ、チェックだつたんだ。

宿泊研修の時、お土産に買つた黄色いタータンチェックのキー ホルダーを思い出した。

あれ、まだ持つてくれてるのかな。

「行こう」

一言だけつぶやき、すぐに背を向けた。今度は手首を取つてくれなかつた。

「うん」

よかつた。ひとつで来て。もし貴史がいたら、修羅場よね、

今じる。

幕の下りた中、舞台ではトンカチの音、怒号、照明器具の取り付け、降りてきた藤の花、などなどが入り乱れていた。次の舞台の準備をしているのだろう。こういつの見るのは初めてだつた。立ち止まり眺めると、立村くんも歩を留めた。振り向いて、斜に美里の方に向いた。

「清坂氏、あのさ」

だいたいふたまたくらいう間があつただろうか。

「なによ」

距離を取つたまま、美里は答えた。立村くんは田を廊下側奥の、白い背景のある場所に向けた。

そこでは桃色の着物姿で桃太郎っぽい格好をした人が写真撮影をしていた。周りには花束を持つ人たちがうろついている。たぶん詩子ちゃんの記念撮影だろう。立村くんの背中に近づいて、廊下の方を覗き込んだ。茶色の杵を振り上げて、先生たちに「ほり、もつと腕を張つて」とか言われながらポーズを取つている。

「写真撮つてるんだ」

踊る前の緊張した面持ちとは違い、ときたまえくぼが浮かんだいた。ほつとしたのだろう。一生懸命やつていたんだつたらそりや気持ちいいはずだ。

「ああやつて、衣装着た後、みんな記念撮影するんだ。その後すぐ衣装を着替える。だいたい一十分くらいかかると思つ」美里に話し掛けるのに、目線をあわせなかつた。そのまま詩子ちゃんがフラッシュを浴びてゐるのを眺めていた。

「でも、詩子ちゃんはもつときれいな振袖とか、そういうの着た方が似合うのにな。どうしてだろう。あんながにまたになつたり、変な掛け声かけたりする踊りにしたんだろう」

立村くんは美里を射た。

いつもの「ごめん、俺が悪かった」と様子を伺うようなそぶりではない。

どこか突き放したような、冷たい光だつた。今までその瞳は、菱本先生を始めとする連中にのみ向けられていたはずだつた。なのに、今立村くんが見つめているのは、美里ひとりだつた。

「清坂氏、これから藤野さんに会うんだろ」

「そのつもり。だつてお土産渡してないもん」

「着替えが終わるまで、少しだけいいか」

「いいかつて、何をよ。私と、話したいってこと?」

記念撮影を眺めている集団から立村くんはひとり抜け出し、また

斜に美里を待っていた。追いつくとまっすぐ背を向けたまま歩きつづけ、時たま頭を下げていた。一番奥の、水のみ場のようなどこまで来ると、もう一度振り返り、立ち止まるよう手で指示した。

「時辻」って書いてる。

廊下で待っている間、その文字が教室の模造紙に機会あるたび書かれた文字であることに気付いてはつとした。読みが当たっていたのだと、美里は確信した。男子の文字とは思えない楚々とした筆跡。立村くんが書いたものだと、すぐに気付いた。

その部屋に入つていき、ふすまを開け、誰もいないのを確認した後、

「入つてほしいんだ」

いやとは言えない雰囲気だつた。

「いいよ。誰もいないんでしょ」

靴をそろえて上がつた。先に上がっていた立村くんは、美里が上がるのを待つて、戸を開いたままにした。きちんと閉めたのに、すぐを開けた。膝を整えて座つた。

「いつたいなに、話つて」

開いているとかえつて落ち着かない。美里は正座して立村くんに対した。立村くんも軽く手を握つたまま、膝に置いていた。正座するのには茶道の時いつもしていることだけ、今日は外のざわめきや三味線の音が響いて少し気が散つた。

「立村くんが時辻さんの親戚だつてことは、もうわかつてるから」

「そういうことじやないよ」

立村くんはゆつくりと美里を見つめた。冷たい視線は代わらなかつた。居心地が悪くてつい、戸口に寄つた。身動きしない立村くんがしばらく言葉を選んでいる間、美里は後ろの蘭の花に目を向けた。「時辻沙名子さん江」とカードが入つていた。

「ついこの花、もらえるお母さんなんだ。

見た事のない、立村くんのお母さんを想像した。

「ずっと、これは話すべきだったんだと思つ。六月から

「六月？ なによいきなり話飛ぶの？」

「でも、やはり言えなかつた」

話がとびとびになつてゐる。違つのは、立村くんがめずらしく真つ正面から話をしていること。

田をそらさないこと。

「あ、この前のこと……」

「いや、違つ」

ゆつくじと立村くんの視線が下から上へと競りあがつていくのを感じた。笑いのない、冷たい視線。

「俺は、一年の頃から羽飛と清坂氏、どちらも同じように大切な友だちだと思つてた。けど

かすかに痙攣したように唇が震えていた。

「六月過ぎても、俺の中ではそれが全く、変わつてない。だから

六月、そなんだ。

水無月の雨、茶室の中、ふたりつきり。

廊下でしゃべつまくる通りすがりの人々。ざわめきが今は雨の代わり。

「俺はもつ、清坂氏とは付き合つことができない。清坂氏がしてほしい付き合いは、できない」

四フレーズに切り取つて、間違えないようにひまつきて、立村くんは美里に伝えてきていた。

嘘ではない証拠に、視線を一切そらさなかつた。

何言つてゐるのよ、立村くん。

振るんだったら私の方じゃない！ 変よ。そんなの。

貴史と同じくらい大切な友だちだったらしいじゃない。立村

くん。

美里もじつと見つめ返した。ふたりで今へりに見つめあつたのは、出会つてから初めてだろう。

立村くんの眼はいつも伏せ目がちだつたけれども、覗き込むと思つたより大きい。目が潤みがちだつた。黒くぬめつたような瞳の怖さを、美里は初めて受け取つた。

「それつて、つきあい、やめるつてこと?」

「友だちはやめたくない。でも、つきあいやめることでやつなるなら、仕方ないと思つていてる」

「友だちとつきあいつて、別に、私、なんも」

「清坂氏、ひとつ聞いていいか」

立村くんは美里の返事を待たずに置き掛けた。

「もし羽飛と清坂氏が付き合つていたとしても、別の奴と清坂氏とそういう付き合いをしていたとしても、俺はどつちにしても友だちでいられる。そう思う。そういう奴とあえて付き合いたいと思うか」

立村くん、今になつて気付いたの?

「マシンガンで一気にまくし立てられたら楽だらう。学校でだつたらきつとそうするだらう。でもここは、立村くんのホームタウン。目の前の蘭が凜々しくにらみつけている。

「だつて、そういう相手がいなかから私立立村くんと付き合つて」

「今のが俺の本心だ。どんなにやつても、俺はそういう感じ方しかできなかつたんだ」

「私を、友だちとしか、思えないつて?」

立村くんは口を開ざした。ただじつと、美里の方を見つめつづけた。いつもの「ごめん、俺が悪かった」とかその他の言い訳をしようとはしなかつた。四日間熱を出して苦しんだ後なのだろう、少し顔がやつれたように見えた。何でもいいから言い訳してほしかつた。「立村くん、私が火曜に言つたこと、気にしてるの」

「あれはみんな本当のことだから、当然だと思う。でも、俺は清坂氏のしてほしい形での付き合いはできない。それだけなんだ」

自分の言葉が言葉でないよに飛び出していく。

「私、そんな難しいこと言つてる? 私、立村くんのこと、嫌つてないつて言つてるだけ。だから何あつてもいつて言つてるだけじ

やない」「

「わかつてゐる。でも、言えないことを無理に言つてはできない」「言えないことってなことよ。時計つて苗字がお母さんのことだつて」と? 詩子ちゃんのこと知つてたつてこと? 宿泊研修で菱本先生に頭に来たつてこと? 小学校時代が暗かつたつてこと? そんなこと知つたつて私、あなたを差別なんてしなかつたよ。わかつてるでしょ。私も、貴史もずっと」

「うん、わかつてゐる。だから、感謝してゐる。羽飛と、清坂氏には。でも、羽飛と清坂氏と同じもんだと思つて付き合つちや、いけなかつたんだつて今やつと、氣付いた」

「じゃあ、どうすればいいのよ。私、私だつて、いきなりそんなこと言われたつて」

「俺なんかとつきあつよつも、もつと清坂氏にはいつぱいいい奴がいるはずだ」

どんなに美里が言葉を投げかけても、立村くんの答えはひとつだけた。

俺はもう、清坂氏のしてほしい付き合つはできない。

「こ」は一度、作戦を練らなくてはならない。

素直にうなだれて涙するほど美里は単純な女じゃない。

「わかつた。これ以上話しても立村くん、どうしようもないよね」想像以上にかたくなな人だつたのだと、あらためて思った

「立村くんはここの方が話しやすいかもしないけど、私は学校でないとダメ。だから、明日。貴史も待つてるし」

立ち上がり、スリッパに履き替えた。黙つて立村くんがふすまを閉め、後ろに続いた。

「いいよ、ひとりで行けるから」

「いや、もうひとつだけ、頼みがあるんだ」

「付き合つてゐる間に?」

「違う、藤野さんに」

廊下に立ち、「時計」の張り紙を横田に見ながら、美里は立村くんをしつかと見据えた。

「今日は、十五夜だつて知つてたか？」

「十五夜お月さん？　あ、今思い出した」

あまり曆に詳しいほうではない美里である。首をかしげた。

「たぶん、藤野さんは自分の演目がどういう理由にせよ、気に入つてないと思うんだ。さつき清坂氏が言つていたようにもつときれいな着物を着てみたかったんだと思う。でも、『玉兎』という踊りには、今日の日のイメージを絡めて、初舞台にかけて、一生の思い出にしてあげたいつていう先生たちの気持ちがこもつていたと思うんだ。俺はあまりそういうことわからないし、口出したくないから言わないけど、でも、もし気付いていなによつだつたら、なにかの折に、藤野さんに教えてあげてほしいんだ」

「あんたが言えばいいじゃないの」

「俺は一度も、藤野さんと口を利いたことなんてないよ。これからもたぶんそうだと思つ」

さつきまでずっと風の吹き抜けているような瞳だったのに。

美里に話している時、ふといつもの立村くんに戻つているようだつた。やわらかな視線。穏やかな表情。さつきまでの力をこめて威圧しようとする部分は一切感じられなかつた。

きっと、無理していたのだろう。美里は確信した。

「仲のいい友だちでしかそういう話はできないと、俺は思うからさ」

「ああ、やつぱり、こいつどこが立村くんなんだ」

「私、つきあいやめるなんて、あつさり飲むことなんてないからね。」

ないわけがない。

俺はもう、清坂氏のしてほしい付き合いはできない。

なのに不思議なくらい、美里の気持ちはすつきりしていた。

火曜日にあれだけ罵るだけ罵った相手だ。振られるのは当然だ。お前のこと嫌いだと言い切つてつば吐きかれるのもしかたない。最悪の場合、ひっぱたかれることも覚悟していた。立村くんのプライドをはずたに傷つけたことは自覚しているのだから。

なのに、やつぱり会うと立村くんは、美里の知っている立村くんのままだった。

立村くんはずっと美里のことを待つていてくれたではないか。しかも、ちゃんとひっぱつていってくれ、結局「別れ話」……美里は素直にそつ受け止めていないが……が出た後も、詩子ちゃんが着替え終わる頃まで側にいてくれた。

心臓がどくんどくん言いつづけていた。「時辻」と書かれた和室の中で、思わず自分の嫌いな、

「お願い、付き合いやめるなんていわないでよ」

と繰りつくパターンになるところを間一髪回避できたのはなぜだらう。

ちよこっと指をくわえて考えてみた。樂屋の前で帯を締めてもらつていてる詩子ちゃんをずっと眺めながら、美里はふと思つた。

そんなに私の望む付き合いが出来ないつていうんだつたら、あんたの望むつきあいつてのがなんなのか教えてもらえばいいことじゃない。なんだ。私、聞けばよかつた。

貴史と同じくらい私のことを好きだつてことじやない。あの人がとうとう、私に告白したよつなもんよね。立村くん、きっとあなたは気付いてないと思つよ。私のことを振らなくちやつて思つていたんだと思うよ。きっと、私をめいいっぱい傷つけたと思つて落ち込んでもると思うよ。けどね。

切り札が見つかった。美里はもう一度、微笑んだ。

だから、安心して言いたいことを、いつも言つ風に言つてくれ

ればいいんだよ。立村くん。

可愛い着物だと美里は素直に思つた。化粧しないでこのまんま、舞台に立つてくれればよかつたのに。詩子ちゃん、なんで桃太郎ルックなんかしたんだろ？ 聞きたいけれど立村くんの助言もあつたので飲み込んだ。たぶん今の中学生の友だちが何かものを持ってきておしゃべりしていつた。その子たちがいなくなつた後、もう一度覗き込み呼んだ。

「詩子ちゃん」

髪の毛をお母さんらしき人に結つてもらつていた詩子ちゃんがようやくこちらを向いた。

「美里、来てくれたの」

「うん。初めて日本舞踊つて観たけど、面白かつたよ」

まことに、と気付くのが遅かつた。「面白い」はちょっと禁句だ。

「あら、美里ちゃん、本当にお久しぶりね。ほらこちらの椅子に座つてじうぞ」

詩子ちゃんだけがじうぞう顔をすればいいのかわからないようすで戸惑つてゐる。化粧を落とした後、妙に頬がてかてか光つていて、お土産を詩子ちゃんのお母さんに渡し、美里はそつと座つた

「あれ、変だつたよね」

「変つて、踊りが？」

「やつぱりそなうなんだ」

踊り終わつた直後はほつとしていたのか笑顔も見えたのに、今はすぐに表情が暗くなる。立村くんの言つた言葉もまんざらはずとはいひのかも知れない。

「つうん、すぐ可愛いつて思つた。桃太郎さんみたいで」

「もも、たろ？？」

完全に逆効果だつた。貴史の助言をもつと聞いておくべきだつた。

美里は出された和菓子の包を手にとり、時間稼ぎに食いついた。

「だから、本当は誰も呼びたくなかったのよ。美里」

「どうして？ いいじゃない」

「よくなんかないつて。私だって本当は、もつときれいな衣装着た
かつたもの、でも」

お母さんが間に入つて肩をすくめた。
「詩子ちゃんまだ言つてゐるの。やめなさい。もう終わつたことなん
だから」

「だつて、もう」

ふくれつづらで詩子ちゃんもお菓子をつまみ始めた。お菓子入れ
の中身がどんどん減つていぐ。会話はないけれども、食べることに
だけは集中してしまつ。お茶をいただきながら、美里は立村くんに
言われたことをこつ切り出そうか、迷つた。

相当、詩子ちゃん、むくれてるね。まあわからないでもない
けどね。

お母さんが周囲の人たちをうががいながら、小さい声で詩子ちゃんにささやいた。美里にはかるうじて聞こえる声だった。

「わかつてゐでしょ。詩子。女踊りなんて選んだら家がどうなると
思うのよ」

「だつて、最初は私、『手廻子』だつたんでしょ。なのに、なんで
『いいじやないの、上手に踊つたつてみんな先生たち誉めてくれて
たわよ』

「そんなんじやなくて」

突然、詩子がうつむいた。お母さんにつきつづく言ひ返していた様子
が崩れて落ちた。

「詩子、ちゃん」

「美里に観られたくなかったのに、なんどよりこよつて來たのよ。
美里、どうして」

顔を覆い、頬を抑えた。田からほにじみ出るような涙がぽつりと
落ちた。

「ほりほり、何泣いてるのよ、詩子。感動してしまつたのかしらね
え、もう。感極まつたつて感じですよねえ」

後の言葉は他の弟子たちに向けての言葉らしかった。怪しまれないように。みな浴衣姿でお茶を飲んだり伸びて寝ていたりとあさやまだつた。

「私、来ない方がよかつた?」

「いてほしい時にいなくて、来なくていい時になんて来るのよ。それも羽飛と一緒に」

「貴史も気を遣つて、楽屋には行かないって言つてたんだよ」「いつもそうよね、美里。いつも、美里は羽飛といつもくつついでたよね。どうして」

「どうしてもこうしてもないよ。だつて親友なんだよ、あいつとは「私」といふよりよかつたつてわけ」

後は涙で聞こえなかつた。なぜ、貴史の話にまで飛ぶのかわからなかつた。踊つた後の感動を味わつているのではないということはわかる。でも、いったい詩子ちゃんは美里に何をしてほしいのだろう。

う。

そうだ、この感じは前にも味わつたことがある。

詩子ちゃんが青大附属を受験すると言つ出した時。

受験に失敗して落ちたと聞かされた時。

詩子ちゃん受けたつてしまふがないつてみんなわかつてたのに、なぜ。

お世辞にも詩子の成績は、青大附属に受かるようなものではなかつた。なのに、べつたりと

「美里が受けたから私も」

と言つ出したことが美里はうざつたかつた。それが本音だつた。

なんで小さい頃から一緒にいた貴史とは、一日中一緒にいてもそんな気持ちにならないのに、詩子ちゃんにだけそんな気持ちになつてしまつたのだろう。

だから、なんで私にばっかりくつづきたがるのよ。

美里はつぶやきながら、なにげなく詩子ちゃんを避けていたよう

な気がする。わざと貴史と家に帰つたり、児童館に通つたり。トイレに行くのも、帰りもいつも一緒。そういうべたつとした付き合いが美里は耐えられなかつた。

詩子ちゃんが私と大の仲良しでいたつてのはわかるよ。でもね、程度つてものがあるよ。

私も詩子ちゃん傷つけたくなかつたから言わなかつたけどね。もしかしたらもう一度友だちになれるかも、て思つてたけど。やつぱりだめだよ。

「詩子ちゃん、いい。貴史待つてるからそろそろ帰るけど、ひとつだけ伝言があるんだ」

切なげに涙をこすつてゐる詩子を美里はじつと見つめていた。

「なに」

「詩子ちゃんの踊り、『玉兎』つていうんでしょ。今日は『十五夜お月さん』の日なんだつて。で、詩子ちゃん今日初舞台なんでしょ。一生の思い出に残るよに、十五夜お月さんの舞台として、兎になればいいんだよって、きっと先生たちがそう決めたんじやないかつて、ある人が言つてた」

隣りで様子をうかがつていた詩子ちゃんのお母さんが、驚き眼で近づいてきた。

「あら、美里ちゃん、いいこと言つうのね」

「いいえ、私の友だち、と/orうか、あの」

彼氏、とは使えなかつた。

「とにかく、私の知つてる人が、そう教えてくれたのよ。詩子ちゃんがずっとこの踊り好きじゃないんじやないかつて気にしてて。心配してくれたのよ。でもその人、自分からは絶対に言わないつて決めてたみたいで、私を通して教えてあげくれつて言つてたの」「誰、その人つて」

「立村くん。私が今付き合つてゐる人」
ゆつくり、この部分に力を入れた。

「詩子ちゃん。私、今日の踊りがいいのか悪いのか全然わかんない。

でも、その前の踊りを見ていて寝ていた貴史が、詩子ちゃんの踊りは面白がってみていたよ。面白いものを面白いって言って、そんなに悪い？ 私、詩子ちゃんがもつと堂々とすればいいのこって思うよ。悪いけど、今日詩子ちゃんと話をしてもとの友だちに戻れるかな、つて思つてたけど、やつぱり今の詩子ちゃんとは楽しくないよ。私、もつとべたべたしたとこのない詩子ちゃんと話したかった。なんかわかんないけどずつともくれてて、口尖らせて、きれいな衣装着れなかつたつてふくれてる詩子ちゃんを慰めるために来たんじやないもん。これからどうなるかわかんないけど、今のところは」

美里は立ち上がつた。詩子ちゃんのお母さんに聞こえないよとそつとささやいた。

「もし、また何か踊る時あつたら、連絡ちよつだいね。私、今の詩子ちゃんとは付き合えないけれど、いつかは前みたいな友だちになりたいって思うから。その時まで毎回観にいくから」

詩子ちゃんは目をこすつて美里をにらみつけた。動搖の色が隠せなかつた。

「美里、どうしてそんなこと言つて。私、あんなに仲良しだつたのに」

「今のが仲良くしたいのは、いいことはいい、悪いことは悪い、つて自分の考えを持つている人なの。青大附属つてそういう奴ばかりだよ。立村くんだけ、人見知り激しいし言いたいことなかなか言つてくれないけれど、すごく私や貴史のことを大切にしようつて思つてくれてる。だから、私、付き合つて決めたんだ。もしかしたら振られるかもしれないけど、今、詩子ちゃんの『玉兎』の由来教えてもらつて初めて分かつたよ。口を利いたことのない女子に対して、ここまで心配してくれて、思いやつてくれるところがわかるから、かなつて」

「ねえ、美里、どうじつこと。立村くん、つてまさか」

「さうよ。時辻くんと同一人物。詩子ちゃんの想像した通りだよ。

詩子ちゃん、立村くんのことを背の低い冴えない奴だと思ってたみ

たいだし、たぶんそつ思つ人がほとんどだと思つ。でも、私はそんなのをとつぱらつても、やつぱり立村くんと付き合つたいて思うもん。そつ思わせてよ。詩子ちゃん。めそめそ泣いてないで、私が詩子ちゃんとしゃべりたいて思つよつなど」、見せてよ

美里は立ち上がり、ゆりくつと椅子を置んだ。

「じゃあ、またね」

詩子ちゃんがまだうつぶして泣いている。お母さんがまた背中をさすつて慰めの言葉をかけてくる。でも美里は振り返らなかつた。口で一礼したのは、詩子ちゃんの姿が隠れるから。

今の詩子ちゃんとはしゃべりたくない、か。

ひどいこと言つちやつたつて思つけど、でもそれが、今の私の本音。

急いでもと来た舞台脇の通路を通りロビーに戻つた。一瞬に明るくなる照明器具。田が暗になれていたせいかふらついた。

「貴史、貴史」

つぶやきながら青大附属の清風を探すと、貴史がぼけらつとした顔をして座り込んでいた。一時間近く待たせたことになる。

「じめん、長すぎたね。許して」

「あとでお」れよ。『龍宮』のソフトクリーム

「やあ、あれつて350円もするんだよ！」

「そのくらいしたつていいだろ。ばあか」

大あぐびをしたところみると、相当眠かったのだろう。

「じゃあ行くか。ところで美里」

「なによ。詩子ちゃんとは会つてものを渡した。それだけ」

ガラス張りの玄関から出て、美里は貴史が口籠もつているのに気付いた。

「会つたか」

「だから詩子ちゃん」

貴史は答えず、ネクタイを緩めてポケットにつつんだ。

「あんた、何が言いたいのよ」

「言いたいわけじゃねえよ」

あんたの言いたいことわかつてると。どうせ。

外に出ると、幅広い雲がたっぷり浮かんでいるのが見えた。空いたところに光る青空の色がちらついていた。明日からはまたお天気が崩れるといつ。歩いていると暑いくらいなのに。

「貴史、あのね」

美里は空に向かって言葉を発した。

「私、わざわざ立村くんに振られたんだ」

案に反して貴史は答えを返さなかつた。黙つて口笛吹いて歩いている。

「けどね、明日、『告白』つて形にひっくり返してやるんだ」

「はあ？」

つかつか寄ってきて、顔をまじまじ見るのはやめてほしい。

「お前、何考へてるんだ？」

「立村くんにね、ちゃんと教えてあげなくちゃだめだよ。一生懸命本当のことを言つてくれたんだつたら、いこいことにちゃんとなるんだって、証明してあげるんだ。私と貴史がやつてきたこと、無駄じやなかつたのかもつて、ねえ、思わない？ 思つよね、わつと」

「美里言つてること、俺にはアイドントノー状態」

もう一度貴史は、アップテンポの軽い口笛を吹き始めた。

1 立村上総が受け取つたもの

俺は、清坂氏の求めるつきあいをすることは、できない。たつこれだけのことを伝えるのが、どうして大変だつたのだろう。

口にしてしまつた後、美里に激しく食つて掛かられたことも、それでこりか「つきあい」を続けることを求めてこられたことも、上総にとつては信じられないことだつた。

とつぐに俺が振られたつてことになつてゐるはずなのにな。

上総は三年A組の教室前に佇んでいた。

一週間近く本条先輩と連絡を取つていない。学校を休んでいたといふのもあるけれど、あえて自分を甘やかしたくなくて口を閉ざしていた経緯もある。十月中旬からは学校祭やら体育祭やらで忙しくなるのだから連絡をしないのもおかしいだろう。

「よお、立村、お前顔真つ白だなあ。どうした」

肩にかばんをひつかけて、ブレザーフリースのネクタイを緩ませて本条先輩が上総の顔を覗き込んだ。やはり、休んでいることを知つていたのかもしれない。

「先週風邪引いて休んでました。連絡遅くなつてすみませんでした」
棒読みで上総は答えた。

「ふうん、そうかそつかそつか。生きてるだけでもめつけもんだ。立村、とりあえずだな、冬休みの評議委員会演劇、ビデオの予定を早めに出しとけよ。ほら、お前ら一年が仕切るんだからな。それと学校祭とか、体育大会とかやつたらめつたら行事は目白押しなんだぞ。体力持たないとやつていけねえぞ」

頭をぐりぐりと撫でつけるのはやめてほしかつた。首を振つた。でも離れなかつた。

「俺だつてな、来月辺りからはさすがに眞面目な顔で受験生の顔せねばなんねえんだからな。わずかな俺との時間を大切にしろよ、おい聞いてるのかよ」

来月、十一月か。

本条先輩は公立を受験するはずだつた。今のところ知つてゐるのは、上総を含む一部の連中だけのはずだ。

「本条先輩」

ぶるつとふるえが走り、肩を思いつきり竦めた。まだ咳が残つていてむせた。

「なんだよ」

「まだ、誰にも話してないんですか」

「何をだ」

「先輩が、受験すること」

横にひつぱられるような本条先輩の口。ゆつくつと元の形におさまつた。

「俺のこととか」

「はい。先輩」

身体がすうつとかたくなつていいくよつだつた。背筋が寒かつた。

「俺はまだわけを聞いてません。本条先輩、どうして、公立に行くんですか」

自分の口にした言葉を、本条先輩は受け止めた証拠に上総と田と目を合わせてくれた。答えない。ただじつと見つめられるだけだつた。美里にあのことを告げた時と同じ、覚悟の必要な言葉だけが流れた。

「本条先輩、プライバシーの侵害と言われてもかまいません。びつして、青大附属を出て行くんですか」

初めて七月の評議委員会合宿で告げられた本条先輩の公立高校受

験。

打ち明けてくれたのは上総が最初だと言つてくれた。

その場でも何度も尋ねたが、「プライバシーの侵害だ」としまかされてしまった。本条先輩に逆らつてはならないという上総なりの判断で、今日までずっと聞かずについた。なのに、口が勝手に動き出した。言いたいけどいえなかつたことを、すらすらとしゃべる」とができた。

「立村、あのな」

廊下に他の三年連中がいないかどうかを確かめるように見回し、

本条先輩は片腕で上総の頭を抱えた。汗臭い匂いでむせた。

「俺ひとりでうちの親にくつついて転校するか、それとも青潟に残るかつて言われたとする。お前ならどっちを選ぶ」

「どっちと言われても」

いきなり口籠もる。転校なんて考えたこともない。想像つかない。

「俺は青潟に残ることを選んだ。年子の兄貴とな」

「先輩、それは」

「ふたりで下宿なりなんなりするんだつたら、親にあまり金せびりねえだろ」「ええだろ」

「ああ、私立だし」

「だつたら公立でいいじゃねえかつてことだ」

腕が離れ、上総は何度も首を振つた。

「転校するつて、どこに」

「どつかわからん外国か、青潟とは違う場所かのどっちかだ。けど、俺は青潟でもう少し遊びてえつてことだ」

かばんの角で上総を軽くはたくようにして、本条先輩は自分の教室に入つて行つた。取り残された上総は一礼すると階段に向かつて歩き出した。

まさか本条先輩が教えてくれるとは思わなかつた。

どうしても聞きたくてたまらなくて溢れた言葉。

本条先輩。青潟に残るんだ。

詳しい事情はわかるようでわからなかつた。納得できるようすで

きなかつた。ただ、上総が感じたことはひとつだけ。

青鴻に、いてくれるんだ。本条先輩。

三ヶ月、ずっと聞きたくて聞けなかつた言葉を、封印していたものが、こんなにすらすらと引き出されていくなんて信じられなかつた。

一年D組の教室に入ると、一部の連中から、

「立村お前生きてたのか！ 台風で飛ばされたかと思つてぞ」

「しかし、精魂尽き果てたつて顔してるなあ」

「人生長いんだからな、気を確かに持てよ」

励ましてくれてのか物わらいにしているのかわからない言葉の雨に打たれた。笑つて受け流すことも、このクラスではできる。すでに到着していた古川こずえに授業の状況を尋ねたり、いつもの朝の漫才をかまされたり、ごくふつうの一日が始まりつつあつた。変わつていたのは机の中の大量プリント類くらいだろうか。一枚ずつ折つてかばんに詰め込んだ。

「立村くん」

熱中しているうちに、聞き慣れた声が、聞き慣れた調子で聞こえた。

「あ、清坂氏」

それしか言葉が出なかつた。教室に入つてきてすぐに上総の机前に来たのだろう。さっぱりした笑顔で立つていた。

「あのね、企画書。あとでひとりで読んで」

「企画書つて？」

条件反射で尋ねてしまつた。昨日あれだけ修羅場をやらかしたといつのに、美里の顔は後遺症を残していない。傷が治らないと泣いているのは、上総だけなのかもしれなかつた。

「だから企画書だつてば」

学校祭の行事関係なのかな。それとも。

周りはたぶん、ふたりが仲直りしたと思つてゐるのかもしれない。

もしくは火曜の段階で美里が上総に愛想尽かしをしたと思つてゐるのかもしない。その辺は想像するしかない。上総がわかつてゐるのは、美里が渡してくれたものが決して、評議委員会関連の「企画書」ではないことくらいだつた。

授業中、だつたら読んでいてもわからないよな。

上総は机に素早くしまいこんだ。隣りの古川一介さんに覗かれたりなんかしたら、大変なことになる。

チャイムが鳴るぎりぎりに貴史が飛び込んできた。ちらつと田を向けたが、すぐに席に付いたので会話はなかつた。上総の隣りに南雲が悠々とやつてきてすわり、すぐにミュージックテープ交換を始めたので、はたしてふたりが何を考えているのかは見通せなかつた。羽飛はシャープを鼻と唇の間に挟み込み、何とかして動かないようにしようとしてしゃくしゃの顔をしていたし、美里は黙つたまま近くの女子たちとテレビ番組のネタで盛り上がり上がつていた。その辺はよくわからない。

菱本先生が入つてきて、ちらつと上総の方を見た。

「立村、もうだいぶよくなつたのか」

「はい」

最低限の返事だけ返した。

「他の先生たちのところへ、ちゃんと補習用のプリントもらひに行つてこいよ」

「わかりました」

腫れ物に触るよつた態度だが、それでもかまわなかつた。菱本先生に関してのみ、遮断用シャッターは下りていった。はたして父と珈琲を挟んでどうこう会話をしたのかは想像つかないが。手におえない息子のことをぐちつたのだろうか。宿泊研修の「じた」たについて不満たらたらだつたのだろうか。

他の奴にも同じようにできればいいのにな。

隣りで古川一介さんがささやいた。

「なあに、反抗してるのよねえ。まったくあんたつたらガキなんだ
から」

「悪かったな」

上総はつくれの中で手を動かし、封筒から「企画書」だけ抜き取り、ノートに挟み込んだ。教科書と重ねて机の上に置いた。授業が始まつてから、ゆっくりと読もうと思った。「こずえや南雲には気づかれないように」、ぱらぱらとめくつた。窓辺の美里は知らん顔して近くの席の子たちと明るくしゃべつている。

そつと、めくつてみた。レポート用紙に小さく「企画書」と上書きされていた。評議委員会関係の書類の顔をしていた。上の方でスタイルによって畳められていたので、一枚ずつめくつてみた。

立村くんへ

これから書くことは、私から立村くんへの提案です。

私が立村くんになににしてほしいか、つてことはずっと前から話していました。

けど、昨日の話でそれができないといつてことがわかりました。だつたらしかたないので、私の方でどうしたらいいかを書かせてもらいます。

もし、これでよかつたら、放課後、自転車のところへ来てください。

「これでだめだつたら、しかたないのでつきあいやめてもいいです。

立村くんがあまり、私に家のこととかそういう話をしたくないってことがわかりました。

だつたらもう無理にそういう話はしなくともかまいません。別にそういう話がなくたつて、立村くんと話することができます。今までそつだつたし。評議委員会のこととか、クラスのこととか、そういう話をずっとしてきたんだつたら、それでもいいです。ただ、私は立村くんに、ひとつだけお願ひがあります。

私にしか話せないことを、ひとつだけ、教えてください。

貴史とか、南雲くんには話せないこと、たったひとつだけです。

立村くんは六月に、私のことをひこきするって言つてくれましたよね。

別に他人たちの前で変なことしてほしいなんて思つてません。ただ、ひとつだけ、立村くんの秘密を持つていてくださいだけです。なんでもいいです。本当にしょもないことで大丈夫です。言いたくないことがあればそれはそれでしかたないと思います。それ以上突っ込んだりしません。ただ、ひとつだけ、そういうのがあれば、立村くんが私をひいきしてくれたと思えます。

立村くんだけにそういうのを頼求するのはフュアじやないので、私も立村くんにだけ、秘密を話します。

それは、あの藤野詩子ちゃんのことです。

すでに貴史からも聞かされているかもしれません、詩子ちゃんと私は小学校時代ものすごく仲がよかつたんです。でも、六年の半ばから、だんだん女子と一緒にべたべたするのがいやになりました。理由なんてわかんないけど、詩子ちゃんのよつに私にまとわりついてくるのがうつとおしかったんです。

だから、青大附属に受かつて詩子ちゃんと離れられたのがとつてもうれしかった。

こんなこと思っちゃいけないとわかつてていたけど、本当にすつきりしました。

このあたりは貴史にも話しているのでたぶん、秘密じやないです。

今年の一学期に立村くんといじゆえがふたりで、詩子ちゃんの写真が載つていてるチラシを見て話していたので、初めて彼女が日本舞踊を習つてこるとこつことを知りました。前から立村くんのお母さん

が日本舞踊とかそういうのに詳しいってことを聞いていたので、たぶん知っているんじゃないかなって思つてました。私も詩子ちゃんとは、後味悪い別れ方をしていたので、いつか仲直りしたいという気持ちはありませんし、たぶん立村くんも協力してくれるんじゃないかなと勝手に思つたりもしてました。本当は最初に相談したかつたんです。

でも、いろいろあって、上の前の田舞の会みたいになつてしましました。

立村くんが楽屋に連れてつてくれてから、初めて詩子ちゃんに会いました。

詩子ちゃんはやつぱり、立村くんの言ひとおり「玉兎」という踊りを氣に入つていなかつたようです。だから、ちゃんと立村くんの話していくことを全部教えました。でもそれ以上に、詩子ちゃんがわがままばかり言つていてるよつにしか思えなくて、思いつきりひどいことを言いまくつてしましました。

早い話、「友だちではいられない」つてことです。

今の詩子ちゃんとでは、どうしても友だちとしての付き合いができないし、私もがまんできないと思つたからです。詩子ちゃんにとっては、もしかしたら私は友だちなのかもしれないけれども、また小学校の時のようにべつたりした付き合いをしたいのだったら、私は耐えられないと思いました。

上の話はまだ、貴史にもしてません。打ち明けたのは立村くん、ひとつだけです。

でも、詩子ちゃんと永遠に絶交したいというわけではありません。もし、詩子ちゃんがあの「玉兎」という踊りに誇りを持ってくれて、あの桃太郎っぽい衣装でも堂々としていたら、私は元の友だちに戻れたかもしれません。そして、他の踊りをするようになつてもつと、自信を持って私と話してくれたら、その時は仲良しに戻りたいと思つてます。

この話は立村くんにしかできません。立村くんは詩子ちゃんのことをひょこつとは知っているし、日本舞踊のことも舞台のことも、私よりももっと詳しいはずです。だから、お願いします。立村くんに詩子ちゃんのことを相談させてください。貴史にはここまで話すつもりありません。

もう一度書きます。

もし、この条件でつきあいを続けてもいい、とこうんだつたら放課後、自転車置き場で待つていてください。私も誰にも言いません。立村くんも言わないでください。お願いします。

清坂美里

上総は一回読み返した。授業はまだ始まつていない。すぐに田を通した後、かばんの中にしまってこんだ。

放課後か。秘密か。

あの藤野詩子があいかわらずすねた態度を取つていたのを、上総は覚えていた。

たぶん何かひともんぢやくあつたのだひつとは思つたけれども聞かずにおいた。

清坂氏も、ずいぶん言つみなあ。

納得はする。美里が詩子のよつな甘えたがりの女子に對して冷たい視線を送つているのは、一年の付き合いでゆえ重々承知していた。でも、よつによつて樂屋の中でわうひつことを言つとは想像していなかつた。

でも、永遠に絶交したいわけじゃないとも言つてるな。やつなんだ。

「企画書」の内容は上総の想像をはるかに超えていた。

美里はつきあいをやめないと主張していた。さらに言つなり、上総にあまり踏み込まないという譲歩案まで出してくれている。こんなにしてくれるだけの価値、俺にあるのか？

きつぱり、言いたいことを伝えた時の覚悟がだんだん揺らいでくるのを感じた。

突き崩した積み木を、次の瞬間もつとわかりやすい形に作り直してくれたような感じだった。

これで、突っぱねたら、俺は人間としての付き合いもできない奴だよな。

そつと後ろの羽飛を見た。窓際の美里を見た。最後に外の空をすかしてみた。

白い空がうつすらと広がっていた。晴れているのに、光が押さえられた曖昧な天気だった。

秘密か。

美里にしか話さない秘密。

上総は時計版を覗き込んだ。放課後まで授業は六時間挟まつっていた。

清坂氏はどう思つかわからないけど、藤野さんとのことを考えたら、俺ができることはきっと、あるはずだから。だから。

美里の求める付き合いとは違うかもしれないけれど、上総は自分のことばで、もう一度伝えたかった。もう打ち明けることが怖いと思わない。雲を突き抜けた奥にちらつく青空が見えるようだった。

2 羽飛貴史が気付いたもの

美里の性格を熟知している貴史にとって、立村が何を言つても無駄だということはよくわかつていた。

あいつは簡単にあきらめる女じやねえからな。

約束どおり「竜宮上」のソフトクリームをおじつてもらつた後も、家に戻つて家族に土産話をした時も、貴史はずつと次の日の展開を考えていた。

立村が美里を振つたつてことかよ。まあな。あいつも相当神経参つてたみたいだしなあ。けど、美里が「告白」つて形にひつくり返すつて言い放つたつてことは、まだまだ付け入る隙があるつて

「ことだよなあ。あいつも、どういうこと考えているんだか。

「あいつ」とは美里なのか、それとも立村なのか。

やたらと小ぶりで腹の足しになりそうになかった弁当を思い起しづながら、貴史は目を閉じた。いつもだつたら部屋の真ん中にべたべた貼つている鈴蘭優のポスターにチューするのが日課だが、それすら忘れた。

もし、立村が宿泊研修の時に、ああいう事件を起こさなかつたら。

たぶん貴史は、別の方法で美里と立村をくつづけてやるべく手段を考えていたらう。もちろん立村のように停学すれすれのことをやらかすほどばかではない。美里を巻き込む形で、他の男子たちに協力させて、立村のジェラシーを搔き立てやるらうと思つていた。

男はな、追つかけるほど、燃えるんだ。この前教えただろ、美里。

小学校時代の野郎連中に美里と一緒に歩かせるかテーーートさせるか何かして、立村に吹き込んで、思いつきり嫉妬に狂わせて、最後には美里を独占しようという行動に出させる。これは想像するだけでも楽しかつた。だから二学期に入つたらふたりを思いつきりいちやついたカップルにしてやろうというのが、貴史の思惑だつた。

しかしあつさりと予定は覆り、立村の本心らしきものをすべてめくつてしまつた。

美里も気付いていたのだろうが、貴史にすらうちあけてくれなかつた本心。

立村、お前、本当はそ^うじやなかつたのかよ。

俺が惚れてたのは、美里じやねかつたのかよ。

自分がずつとこしらえてきた微妙な繋がりを、立村はあつさりと断ち切つてしまつた。

美里はもちろん、自分の「彼氏」としての裏切りを知つてショックだつたろうが、貴史だつて「親友」としての繋がりを拒絶されて

しまったわけだ。

どうすればよかつたのかわからぬうちに、田覓めた。朝がくればいつもの儀式、鈴蘭優のシングル「風の鼓動」を目覓まし代わりにテープで流す。家を出て美里を誘う。いつものように学校に向かつ。「美里、結局、何たくらんでるんだ?」

「ないしょ」

「内緒つて、まさかお前、やらしこと考へてるんじゃねえだろ?」
「なあ」

「なによやりしごとつて。やつごうとを想像するあんたの方が変なよ」

美里の横顔は、作つていいのかすつきりしていた。少なくとも「振られたばかり」の女顔ではなかつた。

「しかし、お前なあ、藤野とはどうだつたんだ」

「たいしたことないよ。これもないしょ」

「これ見よがしではない。むぐつてほしいわけではない。ただ、内緒にしているだけ。

俺には何でも話してたくせにな。何考へてるんだ、美里。

立村が教室にいて、古川「ずえたちと相変わらず漫才をかましていた。

「寝ている間何してたのさ。あ、そいつか。思つつきつ血口発電してたんでしょ。ベットでね」

「古川さん、一週間会わないでいたけど、全然会話変わつてないな」「当たり前でしょ。それよりもどうなのよ。体力消耗しなかつたの」「何が楽しくてそういう話に返事しなくてはならないんだ。昨日は死んでたんだ。あるとこでさんざん人使いの荒い人にこき使われてたんだ」

「へえ、そんな激しい運動してたのかあ。でも持久力のことを将来考へると必要かもね」

「ああ、激しかった。一口中駆けずり回ってたからさ」「会話の内容を耳にするに、いつも通りだつた。

ちらつと立村に視線を送り、挨拶代わりに頷いてみせ、自分の席についた。

美里がノート一冊入る程度の封筒を立村に渡しているのが見えた。あれか、「告白」にひっくり返す作戦つてのは。

授業が始まる前、ずっとふたりの様子をうかがっていた。あまり露骨に気付かれないようにしたけれどもなかなかそうも行かない。消しゴムを落とした振りをしてはちらつと覗き込み、窓際の美里がいつも通りけらけら笑っているのを聞いた。ついでに南雲が立村へなにかと話し掛けているのをじくじくする思いで眺めた。

なんであいつ、立村にああも話し掛けるんだ？ 次期規律委員長様だからかよ。

この前、南雲に投げかけられた言葉がまだ響いている。

勘違い野郎。俺がもし美里に惚れてたら、立村に譲るなんてことしねえよ。そんなにお人よしかと思ってたのか。もしそういうことするとしたら。

貴史はひとつだけ、例外のパターンを頭の中に描いた。

美里が救いようのない馬鹿男に惚れるか惚れられるかして、人生アウトになりそうだったらだ。恋愛なんかじゃねえよ。親友を助けるために、「つきあつた」ふりはするかもしれない。ああそうさ。そのくらいの演技はいくらでも俺だつてできる。けどな、今、曲がりなりにも美里とつきあっているのは立村だ。南雲、お前みたいな奴じやねえ。だつたら、俺が動くことなんてねえってわかつてゐるだろ。

振り返った立村と目が合つた。そのまま美里に目を向けていた。何かを感じたのだろうか。貴史は知らん振りをしていねむりこいふりをしていた。

立村は休み時間ほとんど姿を消していた。別に驚くことではな

い。青大附属のお約束たること、「休んだあとは補習プリントの嵐に見舞われる」のだから。四日間休んだ以上、量は半端なものじゃないだろ？。南雲と話すことが多かつたようで、結局貴史とはほとんど言葉をかわさなかつた。美里も話し掛けていなかつた。

帰りの会が終わつてから、軽く「お先に」と告げて去つていった立村を、貴史は見るともなしに見送つていた。が、次の瞬間美里が立つたまま立村の背を見つめていたのに驚いた。すぐに近づいて尋ねた。

「美里、どうしたんだ」

「どうしよう、帰っちゃつた」

「は？ そりや家があるんだ帰るに決まつてゐるだろ」

「違う」

周りにはほとんど気付かれていない。なのにふたりは会話が続かない。

「貴史、悪いけど私も帰るから」

意味が通じない。そのまま美里は教室を飛び出した。

「おい、待てよ」

（）

なんで追いかけてしまつたのかわからない。貴史は玄関を出るとじらじらと足を留めた。

美里が精一杯走り続けたのを、九月の段階では追いかけて留めることもできた。

でも今は、じつそりつけたほうがいい。

だから美里、猿知恵だつていうんだよな。全く。

顔を覆い、目をこすりながら美里は自転車置き場へ向かつた。こう言つた時、貴史は黙つてついていく。美里も貴史がひとりで行動しようとする時、いつもそつだつた。気付かれないように、美里の様子をうかがうだけだつた。

銀杏の葉がだいぶ色づいていた。一枚、まだいきいきしたまま落

ちている葉を踏んで歩いた。美里の足取りは重たい。相当、参ったに違いない。ふだんだつたらちやかしつつも、「なあに落ち込んでるんだ? つたぐ、ひとりでなに勇み足やらかしてるんだよ」と頭を叩いてやるのだろうが、そうはできない雰囲気だった。ぶら下げたかばんが揺れている。

スペイには向いていない。自分でいつのもなんだが、こいつそりあとをつけるのはいやらしい。

「美里、悪いが先に帰るからな」

急ぎ足で貴史は美里を追い抜いた。はつとした表情を向ける美里だが、それ以上声をかけることはなかった。

いつたい美里が何を考えていたのか、わかるようではわからない。たぶん立村に最終通告を突きつけたのか、それとも泣き落としきかけたのか。

あいつは負ける勝負をする奴じゃねえからな。

自転車置き場で自分の愛車を引き出すと、貴史はゆっくりと校門へ回った。どちらにせよ、校門を抜けないと自転車組は学校から出られない。この辺でもう一度スタンバイしていようと決めた。

盗み見するのは汚いけれど、待っているなら別にかまわないだろう。

偶然を装つのもひとつ手だ。

校門に戻り、自転車をつけた。部活に入っていない連中が貴史の顔を見て、

「あれ? 今日は清坂さんと一緒にじゃないの?」

と声をかける。おそらく美里と付き合っていると思われているのかもしれない。立村と美里が公認の関係になった現在でもそういうのだから、前はさらにそうだったのだろう。貴史は首を振つついでに手を挙げた。関係ねえよ、の意味だ。

立村は校門を出てねえのか。

大急ぎで教室を飛び出していったのを見たから、帰つたとしたら

とつぐだろ。

美里が泣き出さんばかりで「行っちゃった」と口走ったのだから。けどな、立村のことだ。評議委員会の関係かもしれないだろ。本条先輩とまた「ホモ説」のやり直ししているのかもしれないしな。しかし美里にせよ、立村にせよ、なんで俺にこんな面倒かけるんだよ。つたぐ、ガキじゃねえんだから、自分のことは自分でやれってんだよな。美里はいいさ、まだあいつだつて一応は女子だ。紳士であれつてことだからな。けど立村。お前、もつとましな大人だと思ってたのにな。もう少し男として、それなりのことしろよ。まるで俺はお前と美里の保護者じゃねえか。

保護者？

風が首筋をすり抜けた。

そうだぜ。南雲さつやと氣付けよ。俺と美里と立村とは、お前と奈良岡のねーさんは違うんだ。単に別れてくつついていちゃついてつて、そんなあつさり終わるような関係じゃねえんだ。どうちがくつついても別れても、ずっと盛り上がりつていけるんだ。そんなことも気付いてねえなんて、所詮お前もそれまでだな。どこにいるのかわからない南雲に思いつきり、悪態をついてやつた。

生で口には出さない。自分がわかつてれば十分だ。

自分の位置を見極めているから、貴史は今、校門にいる。

美里がひとりで戻つてくるか、それとも立村を捕まえてふたりで帰つてくるかは神のみぞ知る。

だいぶ人がひけた。校門の前で空を見上げながら漫画を引っ張り出して読んだりしているが落ち着かず、後ろばかり振り向いていた。

美里、おせえなあ。

「ないしょ」と秘密めかした口調を思い出し、貴史は深く深呼吸をした。

だからお前だつて俺に男心の研究についてもう少し突つ込めばよかつたんじゃねえのか。まさか別のところで泣いてるなんて言

わねえだろうなあ。立村と別れて修羅場だつたなんていうなよな。
三十分近くたつたけれども、まだ立村が通つた形跡はなかつた。
また美里もいなかつた。自転車通学の連中の中にふたりはいなかつ
た。

まさかまさかとは思つが、もつとすげえことしてるんじゃね
えだらうなあ。

よく学園漫画のH・ピソーネに出できやうなラブストーリーが思い
浮かび思いつき受けた。

美里がヒロインだなんていつたら笑いすぎて臍が取れそうだ。

「美里、おい、美里か」

田を凝らすと、見覚えのある自転車が砂利を弾いていた。貴史が
知らず知らずのうちに名を呼んでいた。

遠くから見ても美里だと分かるおかげで髪が遠めでも揺れていた。
表情はわからなかつた。

ひとりだ。

立村はいなか。

待ち人、来ないつて奴か。

貴史は校門の影から出で、真つ正面から美里を待つた。途中で自
転車を止めた様子。美里らしき自転車の主が降りて、ゆっくりと引
いて進み始めた。かすかに頷いているように見えた。手は振らなか
つた。

泣いてなんか、ねえよな。

貴史は仁王立ちのまま、じつと田を凝らしつづけた。美里が逃げ
ずに近づいてくるのを待つた。

昨日、徹夜して何度も書き直したレポート用紙。表紙には「企画書」と書いておいた。

ふつつの手紙で書い「つものなら、他の男子連中に立村くんが奪われてしまい、物笑いになる可能性大だからだ。美里なりに最善を取るすといこう形になる。

これでも、こやだつて言つならしかたないよね。

夜中の三時にやつと納得できるものが仕上がつた。もう一度机の中にあさまつてこいる着物姿の立村くん[写真を取り出し、両手で温めた。闇の中、じつと胸に抱いた。

「どうか、うまくこきますよつ」。

貴史には詩子ちゃんとのことを話さなかつた。話すタイミングがずれただけだつた。

一応立村くんに突きつけられた三行半の件のみ、伝えた。最低限の会話だつたし、貴史もめずらしくつこんでこなかつた。だから、今のところ詩子ちゃんとの会話は美里の胸に収められている。

簡単に言いたい話題ではなかつたからなおさらだつた。家に帰つてあらためて思うと、自分でもずいぶん残酷なことを言つてしまつたものだ。美里は嘘をついたつもりがない。むしろこつかははつりと口にしなくつちやと思っていた。でも、その重さが楽屋の中では和菓子の甘さ以上にくるものがなかつた。

だつて、せっかく一生懸命踊つたんだから、もつと堂々としてほしかつたんだもん。詩子ちゃんは小学校の時ずっとりりしくて、くだらない男子の悪口を無視して、気に入らない女子たちとは堂々と喧嘩してたんだ。そんな詩子ちゃんが私は大好きだつたんだよ。けど、どうして六年になつてからああなつちやつたのか、私はわかんない。

中学違つたつて、友だちでいられたはずだよ。ふつうにして

ればね。

私は詩子ちゃんと、ふつつの友だちでいたかつただけだよ。

そんなべたべたした、トイレに行くのも一緒に、どこにいても私と同じ班になりたがる、そんなのがすごいやだつただけだよ。そういう子じやくなつていたらつて、どつかで思つてたのに。

全然変わつてないじやない。詩子ちゃん。

身勝手かもしけないけれど、美里の方が裏切られた気持ちだつた。親姉妹、そして貴史にも言えないことをつい、詩子ちゃん本人にぶつけてしまつた。自分だつたら百発くらゐ言い返すだつうが、詩子ちゃんはただにらみつけるだけだつた。たぶんこれで友情らしきものは終りだつう。立村くんにせよ詩子ちゃんにせよ、どうして自分はここまで人間関係を壊すのが得意なのだつう。後悔はしないからなおさらやつかいだ。

こういう時、誰かに話したいよね。

桃太郎風のベストっぽい衣裳に桃色の短い着物を着た少女。兎の耳を白い鉢巻につけていた詩子ちゃん。

詩子ちゃん、衣裳は変だと思つたけど、蟹股踊りは変だと思つたけど、でも舞台では堂々としてたよ。あんな詩子ちゃんだつたらよかつたんだよ。

そうだよ、昨日の立村くんみたいに。

「立村くん」という言葉が浮かんだとたん、一気に明日の答えが紡ぎ出されてきた。どうすれば立村くんに前言撤回させることができるだろう。ぼやけていた答えが、詩子ちゃんの舞台と会話を思い出したとたん、あつさりと思い浮かんだ。

だから「企画書」なのよ。立村くん。

美里は大きめの茶封筒に「企画書」を詰めて、封をしないままかばんにしました。

立村くんはたぶん、美里の求める付き合いができるだろう。あらためて思つたが立村くんはかなり強情だ。どんなに美里が頼ん

でおだててみても、全く微動だにしなかった。覚悟を決めたら絶対に動かさないタイプなのだろう。なんとなくそういうところを感じないわけではなかつたけれども、自分がターゲットにされるとかなり苦しい。

でも、美里や貴史のことを「友だちとしては一番大切な存在」とも言つていたではないか。

美里が「これはひっくり返せる！」と掴んだのはこのあたりだ。

今まで美里は立村くんが、自分のことをどう考へているのかを掴みかねていた。もちろん多くの友だちの中では仲のいい方だと思つていたし、つきあいをかけたときだつて「清坂氏をひいきする」と断言してくれた。それなりのことをしてくれた。でも、一年の杉本梨南さんや、こずえとかとはかなり仲良くしているようだし、「その他大勢」の扱いなのではという不安もないわけじやなかつた。

でも、立村くんは、貴史と私を、特別な人だつて思つてくれてたみたいだ。

貴史と一緒につてのがちょっとね、ひつかかるけど。でも、女子では私を特別にしてくれてるつてことは確かなんだ。立村くんの口からはつきり引つ張り出せたのは収穫だよ。

嫌われているなら脈がないとあきらめるしかいけれど、脈は大ありじやないか。

要は、美里側の要求と立村くん側の要求をすり合わせた形で、もう一度検討をお願いすればすむことだ。

ずつとひとりで考えた後、出した結論を「企画書」に詰め込んだ。

次の日は天気がうす曇だつた。貴史と誘い合いつものように話をしつつ教室に向かう。やはり立村くんが先に到着していた。こずえを相手にまた夫婦漫才やらかしている。顔は青白いままだけど、こずえを相手にするのだったらそんな気を遣わないですむのだろう。こうじうつきあいを立村くんは求めているのだろうか。

私だつてできるのに。

美里はつぶやいた。昨日のことをなんて水に流したよつた顔をこじらえた。

「立村くん、あのね、企画書。あとでひとりで読んで、和室で冷たい視線を投げかけた時の立村くんとは違い、相変わらず目が定まらない。」

「あ、あの清坂氏」

「だから企画書だつてば」

大丈夫、ちゃんと、立村くんならわかつてくれるはず。

六時間、美里は知らん顔して通すことに決めていた。どんなことがあっても、提案した答えを教室では受け取りたくなかつた。立村くんはじつくり考えて答えを出したい人だらう。だから六時間、考える時間をあげた。美里のできる譲歩はここまでだ。

たつたひとつだけでいいから、立村くんと私の秘密がほしいの。

それだけでいいよ。私、立村くんのプライバシーをしつこく突つ込むことしないから。

貴史にも、南雲くんにも言つていない、私だけの秘密をください。

隣りのこずえが「こいつ何やつてるんだる」と言いたげな目で美里と立村くんを見つめていた。でも何も言わなかつた。後ろで貴史も美里をちらちら眺めていたが、やはり何も言わなかつた。

ふたりとも、気付いていても言わないでいてくれる。

ありがと、貴史、こずえ。やっぱりあんたたちは私の親友だよ。

私、詩子ちゃんに言つたこと、後悔しなくていいよね。

立村くんの様子は特別変わつたところもなかつた。評議委員として最低の会話を交わすこともなかつた。仕事がそれほどないというのもあつたのだろうか。六時間目が終わるのを時計とにらめっこして待ち、美里は号令をかけた。帰りの会が終わるまでは、立村くん

を見ないと決めていた。

「お先に」

すり抜ける声。美里は立ち上がった。

「あ、立村くん」

思わず声が出た。立村くんは知らん顔して、一言だけ残して教室を出でていってしまった。

「美里、どうしたんだ」

相当まぬけな顔をしていたのだろう。貴史がかばんを頭に載せたままやつてきた。

そうとうお笑いの格好をしているのに、それを笑えない。

帰っちゃった。立村くんが。

心の中でとどめておきたかったのに、貴史の側では言葉がもれる。

「どうしよう、帰っちゃった」

日本語わからない外国人風に肩をすくめ、貴史が返す。

「は？ そりや家があるんだ帰るに決まってるだろ」

「違う！」

両手を握り締めた。怖くてがたがた震えてくる。強い口調にひいたのか、貴史が顔をのぞきこんできた。何か言われる前に逃げたい。どうしていいかわからない。

「貴史、悪いけど私も帰るから」

いつもならば貴史をひっぱつてつてさんざん立村くんのつれなさをぐちることだろう。もしくは手伝わせて立村くんを捕獲することを考えるだろう。それが美里のいつものやり方だ。でも、立村くんにそれは通用しない。どんなに美里が言葉を尽くしたって、立村くんは「清坂氏の求めることはできない」と言い放つだけだろう。あいうことを言える人ではないと思っていた。言わないでずっと優しくしてくれる人だと思っていた。でもとうとう美里は立村くんを追い詰めてしまった。

なんですよ。どうして立村くん帰っちゃうのよ。

ちゃんと自転車置き場で待つて「企画書」に書いたよね。私。

立村くん、どうして。

勝ち目がない戦いはしない。だから「企画書」を渡した。でも、それが甘かつたのかもしれない。

そんな、そんな。

「おい、待てよ」

貴史の声が追いかけてくる。振り切つて美里は歩いた。予想に反して貴史はそれ以上追いかけてこなかつた。ありがたかつた。今にもぱちんとはじけそうな涙の塊を、見られたくなかつた。

自転車置き場は銀杏並木の真下に位置していた。雨にぬれないようちゃんと屋根がついていた。自転車をひっぱりだして、もう一度砂利道を横切つて走り、校門に出る。

美里はサドルに腰を押し付けたまま、かばんを籠に入れた。

来るわけ、ないか。

さつき貴史が急ぎ足で

「先に帰るからな」

と去つていたところを見ると、たぶん美里の計画はばれていないのだろう。貴史にも最低限のことしか話していないのだから当然だ。結構美里と貴史とはお互いの考えが読めてしまうので、心配そうにくつつかれたらまたものではなかつた。

「あれ、美里、今日は立村くんと帰るの？」

同じく自転車通学の同級生に声をかけられ、美里は、

「うん、そうだよ」

と答えてしまつた。もう一度と帰らないかもしれないのに、条件反射で。

一通り顔見知りの子たちが自転車と一緒に帰つた後、美里は時計を覗いた。まだ十分くらいしか経つていなかつた。いつも立村くんは適当なところに自転車を押し込んでいた。銀色の細身な自転車だ

つた。手入れはよくされている。籠はついていないので後ろにひもでくくりつけていた。そつと近づいてみて、ハンドルのところを指先で触れてみた。冷たかった。

一時間待つてもこなかつたら帰る。

時計の針が四時になると五分近づいた頃だった。

「清坂氏、遅くなつてごめん」

背中で声が聞こえた。振り向く前に美里は唇を一文字に結び直した。でないと、表情が丸見えだから。

「立村くん、来たんだ」

一本調子の声で答えた。声が震えるのをできるだけ聞かせたくないかった。

「どうして向こう側から来たの。ずっと生徒玄関の方見てたけどいなかつたから」

「うん、後ろの窓から飛び降りた」

「え？」

言つてゐる意味がわからない。じつと美里は立村くんの顔を見つめた。嘘じやないかを確かめた。

「四日間休んだ分、補習があるから先生たち全部に頭下げてきて、予定を決めてきた。生徒玄関から出るとたぶん、遅くなるから、職員室の窓から」

確かに職員室の窓から自転車置き場は真つ正面だ。最短距離ではある。

「誰にも見られなかつたの」

「わからない。窓はあきっぱなし」

遠くの反射光が見えなかつた。たぶんあそこから立村くんは走つてきたのだろう。

靴が黒の上靴だというのが、嘘じやない証拠だつた。立村くんは少しだけ息を切らせていて、片手には茶封筒を丸めていた。美里の渡した「企画書」だろう。でもふらつていなかつた。真つ正面か

ら美里の顔を見つめていた。昨日よりもまだ、温もりのこもったまなざしだった。

言葉が出なかつた。出すと、泣けそうだから。

立村くんは美里の目を見たまま、ゆっくりと言葉を発した。

「昨日の夜、藤野さんの様子を『なおらい』つていうか、お疲れ様の会みたいなところで観察していたんだ。俺もやはり、気になつていたところがあつたから。確かに機嫌はよくなかったみたいだし、俺が清坂氏の知り合いでことで、かなり考えるところがあつたみたいだ。それ以上のことは話していないからわからないけれど、でも初舞台が無事に終わつたことそのものはよかつたと思っているようだつた。だから、何がどうつてことはまだないけど。でも」息をついで、企画書を丸めたまま持ち替えた。

「今は放つておいてやつた方がいいと思つ。まだまだ時間があるし、それに、俺もちょくちょくそつちの情報を仕入れて清坂氏に教えたりすることもたぶんできると思うから」「

「私の間一切、立村くんは視線をゆるがせなかつた。
「私に教えるつて、その、日本舞踊のこととか、詩子ちゃんのこととか？」

「うん。もし清坂氏がよければ。それと、」「

じばらぐ口籠もるよう、美里の自転車の籠をいじり始めた。

「もうひとつ、約束があつたよな」

「私と、立村くんとの、秘密。

さすがにここではうつむいた。立村くんは籠に企画書の入つているらししい茶封筒をぽんと入れた。

「本条先輩が、公立受けるんだ」

本条先輩が？

驚きよりも何よりも、美里の頭に浮かんだ言葉。

「本条先輩と、秘密とどう関係あるのよ」

同じく平坦なままの言葉で答えた。

「今年の七月、評議委員会合宿の時、聞かされたんだ」

「そういえば立村くんは評議委員会合宿中ずっと、本条先輩にべつたりくつついていた。泊る部屋も一緒に行動するも一緒に。ふたたび「本条・立村ホモ説」がささやかれるのも無理はないような状況だつた。

「でも、どうしてなの」

「今日の朝、直接本条先輩に聞きに行つたんだ。直接はつきり聞いてみた。そうしたら、家の事情で青潟から出るか、それとも上のお兄さんと一緒に青潟に残るか、選択を迫られたらしいんだ。それで、本条先輩は公立に行くかわりに、青潟に残ることを選んだつて立村くんは息をとめずに勢い良く続けた。

「三ヶ月聞かないでいたの？ 私だつたらどんどん追及しちゃうな」「聞いたらだめだと思ってたんだ。だから賭けだつた。本当のこと言つても、もしかしたらうまく行くかも知れないつて思つたから立村くん、嬉しかつたの？」

美里はゆっくりと尋ねた。

「うん、公立に行かれることがずっとショックだった。けど、青潟にいなくなるよりはずつといつて、今はそう思つてる。三ヶ月悩むよりも、そつちの方がよかつたつて、今はそう思つんだ」
ずっと籠の中に目を落としたまま立村くんが話している。美里はゆっくりとつぶやいた。

「本条先輩がいなくなることつて、そんなに立村くんには大きいことなの」

「こんなこと言つたらまたホモ説だとか言われるんだうつな」
かすかに笑みを浮かべ、立村くんは片足をかけるようにして美里に向き直つた。

「俺にとつてあの人は、いつかああいう風になりたいつていう相手だから。どんなに口に出しても伝わらないつて思つてたんだ。変な意味じゃない。ああいう風に人を上手に使って、巧く評議委員会を仕切つて、それでいて後輩たちに思いやりを持つていて。そんな人

なんだ。けど、そんなこと言つとまた、ホモ説を吹かれるだけだと思つて羽飛にも清坂氏にも言わなかつたんだ。でも今の清坂氏なら、そういう気持ちをわかつてくれるかもしれないってちょっとだけ思つた。だから

立村くんが語る言葉よりも、その眼の光を美里は受け止めた。逸らさなかつた。

「わかつた。合格」

まだみずみずしい黄葉した銀杏を拾つた。ほおつと肩が下りたようになつた。

「だから、これからも、お願ひします」

茎をつまんで立村くんに差し出した。受け取り、ほんの少し見下ろす感じで立村くんも答えてくれた。

「先は長いけど、これからよろしくお願ひします」

正直なところ、どうして本条先輩の公立進学が立村くんにとっての秘密なのか、腑に落ちないとこもあつた。立村くんにとつて本条先輩が最大の憧れだというのは想像ついていたし、美里も公立進学という話は初耳だつた。ショックがないとは言えない。成績のいい本条先輩がなぜ、そういう究極の選択をせざるをえなかつたのだろう。

もつと、別の秘密つてなかつたのかな。立村くん。

まだ未練が残つてゐる自分に気付く。

だつて、本条先輩が公立受験するつてことは、来月あたりになつたらばれちゃうよ。立村くんが三ヶ月真剣に理由を聞くか聞くかないか悩んでいたのはわかるけど、そんなの秘密じやないよ。

もつと別の言葉をほしがつていたのかもしれない。

もつと別のことをしてほしかつたのかもしれない。

立村くんが籠に目を向けたままひとりがたりしてゐる間、気持ちが右往左往してゐた。拍子抜けしたという感じだつた。もつと、つきあいたい同士だつたらすることがあるはず。言つてくれることが

あるはず。 私のことを、本当はどう思つてゐるのかとか、ね。 でも、語つている間の立村くんを見ていると、話の内容などどうでもよくなつっていた。本条先輩が公立に行こうが行くまい、関係ない。横顔がひきつり、何度も瞬きをして、つんとつづいたら崩れそうな程早口にしゃべつづける立村くん。あまり美里が見たことのない姿だった。

だから、今はそれだけでいいよ。立村くん。

私に、今まで見せないとこを見せてくれたんだから。今はそれでよしとしとく。

「清坂氏、悪いんだけど、今日はもう一度職員室に戻つて補習の資料をもらつてくるから。先に帰つていい。もし羽飛がいるようだつたら一緒に帰つてもいいしさ」

「え？ また戻るの？ まさか窓から？」

「いや、生徒玄関から。上履きの泥落としてもう一度行つて来るんだ。それに開け放しの窓を閉めないとあとで怒られる」 自転車を押しながら立村くんと並んで歩いた。生徒玄関の前でもう一度、頭を下げた。

「じゃあ、わかった。また明日ね」

立村くんは素早くすのこの上で靴を脱ぎ、なんどか地面に叩きつけていた。知らん顔して上がつてしまつてもいいのに。じつはこうが律儀な人だ。

美里は背を向けて校門に向かつて自転車をこいだ。砂利道の石が勢い良すぎて遠くに飛んだ。とたん、田の前にいる制服姿の男子に気が付いた。

貴史、先に帰つたはずなんになんでいるのよ。 自転車を止め、下りた。美里は一度立ち止まって正面から貴史の姿を見据えた。

待つてくれたの？

今までのパターンからすると不思議なことではない。だんだん身

体が温かくなつてきた。風で冷え切つた手が、ぬくもつてきた。今起つたことを、立村くんとの内緒部分を覗いて、すべて話すことができる相手が、そこにある。せつと、喜んでくれる奴がそいつである。

貴史、貴史、あのね。私、立村くんと。

「どうしたんだお前」

「あのね、立村くんと」

言葉にならなかつた。立村くんの前では涙が出なかつたのに、貴史の前では平氣だつた。思いつきりしゃくりあげた。鼻水がずるずる言ひ、ハンカチで押さえた。

「奴と会つたのか」

「うん、今までどおりでいいって」

「今までどおり?」

「うん、立村くんは私と貴史、同じくへりい大切だつて言つてくれたんだ。だから、これから」

あとは言葉にならなかつた。

「ほらほら、ひでえ顔だぜお前。ほらたまごと動くぞ。よくわからんがうまくいつたんだつたら今日はたいやきを一匹おいれよ。めでてえなつてことでな」

貴史があきれた顔して文句を言ひてゐる。通りすがりの鯛焼き屋さんで焼きたての一匹を包んでもらつた。

「何隠してるんだよ」

「ないしょ」

こつんと額をつつかれた。貴史にたいやきの入つた包を渡し、美里は千切つて口に放り込んだ。

「貴史、これからも男子の心理についてレクチャー、よひしくね」

美里は半分しつぽの方を千切ると、貴史の口に無理やり押し込んだ。

「おこ、お前なにするんだよ。あちい、まじで口の中やけどするかと思つたぜ。」

口をたするよにしてあがあがあさせながら、貴史が必死に飲み込んでいる。面白い。にやにやしながら眺めていると、貴史ははあはあ舌をぴろぴろさせながら、

「つたく、俺つて美里と立村の親代わりじゃねえかよ。世話の焼け奴らだぜ。まあまかせとけ！ 俺が全部面倒みてやるぜ！」

いつか自分を取り戻した詩子ちゃんと友情復活できるかもしだい。

まだまだ先の話かもしれないけれども、できればその時まで立村くんにいっぱい相談にのつてほしい。

今の立村くんにとつては美里に打ち明けられる秘密が本条先輩のことくらいのかもしれない。

物足りないけど。ちっちゃな一步だけ。

じつせこれから、貴史と同じくらい立村くんとも秘密が増えしていくはずだもんね。第一段階突破つてことで、いいかな。ね、貴史。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6787e/>

ふたいろの幕がおりるまで～青潟大学附属シリーズ中学編

2010年10月8日14時56分発行